アン公、バツソンピエール元帥、財務宰相ジヤツク・フウケエ、有名な毒殺者ブランヴイーリエ侯爵夫人、啓蒙文學者のヴオルテール、終生父の寃罪雪辱に努力しつづけたラリ・トランダル侯爵などがあり、國事犯政治犯で一人としてこの牢獄の門をくぐらぬ者はないといつていゝほどだつた。

バスチーユ監獄はシヤルル五世の時代、一三七〇年に巴里西方の堡城として巴里市長ユーグ・オーブリオルによつて築城されたもので、最初に「寶物の塔」と「禮拜塔」、續いて「自由の塔」と「ベルト・オーヂエール塔」を加へ、更に一三八三年シヤルル四世の時代に「角塔」「井戸塔」「伯爵塔」「バアヂニエール塔」の四つが建て增されて都合八つの塔を持つやうになつた。

各々の塔は矢狹間のついた嚴しい城壁で連ねられ、塔の上には大きな投石孔と高い見張臺がついてゐる。矢狹間には十三門の靑銅砲を据ゑつけ、周圍には深い濠をめぐらし、監獄の門には巨大な飜轉橋が架かつてゐて、日沒の太鼓の合圖と共に引上げられる規則になつてゐる。

塔の頂上の矢狹間までの高さは二百三十尺。濠の幅は十五間、深さは三十尺。二個の水門で直接にセーヌ川に續き、滿潮時になると水が塔脚を浸すので、どのやうな方法を以つてしてもこゝから脫け出すことは思ひもよらない。

バスチーユ監獄二百年の歷史のうち、たゞ一度ポンパドウル夫人の毒殺を企てたマゼール・ド・ラチユードといふ男が成功したたけだつた。しかし、この幸運なラチユードも十二時間後に巴里市內で

逮捕されまたこゝへ送り戻されて來た。

聖タントアンヌの市門を入つて監獄の飜轉橋を渡ると、第一と第二の二つの鐵の城門がある。それを潛り拔けると丸石疊の廣い中庭になつてゐて、その中央に典獄の官舍と看守番兵の營倉、厩舍、堀拔井戸、料理場などがひと塊になつた一廓があつて大きな內濠で八つの塔と隔てられてゐる。

監房のある八つの塔の入口にはそれぞれ嚴重な鐵門と哨所があり、その門を入ると取附から擦滅つて眞中が窪んだ暗い石の階段がはじまる。

八つの塔の地下はそれぞれ地下牢になり、一階は看守牢番の居室、第二階目から監房がはじまる。

監房の數は全部で四十二で縱橫十七米ほどの眞四角な部屋。部屋には二つの縱長な窓があつてこれに太い鐵の棒がはまつてゐる。窓といつても銃眼式の幅の狹いものだから、こゝから射込む陽の光はごく僅かで、天氣のいゝときも部屋のなかは薄暗い。

監房の入口は二枚の鐵扉で嚴重に閉され、時代のついた赤錆の扉の蝶番の油が切れ、開閉するたびに鋭く軋めいて何ともいへぬ不快な音をたてる。

監房の壁に寄せて造り付になつた粗木の木の寢臺があり、その脚元の壁は龕のやうに窪んで水飲みコツプや皿などを置く場所になつてゐる。他の道具といへば、同じく粗木の小さな卓に藁椅子が一つあるだけ。

何といつても百年も前に出來た建物だからいたるところに蜘蛛が巣を張りまはし、青苔が生えていつもジメジメとしてゐる。

四圍の壁には、この世の最後の日の記念にと死刑場に曳かれる年月日を認したものや、また政府や惡政を呪詛する言葉の數々、薄命な己の生涯を嘆いた斷片の詩などが到るところに彫りつけられてある。

今日は九月の第四の日曜日で、バスチーユの囚人が一同禮拜堂で彌撒を聽く日。

囚人といつても、この牢獄に幽閉されたものは殆ど全部が國事犯人なのだから彌撒を受けることだけはどのやうな囚人にも許されてゐる。

秋晴れの天氣のいゝ朝で、もう間もなく禮拜堂の彌撒の鐘が鳴らうとする頃、ベルト・オウジエール塔の入口へ出て來た二人の牢番があつた。

どの牢獄でも通例になつてゐるが、煩はしい本名などで牢番を呼ばない。身體の特長で附けた綽名で呼ばれるとか、または本當の名をちぢめて簡略に呼び慣はすとかするが、いま出て來たのは、ルの字とブの字と呼ばれる二人の牢番。

ブの字の方は五十そこそこの胡麻鹽頭の痩せた男。ルの字の方はずんぐりの赭ら顏で、肉屋の亭主然とした中年の男。門のそばの陽溜りの中で囚人が中之濠を渡つて中庭の奥の禮拜堂へ送られて行くのを見送つてゐたが、中庭に人影のなくなつたのを見すますと、ブの字は、囁くやうな聲で、

『なア、ルの字。もう、そろそろ典獄のペスモオが鐵假面を監房から連れ出してこゝへやつて來る。お前と俺がこの門の入口で引繼いで鐵假面の頭に麻の袋をかけ、人に見られぬやうにして禮拜堂まで連れて行く。こゝまでは今まで通りの規則で格別變哲もねえわけだが、さて、それからが大事。今までに例のねえことをやつてのけなくてはならねえ。いはゞ千番に一番の兼合ひ。こいつが下手くいつて露見でもした日にやア、バスチーユの掟で生涯陽の目の見られぬ水浸しの地下獄へ投込まれなくてはならねえ。……どうだ、ルの字、確かな才覺があるのか。俺は何だか怯氣がついてきた』

ルの字と呼ばれた血色のいゝ男はジロリと相手を見返つて、

『いゝ齡をして今更何をビクシヤクする。折角、運が向いてきたのに、かういふ折を逃したら、生涯、牢番の足を洗ふことは出來ねえ。お前にしてからがさうだ。預かつたものさへ巧く鐵假面の手へ握らせて「ソアツソン伯爵夫人」とひと言相手の耳に囁きさへすれば、萬と纏まつた金が轉がり込むのだ。フオントネエあたりの庭のついた小綺麗な家を買込み、セイヌ川で毎日河沙魚でも釣つて樂々と隱居ぐらしが出來るんだ、結構な話ぢやねえか。……俺の方はお母アと三人でルウアンへ歸り、果樹園のついた地面でも買ひ、お母アの望み通り牛でも飼つて暮すつもりなのサ』

『それは、さうだけどサ』

『どうでもお前が氣が進まねえといふのなら、俺が一人でやる。お前の方までそつくり頂戴するんだから、俺としちやア、その方が結構。お前は指を咬へて見てゐるがいゝ。……だがなア、ブの字。お前にしたところが、一旦ウンと承知してもう半金を受取つたンだから、今更、こゝで手を引いたつて、露見したときは、やはり同罪』

ブの字は、狼狽へて、

『さうまで言はなくともいゝやな。何も厭だと言つてやしねえ。どんな方法でやるつもりだと訊いてゐるンだ。……中庭は八方見透し。城壁の上にはあの通り番兵が鐵砲を擔いで往つたり來たりしてゐる。官舎の二階や料理場の窓。どこに眼があるか知れたもんぢやねえ。下手な仕事でもしたら忽ち怪しまれて兩手に枷がついてしまふ』

『何を恍けたことを言つてゐる。誰が中庭なんぞでやるものか。鐵假面は聖堂の二階の特別の聽問室へたつた一人だけ入れる。こつちにすれば、そこが附け目。禮拜堂の二階へ上つたら聽問室まで行く廊下の途中で右と左から素早く一件を手渡しすれやそれでいゝのだ。合點がいつたか』

ブの字はしたり顏に頷いて、

『なるほど、それア名案。あの廊下には番兵も見張もゐねえから、あそこでなら何とか巧くやれさうだ。それがいゝ、さういふ手筈にしよう』

と言つてゐるとき、眞向ひの「伯爵の塔」から出て來た二人の牢番。中之濠を渡つて來て、ちやうど鐵假面が出て來るのを待構へてゞもゐるやうに、第二塔の前でうづくまつてしまつたので二人は驚き、じぶんらの計畫がどこからか洩れ、典獄が鐵假面を禮拜堂に送る役をこの二人に云ひつけたのではないかと思ひ、怯えたやうに眼を見合せてゐたが、ルの字は咄嗟に顏色を和らげていま來た二人の方へ去氣なく近づいて行き、

『おいおい、どうしたんだナ、寢恍けちやいけねえよ。今日はお前らは非番だぜ』

と上手に探りを入れると、いま來た一人はセセラ笑ひ、

『何をいやがる。この牢獄に俺ほど長く勤めた男が、手前の非番の日を忘れてなるものか』

ルの字は、透かさず、

『非番を忘れねえやつが、何でこんなところで用あり氣にマゴマゴしてゐるのだ』

もう一人の方は頭を搔き、

『それアこの二三日前から鐵假面を被つた囚人がまた一人殖えたのでそいつの內の一人を禮拜堂まで連れて行く役を承つて非番にもかかはらずお出張りになつたといふわけなのサ』

ルの字は、ひツと息を呑み、

『何なに、鐵假面が二人になつたのだと』

『あゝさうさ。いま言つた通りだ』

四人の後で重い鐵の扉が開く音がして、いつものやうに典獄のベスモオが自分で鐵假面の手をとつて第二塔の出口へ姿をあらはした。

ブの字とルの字はいまこゝへ現はれたのは今までの鐵假面かそれとも新規の方か見究めようと忙しく瞳を動かして眺めたが、囚人の着る水色のダブダブした長衣に同じやうな鐵の袋で頭を包んでゐるので、これがどちらと見分ける方法がない。仕樣がないから、ともかく先に出てきた方を受取つてみようと、ルの字は素早くブの字に眼配せして、二人を押退けるやうにして典獄の方へ近づいて行くと、ベスモオはルの字には眼もくれず、うしろの二人に、

『さア、お前ら、これを聽問室まで連れて行け』

と命じておき、拔かりなく門の扉を嚴重に閉してまた塔の上の方へあがつて行つた。

ルの字とブの字は毒氣を拔かれたやうな顏付で、二人の牢番に左右から手を捉られて行く鐵假面の後姿を眺めながら、

『どうもこれは驚いた』

『妙ちきりんなことになつたもんだ』

と溜息まじりに同じやうなことを言ひ合つてゐたが、ブの字の方はまた弱氣な聲になつて、

『なア、ルの字、思ひがけねえことになつたが、かういふ經緯になつたからはこれア止すはうが利口さうだ。せつかく骨を折つて一件を渡してみたところが人違ひだとあつては褒美の金にありつくことも出來ねえ。無駄骨を折つて鷹に取られ。……賴まれもしねえやつを助けて怨まれた上、一文にもならねえぢや、こんな馬鹿げた話はねえからナ』

『また十八番を始めやがつた。俺たちア鐵假面に品物を渡さうと受合つたが、鐵假面の中味まで引受けた覺えはねえ。どつちがどうだらうと構ひはしない。引受けた通り鐵假面にさへ一件を渡しやア文句はねえのだ』

『あゝ、さうかさうか』

『何を言つてやがる、わかりきつたことぢやねえか。……しかし、まア、俺のかんがへぢや、非番の相役を呼出したのは、いふまでもなく新規の方を連れて行かせるためなのにちがひない。今までの鐵假面の方は附番になつて以來、おいらたちが連れて行くことに決つてゐるんだから、今までのしきたりを變へて殊更あいつらに渡すやうなことはありやしない』

『さう云はれゝばそれもさうだ』

『しかし、念には念を入れといふこともあるから、禮拜堂の二階へ行つたら、そつと「ソアツソン伯爵夫人」と囁いてみれや、新規か古手かすぐにわからうといふものサ。伯爵夫人の情夫の方なら必ず

ウンとかスンとか手應があるにちがひねえ。さう囁いてみて、相手が合點の行かないやうなやうすでもしたら、そいつは新手の方なのだから、えへン、とか何とか誤魔化して一件を渡さずにおく』

ブの字は膝を打つて、

『ちげえねえ、なるほどお前は智慧者だ』

『ぢや、さういふ手筈にするから、合ツ點だナ。しつかり確かめねえうちに泡を喰つて品物なんぞを渡すんぢやねえぞ』

『合點だ』

『ちやうど相談が終つたところへ、また背後でドンと扉が開く音がし、スツポリと頭から麻布の袋を被ぶされたもう一人の鐵假面がベスモオに手をとられてソロソロと塔の入口から現れて來た。

爪先まで隱れるやうな水色の長袍の兩袖は膝のあたりまで垂下り、スツポリと假面の上から被つた麻布の袋の端が木蔦の耳のやうにおつ立ち、兩足に結びつけた鎖が歩くたびに裾のなかでジャラジャラと陰氣な音をたてる。さながら煉獄に落ちた劫罰の精靈が眞ッ晝間幽冥界から迷ひ出したかと思ふばかり。典獄はモジャモジャした白い眉毛の下から鋭い眼で二人の頭から爪先までジロジロ一二度見上げ見下してから、

『今度は貴樣らの番だ。そろそろ彌撒の鐘が鳴るから急いで連れて行け。さア、こツちへきて手を取れ』

二人はキョトキョトといま出てきた鐵假面の姿を眺めると、身丈も肩幅も先程のと瓜二つ、どこぞといつて區別をつけられ特徴もないから我ともなく思はず輕く舌打すると、さすが長年地方の小監獄から叩きあげて佛蘭西第一の大監獄の典獄に成上つただけあつて、かういふことには一種獨特の鋭い感が働くと見え、逸早くその素振に眼をつけ、鷲のやうな眼差で二人の顏を見較べながら、

『何をマゴマゴしてゐる。……え、どうした。……貴樣ら、何か惡いたくらみでもしてゐるのではないか。……おい、ブの字、何をオドオドしてゐる。こいつ、胡散臭い奴だ。貴樣、一寸こつちへ來い』

ルの字はこゝが生死の別れ目と痙攣つた顏を無理矢理に愛想笑ひでひきほぐし、

『へ、へ、お氣に障つて申譯ありません。實は、こいつは食傷で、この二三日ろくろくスウプも喉へ通しませんところから、すつかり弱つてをりまして……』

ベスモオは胡散げにブの字の顏を睨め廻してから、

『何、病氣だと？……本來なら、もつと若い頑丈な奴を入れるところだが、半給金でもと殊勝なことをいふから、それに免じて置いてやつてゐるのだ。それだとて、病氣の辷つたのと勤めに事缺くやうだと容赦なく免職するからそのつもりでゐろ。今日だけは大目に見てやるから、さア、早く行け』

二人は虎の顎を逃れたやうな心持でホツと安堵の胸を撫でおろしながら、いつものやうに右左から

鐵假面の手をとり、中庭を通つて禮拜堂の入口の右手の階をのぼつてやうやく二階の廊下へ出る。左手に彩色硝子の窓があつて、右手に聽問室の三つの扉が並んでゐる。見廻すとあたりに人影らしいものもないから、さ、この間にと、ルの字は麻布の袋に口をつけ、忙しく、

『ソアツソン伯爵夫人』

と、ひと聲低く叫んだ。

鐵假面は一寸足をとめ、すぐまた何氣ない風でユルユルと歩みながら麻袋の首を動かして重々しく點頭いた。

さてこそこれが當の相手だと、ルの字は動悸を押へながら上衣の下から布に包んだものを取出してそれを鐵假面の手の中へ辷込ませながら、

『夫人がこれをよこしました。さア、早く』

ブの字も左の方から顫へる聲で、

『さ、もう一つ、これも……』

と、絹糸の梯子を丸め込んだものをその手に差しつけると、鐵假面は少しの躊躇もせず、手先に觸つたものを掴み取るより早くスルスルと左右の廣袖のなかへ引込んで內懷のなかへをさめ、まるで地の底からでも響くやうな聲で、

『有難い』

と呟くと、さあ連れて行けといはんばかりに悠然と兩手を差出した。

そのやうすから推すと、今日こゝでこのやうな品物を受取るのを豫期してゐたやうなふうなので、これならば間違ひはないと、また耳のあたりに口を寄せ、

『夫人が濠の外で馬車を用意してゐるはずですから、何日にやるか返事をして下さい』

鐵假面は輕く頷いたゞけでそれには答へず、じぶんの聽問室の扉の前でピタリと足をとめた。

この上は言葉をかけることもならず　返事はまた歸りにとひとり頷いて聽問室へ鐵假面を押入れ、階下の詰所まで引取つて待つてゐると、一時間ほどの後、彌撒が終り、囚人一同はそれぞれ牢番に附添はれて各々の塔へ取つて行く。

初めに來た者が初めに歸るのが規則なので、ブの字とルの字が聽問室の扉の前に立つてゐるうちにやうやく自分等の番になつたので、廊下に人影がなくなるのを見すましてから殊更に手間をかけて扉を開き、鐵假面を聽問室から引出した。

鐵假面は五六歩廊下を歩いてから唐突に口を切り、

『……說教を聽きながら道具を改め、仔細に計算したが、……窓の鐵の棒を挽切るには、……この道具で三日かかる。……今日は九月の二十七日だから、三十日の夜中に』

聲はおぼろげながら隙のない言葉つきは確かに一廉の騎士。ルの字は、思はず威に壓されて、恭うやしく禮をしながら、

『はい、相違なくお傳へ申します』

バスチーユ大監獄の第二塔、ベルト・オウジエールの最上階の窓から濠までは二百三十尺。人間一個の重量を蜘蛛の糸よりも細い絹の繩梯子に託して塔を脱しようとする。生死一髪の間。

六、空に搖れる黑い影並に、思ひもかけぬ顏

一六七三年九月三十日。

バスチーユの歷史が始まつて以來、まだ一人も破獄に成功した者はないといはれる大監獄から鐵假面が脫出するその夜になつた。

夕方から降りだした冷雨は夜に入ると止んで强い西北の風に變り、樹々の枝を吹き撓めてはドツと虛空へ吹きあげて行く。

空は一面密雲に閉され、低い雨雲が塔の頂きを掠めて矢のやうに飛んで行く。

十一時を過ぎ十二時も過ぎ、遠近の寺鐘が間もなく午前一時を報じ出さうとする頃、バスチーユの

東南隅、ベルト・オウジエール塔の頂上のあたりにブラリとぶら下つた小さな人影があつた。

眞四角な城壁の四隅にある隅塔の一つで、監房の窓は中庭のはうを向いてゐるので外濠のはうからその姿は見られないが、その高みはまことに驚くばかり。小指の頭ほどのその人影は時には朦朧とし薄れ、またぼんやりと現れだすのは、塔の頂きを掠める雨雲に包み込まれるからであらう。雲につゞくかとも思はれる高塔の頂きから逃れ出さうなどといふのは大膽と言はうか無謀と言はうか、殆ど人間業とも思はれぬ。

塔の頂きの人影は、やゝしばらくの間、蝙蝠のやうに塔の壁にへばりついてゐたが、間もなく五寸、一尺と目に見えぬほどづつソロソロと下りはじめた。

と、見るうちに塔の上の人影　俄かにグルグルと獨樂のやうに廻りだした。身體の重みで繩の縒が戻り、それがまた縒り返す。今にもブツツと繩が切れ、二百三十尺の地上に墜落して萬事こと終るかと思はれるうち、どのやうに丈夫に造りつけたものか繩は一向に切れもせず、絶間なく旋回しながら少しづつ少しづつ降りて來る。

ものゝ二十尺ほど降りて來たと思ふと、そのあたりの古い銃眼に巢を喰つてゐた鴉か唐突な人の氣配に驚いて五羽十羽、バタバタと飛びたち、羽音も騷がしく塔の周りを飛び廻りながらギヤアギヤアと消魂しく鳴きたてる。

塔の上の人は一期の破滅とでも思つたか、急に身をかへして忙しく上の方へ引返しはじめた。

時ならぬ異樣な夜鴉の鳴聲も、烈しい秋風の音に紛れて地上までは屆かぬか格別騷立てる人の氣配もないので、ホツと安堵したやうすで、またジリジリと降り出した。細い糸が掌の肉に喰入るのか時々、手を休め、梯子の横段に頭を押しつけては息をつき、また元氣を奮起して降りはじめる。

一分が一時間とも思はれるやうな長い時間の後、やうやく塔の根元近くまで降りて來たその人の姿といへば、これはまた異樣とも奇怪ともいひやうのない風體。

風袋のやうなダブダブした衣を着、いざといふ時の得物にするつもりか窓から切取つた鐵棒を腰帶に差込んでゐるので、ちやうど水母を串にでも刺したやう。頭は顎のところまでスツポリと黑い丸いものに包まれ、どこが顏やら頭やら、まるで酸漿の化物。

異樣な男は、はやもう、ある限りの精力と辛抱を使ひ果したものゝやうに、低く呻めき呻めき、半ば、無意識の體 塔の根元へ轉がり落ちると、氣弛みしたものか丸い鐵の頭をガツクリと胸の上に垂らし、

『あゝ、まるで夢としか思はれない。途中までは知つてゐるが、柘榴のやうに肉が割れた掌へ糸を喰込ませる痛さといつたら、どんな辛い拷問よりまだ堪難かつた。あまりの痛さに神氣を失したとみえ、どうしてこゝまで降りてきたか殆んど記憶に殘つてゐない』

と、呟きながら鐵の頭を重たげに起して遙かに高い塔の頂上のはうを振仰ぎ、

『それにしも、よくまアあの高いところから降りて來たものだ』

この時・第三兵舍哨所から出て來た三人の番卒。手に角燈を持ち、銃劍を煌かせながら戛々の足音も高く、一隊横隊になつて眞直にこちらのはうへ近づいて來る。

鐵假面は咄嗟に身を翻へして塔の根元の緣積石のうしろに身を隱して番卒をやり過し、

『かうなつてはしやうがない。この內濠はどこかで外濠につゞいてゐるはずだから、水門を毀しても外濠へ拔けるほかはない』

と呟きながら、ソロソロと塔のそばまで戻り、絹糸の梯子の端を持つて二三度振り動かして波を打たせると、繩梯子の端の鐵鉤はわけもなく外れて塔の壁に沿つてスルスルと落ちて來た。

鐵假面はその梯子を今度は內濠の緣石へ引掛け、ユルユルと內濠の中へ降りて行く。

この內濠はバスチーユの城が建てられてからこの方、何百年もの間一度も掃除したことがなく、埃や塵を皆こゝへ淺ひ落すので年々底が淺くなり、長く旱がつゞいたときなどは濠の底が露れだすこともあるが、端にある水門で外濠に通じ、外濠の水は直接にセイヌ川につゞいてゐるのだから雨が降ると川水と一緒に水嵩が增し、たまには人間の丈が立たなくなるやうなこともある。

鐵假面は梯子を傳つて濠の底に立つて見ると幸ひ水は淺くて腰のところまでしかない。

これならばよしと頷きながらいま巡邏して行つた番卒がまた戻つて來るかとしばらくやうすを窺つてゐたが、番卒どもは内門から塀の外にでたものとみえ足音らしいものも聞えて來ないから、また糸梯子を外してそれを手に持ち、靜かに水を掻分けながら濠を渡切り、やうやうのことで外濠と内濠の境になつてゐる高い石塀の根方まで行きついた。

塀の高さは五間ほどもあり、厚さはほゞ五尺以上もあつて番卒が巡邏する近道になつてゐる。塀の上は眞ツ平になつてゐて何の手掛りもなく、幾度、鉤を投げつけても引掛らない。

この上はやはり水門をくぐるほかはないと思つたが、今度は塀に沿つてだんだんと水門のあるはうへ歩いて行く。

さて、水門傍まで來て見ると、鐵棒でゝも仕切つてあるかと思ひのほか、二尺ほどの角石を櫛の齒のやうに互ひちがひに疊みあげ、水はその間を折れまがつて通ふやうな仕組になつてゐるので、その石を外すのでなければ外濠へ拔出すわけにはいかない。

鐵假面は水門の角石に手をかけ、力をこめて三四度搖ぶつてみたが、バスチーユ大監獄の水門ともあらうものが搖ぶつたぐらゐで搖ぎださうはずはない。どの角石も漆喰でしつかりと石の土臺に据ゑつけられてゐる。

鐵假面、はさすがに落膽したやうすで石塀に背を凭せて歎息してゐたが、やがて氣を取直し、

『何びとも成功したことがなかつたといふあの高い塔から拔け出して來たこの俺がこれ位のことで元氣を失つてなるものか』

帶に差してゐた鐵棒を漆喰の繼目にあてゝ必死にこじりはじめたが、こゝは水門の近くなので内濠から外濠へ流れ出す水の勢ひで立つてゐることさへ容易でなく、力を入れようにも一向に力が定まらない。

鐵假面は幾度も絶望の聲をあげながら撓みなく一時間ほどこじりつづけてゐると、長い間腐つた水に浸つて漆喰の質が脆くなつてゐたものか、一番小さな角石をひとつだけ、やうやく外すことが出來た。

この調子でやつてゐたら、人間一人拔け出すだけ隙間をつくるには夜明けまでかゝる勘定だが、さうかといつて今更こゝで中止しても何の甲斐もないことだから發見されて捕まつたらそれまで。やれるだけやつて見るほかはない。もし何かの拍子で拔け出せるだけの孔が明いたらそれこそ仕合せと、ただ一本の鐵棒をたよりに勇氣を奮起して休みもなく無情頑固な角石と鬪つてゐるうちに二番目の大きな角石は考へたよりも容易にポツクリと外れてきた。

鐵假面は、

『あゝ、有難い』

と、呟きながら、切石を兩手で抱いて水音のせぬやうにそつと水の底に沈め、また鐵の棒を取直して三ツ目の角石に取りかゝらうとしてゐると、唐突に水面にパツと角燈の光が射し、チラチラと濠の水に反射しながらこちらへ近づいてくる。

急に手元が明るくなつたので、驚いて眼をあげて見ると、夢中になつて今まで氣がつかなかつたが、石塀の上の巡邏道を通つて外濠の哨所へ交代に行かうとする二人の番卒が、はや五間ほど隔たつたところまで近づいて來てゐる。

鐵假面はハツと胸を冷やし、半ば無意識のうちに反對のはうへ逃げかけたが、下手に身動きでもして濠のなかに人がゐると覺られたらそれこそ萬事休す。ジタバタする場合でないと咄嗟に思ひ定め、顎のところまで水に身を沈めて丸い頭だけ水面へ出し、ジツと息を殺してゐると、近づいて來た番卒の一人は、水の上に浮びあがつた黑い丸い異樣なものに眼をつけ、他の一人のはうへ振返り、

『おい、水門の口に木の根ツ子が詰つてゐる。明日、雜夫に言ひつけて掃除させねばならんナ』

と聲高に語りながら、悠々と通り過ぎて行つた。

外濠の西側には人家があるが、東側は草蓬々の荒地で、ところどころに赤土の低い丘がある。聖タ

ントアンヌの市門を境にしてこゝはもう市外だから夜はめつたに人の通らぬ寂しい場所。

空には星の影さへなく、ただもう雜草が野分に吹かれて波のやうに搖れてゐる。その闇夜の原に、何人かを待受けてゐるやうな曰ありげな二臺の馬車があつた。

一臺はベルト・オウジエール塔の左手にあたる丘の蔭に、もう一臺は、水門のすこし上手の土手の蔭に夜も黑く馬車も黑く、それと知つてさへよくよく眼を定めて眺めなければそれが馬車とは見分けられぬ。

丘の蔭の馬車にはソアツソン伯爵夫人とラ・ヴオアザンの二人。水門の土手の蔭の馬車に相乘りしてゐるのはテレエズとコフスキー。

この方の二人は馬車の中から首を差伸ばし、瞬きもせずに闇のなかのバスチーユのはうを眺めてゐたが、そのうちにテレエズはホツと小さな溜息をついて、

『確かに今日だといふヴオアザンの通知で、伯爵夫人に覺られぬやうにそつとこゝで待つてゐたが、時刻はかれこれもう四時近く。今まで待つても出て來ないところをみると、事によると破獄の途中で露見して捕まへられてしまつたのではなからうか』

コフスキーは首を振つて、

『嚴重なことで歐羅巴中に鳴りひゞいてゐるこのバスチーユ。十年も毎日コツコツとやりつづけ、そ

れでもまだ破獄の緒口さへつかぬうちに露見した例もあれば、じぶんの命のはうが先に盡きて怨みを呑んで死んでしまつた者もあると聞きます。三日でやり終せると思つても、いざやつてみると思ひがけぬ故障ができ、それで明日にのびたのであらうと思ひます』

『それならいゝけど、もしや露見して……』

『いえ、その心配はございますまい。破獄しかけた途中で露見したとしたら、かならず鐵砲を擊つとか非常喇叭を吹くとか、何かしら一と騒動起きなければならぬはず。あの通りひつそりと靜まつてゐるところをみると、そんなことではなかつたと思はれます』

テレエズは、頷いて、

『さういへば、それにちがひない。何かの都合で遲れたといふのなら何でもない。明日か明後日にならうと、また一と月後にならうと、毎晩こゝへ馬車を持つてきて待つてゐます』

コフスキーは、宥めるやうに、

『四時といつても夜が明けるまでにはまだ時間があります。あの通り、伯爵夫人の馬車もまだあそこに居りますから、諦めずにもうすこし待つてみませう』

『ヴオアザンの話では、內濠と外濠をつなぐ水門を壞すほか拔出す方法はないと言つてゐましたが、先程水門のうへの道を二人の番卒が角燈をつけて通つて行つたところを見ると、あそこを壞してゐるのでもないらしい。番卒は眼が敏いから、もしそんなことをしてゐたら見遁すはずはないから』

『いくら眼が敏いといつても、闇の中。私どもがこゝで考へてゐるほど無造作に見露はされるやうなこともありますまい。私としては鐵假面は塔からだけは無事に脫れ出したといふやうな氣がいたします』

『それは、どういふ理由で』

『……一時を過ぎたと思ふ頃、塔の頂上間近で消魂しく鳴き立てる夜鴉の聲がいたしました。だしぬけに間近に人が來たのであの邊へ塒を作つてゐる鴉が驚いてあのやうに騒ぎ出したのではないでせうか。私には、どうもそんな氣がいたします。……ともかく、もうすこし待つてみることにしませう』

と言つて、一段と聲を低め、

『ヴオアザンさまとの堅い約束を破るやうで少々うしろめたい氣はいたしますが、假面の外から呼びかけてみただけでは安心がならない。こちらでその名を呼べば向ふは助かりたい一心で出まかせな合槌を打つかも知れません。何といつても鐵假面を外して正目にその顏を見るのでなければ納得がいきません。……私はさう思ひましたので、巴里中の錠前屋を訪ね廻つてそれからそれと傳手を求め、歐羅巴でその右に出る者がないと言はれる錠前造りの名人に會ひ、假りに人の手で造つた錠前ならばどんなものでもかならず開くといふ萬能鍵を造つてもらひ、それをこゝに持つてをりますから、鐵假面さへこゝまで來てくれたら今日といふ今日こそ紛れもない正體を確かめる事が出來るのでございます』

『それはまア、思ひもかけない好都合』

語合つてゐるうち四時も過ぎ、東の空が間もなく白み始めようといふ頃、水門のすぐそばの水の面に何やら黑い點のやうなものが浮び出し、たゆたふやうにソロソロとこちらの岸へ進んで來る。

コフスキーは、さながら狂したやうに、

『お孃さま、アレアレ、あそこへ何か來ます』

テレエズも躍り上つて、

『あッ、あれは鐵假面。さア、早く合圖を』

と、促す。コフスキーは馭車臺についてゐる角燈の覆蓋を二三度開閉して、そのはうへ合圖をすると、水のうへの黑點はこの光を認めたものか今度は濠を斜に過つて眞直にこちらのはうへ近づいて來る。

水は顎のあたりまで屆いてゐるので、濠の底を搜りながら渡渉するのはなかなかの大仕事らしく、もどかしいほどの速度で濠の中程のところまで來たが、そこまで來るとどうしたのか突然石のやうにヅブリと水のなかに沈んでしまつた。

二人は思はず、アッ、と聲をあげ、もう一度浮びあがるかと、いま鐵假面が沈んだあたりを息を詰めて凝視めてゐたが、一分經つても二分經つても浮び上つて來ない。

水は茫々、風蕭々。

三十間と距たらぬところまで近づけながら無情な濠の水は鐵假面の大祕密を匿し終らうとするか。

二人は堅く手を握合せながら片唾を嚥んで水の面を眺めてゐたが、コフスキーはあわただしく手を振解き、

『この濠の中程には深さ一丈五尺ばかりの大樋が埋めてあつて、旱のときはその樋でセイヌ川の水を引入れるといふことですから、鐵假面は誤つてその樋へ踏込んでしまつたのに相違ありません。放つて置くと浮びあがることが出來ずにセイヌ川まで押出されて死體さへあがらぬやうになつてしまひませう。それでは終生、鐵假面の正體を知ることが出來ぬわけ』

コフスキーは濠の上下を忙がしく見廻し、

『もうそろそろ明るくなつてきましたから、私が濠の中へ入つたりしたら物見臺の番兵に發見されてしまふ。見つけられて鐵砲でも射ちかけられたら何もかも水の泡。と言つてこのまゝには捨て置けず』

と言つてゐるとき、濠の水が急に搖れ動いて鐵假面がポツカリと丸い黑い頭をあらはした。しかし、それも須臾のことで、苦しげに二三度手で水を叩いたと思ふと、またブクブクと沈んでしまつた。

もう猶豫する場合でない。コフスキーは馬車から跳ね降り、土手の斜面を辷つて濠へ飛込む。このあたりと思ふところまで泳いで行つて鵜のやうに水を潜り潜り段々に大樋の中を搜して行くと、この

うち何やら手に觸つた固い丸いもの。頭から捜りおろして行くと、確かに溺れかけてゐる人間。有難しとばかりに胴中のあたりを横抱きにし、水の底を潜つて岸に近いところでポッカリと水面に顔を出し、ホッと息をついて監獄のはうを振返つて見ると、空はもう明けかゝつてゐるが地上はまだ夜。やうやく塔の頂きだけが仄白くなつたばかり。監獄の内はひつそりとしづまりかへつてゐるやうすなのでこのぶんなら大丈夫と手早く革帶を解いて鐵假面の胴中へ結びつけ、力任せに岸へ引上げて目立たぬ土手の後へ押込んだ。

テレエズは、コフスキーを押退けるやうにして鐵假面の耳のあたりへ口を差寄せて、

『……マルセル、……あなたはマルセルですか。さア、早く返事をしてください』

肩を搖りながら必死な聲で問ひかけたが、鐵假面は氣を失つてゐるとみえ何の答も返さない。

コフスキーはテレエズを押止め、

『だいぶ水を呑んで氣を失つてゐるやうですから、ともかく鐵假面を取つて水を吐かさなければ……』

土手の下に脱いであつた上衣の衣嚢から合鍵の束や螺旋廻しを取出し、假面をそこここと改めて見ると、左の顴顬のあたりでしつくりと喰合つたところに二ヶ所ほど高くなつたところがあつて、その眞中に鍵孔かと思はれるやうな小さな孔がある。コフスキーはこれがさうだと呟きながら鍵束の鍵を一つづつ押當てゝ見たが、この假面を外す鍵はこの歐羅巴にはあるまいとナアロオが豪語してゐただけであつて容易なことでは開きさうもない。どの鍵も鍵孔に嵌まるが肝心なところでクルリと空廻りしてしまふ。

テレエズは、苛立つて、

『マゴマゴしてゐると夜が明け切つてしまふ。それに伯爵夫人が氣附いたとみえてこちらの方を眺めてゐる。ここで顏を合せてはならぬのだから、どうでもいけなければ家まで連れて歸つて……』

コフスキーは、首を振つて、

『鐵假面を外すさへ約束にはないことですから、これ以上信義に悖るやうなことは出來ますまい。……もうしばらくのご辛抱』

と言ひながらも手を休めず次々と合鍵を押試みる。テレエズは身を押揉んで、

『それそれ、二人はもう丘の向ふまでやつて來た』

『はい、いますぐ、いますぐ……』

これが最後の合鍵とグイと差込んだその一つが錠前の中でカチリと微かな音を立てたと思ふと、首の蝶番のところからパックリと二つにへし折れ、假面はバタリと顏から脱け落ちた。

『あッ、開いた』

『あゾ、開きました』

明け方とはいへ、曇日の空はドンヨリと暗く、それに草深い土手の蔭だから片闇になつて顔も定かには見分けられない。あわただしく角燈を引寄せてその光を差つける。

長らくそればつかりを追及してゐた鐵假面の正體がこの一瞥で明白になるのだから、二人の胸はさながら早鐘を打つやう。互に首を差伸して覗込むと、黄色い角燈の光に映じ出されたその顏！

意外とも意外、思ひもかけざりし鐵假面の人はマルセルでもなく、ロリツプでもない。この二月の初め、雪の降り積ずブリュツセルの市外れ、「金の楯」屋の居酒場で、こしらへごとの喧嘩をしかけ、マルセルに頻死の手傷を負はせた歐洲三劍士の一人、かのジュウル・イスナアール男爵。

あまりのことに、テレエズもコフスキーも、これは、言葉もなく、只々茫然と打ち眺めるばかり。

この時、バスチーユの樓門の上で一發の砲聲が轟然と空をどよもして鳴り渡つたと思ふと、つゞいて吹き鳴らされる非常號音喇叭。消魂しく叫び交はす番兵の聲々、亂調子の小太鼓の音などがどよめきをつくつて騷然と湧き起り、罵り騒ぐ聲までが濠を越えて手に取るやうに聞えてくる。

コフスキーは、監獄のほうへ振返り、

『お嬢さま、あれは破獄を知らせる非常の合圖。こんなところでマゴマゴしてゐて捕へられたら一大事。この男はヴオアザンさまがうまく始末をつけてくれることでせうから、私どもは早く馬車で……』

手を取る間も遲しとテレエズを馬車の上へ押上げ、じぶんも馭車臺へ飛乘ると、丈高い野草を押分けながら遠くもないジヤン・ボウジール街のほうへ矢のやうに驅け出した。

七、死なせて生かす法並に、手管にかける謀

ラ・ヴオアザンの邸は巴里でも目抜きのロアイヤール街の角にある。

手相見、女易者といふ看板をあげ、傍ら祕密に毒藥學の講義をどするので、邸の正面に東邦風の奇異な裝飾を施し、前庭には椰子、バナナ、榕樹などの蕃地の異木珍草を數多く植込み、門から玄關までの馬車の馬車道も、兩側から茂合つた纏繞植物がトンネルのやうにアーチ型に天井を造つてゐるのでいつもおんどりと薄暗く、最初にここを訪れる人は先づこれに度膽を抜かれる。何ともつかぬ神祕的な薄暗い道と見馴れぬ異樣な樹や草に心を駭かし、何さま歐羅巴一の易者の邸らしいと納得するのである。

馬車道のある表門はうは手相を見てもらひに來る一般向の客のためだが、世間をはばかる祕密の相談に來る人のために邸裏に別な入口が設けられてある。

この入口は見當違ひの遠か遠いオースマン通りの藥種屋の脇通りに開いてゐて、そこを入つて右左と小路傳ひに縫ひ歩き、一度さる仕舞屋の入口からはいつてすぐ裏へ抜け、またウネウネと露路を辿

つてくると唐突にヴオアザンの居間に近い邸の裏口へ出るやうになつてゐる。これはごく內輪の人だけが知つてゐる祕密の通路で、この道筋を知らなければオースマン通りの橫露路がこんなところまで續いてゐると思ふものは一人もない。

巴里に住んでゐる限りの人間でナアロオ密偵長がその素姓を知らぬものは一人もないと言ふその鋭い眼もあり、當時、巴里を風靡してゐた毒藥流行の專門に取締る「火刑裁判所」のラ・レニエや老獪なデグレエ探偵が、ラ・ヴオアザンが有名な毒藥調合人伊太利人、エキジリ(エクシーリ)の弟子で、祕密に毒藥學の講義をしてるといふことに薄々感づきかけてゐる折なので、いつどういふ口實で密偵等が踏込んで來ないものでもなく、さういふ折に安全に避難出來るやうにこんな祕密の裏道を用意してゐる譯だつた。

その夜の十時頃、テレエズとコフスキーの二人はヴオアザンの邸の裏口へ來て、いつものやうに合圖の呼鈴を鳴らすと、ラ・ヴオアザンはすぐ出迎へて二人を奧まつた居間へ通し、何ともつかぬ苦い微笑を浮べながら、

『思ひもかけない始末になつてしまひましたが、しかし、イスナアール男爵を救つたのはまろまる無駄だつたといふわけではありません。……實は、イスナアール男爵の話で、バスチーユにもう一人、鐵假面がゐるといふことがわかつたのです』

二人は驚いてヴオアザンの顏を嗅めてゐると、ラ・ヴオアザンは、ゆつくりと椅子に掛けながら、

『わたしは男爵に少々金を與り、服裝を變へて今夜そつとこゝへ忍んで來るやうにと言つて置きましたから、もう間もなくやつて來るでせう。……今度の手違ひはたぶん牢番の間違ひから起つたことなのでせうが、くはしいことはイスナアール男爵からきくこととして、鐵假面がもう一人バスチーユに殘つてゐるのだとすると、それに對するわれわれの方針を決めなくてはなりません。……わたしがいま一番心配してゐるのは、伯爵夫人のあの氣狂染みた振舞です。夫人はルイ王の前の愛人だつたといふ威勢を頼みにしてバスチーユの中庭でルーヴオア侯を引止めたり、大ッぴらに牢番に金を與つたり、われわれでさへ冷々するやうなことを平氣でやつてのけます。……大膽至極な破獄があつたことでもありかうまで伯爵夫人に騷立てられては、如何に傲岸なルーヴオアでも鐵假面をこのまゝバスチーユへ置くやうなことはしないでせう。かならずどこか遠い牢獄へ移してしまふに決つてゐます。一體どうしたものでせう』

テレエズは、急に顏をあげ、

『あなたは、いつか、いよいよとなれば一夜のうちに易々と鐵假面をバスチーユから脫け出させる方法もあると仰しやいましたが』

ラ・ヴオアザンは、頷いて、

『さう申しました。しかし、それは實に危險な方法ですから、たしかなあなたのお覺悟をうかがつた上でなければ申しあげるわけにはいきません、何を聽いても驚かぬといふことでなければ』

テレエズは、たじろがぬ面持で、

『命まで投げ出してかゝつてゐるあたしに、この世に怖れることなどありませうか』

『それならば申しませう。その手段といふのは、あれです』

と言ひながら、壁に寄せて幾段となく積重ねた毒藥の棚を指した。

いま巴里全市に流行してゐる「遺産の粉」のことや「火刑裁判所」の殘酷な受調べのことなども聞き知つてゐるので、テレエズはサツと顏色を變へ、

『では、あの毒藥で牢番を殺して……』

ラ・ヴオアザンは骨の髓が凍みつくやうな冷たい微笑を浮べながら、

『いえ、牢番ではない、鐵假面に毒を嚥ませるのです』

あまりにも意外な言葉に呆氣にとられてその顏を瞶めてゐると、ヴオアザンはいよいよ以て冷然たる面持で、

『なにしろ、こんな騷ぎを起してしまつたのですから、どこの監獄に移されたにしろ、もう破獄させるなどといふことは思ひもよらない。とすれば、鐵假面はこのまゝ三十年も四十年も苦しんだすゑ、人

知れぬどこかの監獄で悲慘な生涯を終らなければなりません。……そのくらゐならいつそ思ひ切つてさういふ方法を用ひて見ようと思ふのです』

テレエズは、顫へる聲で、

『ラ・ヴオアザン、それは、あんまりです。たとへ、あなたが毒藥の調合を研究し、そのために人間らしい心情が涸れつくしたといつても、その思付はあんまりだと思ひます』

涙にうるんだ眼に怨みをこめてヴオアザンの顏を瞶めながら、

『あなたの考へでは、そんな酷い運命の下でマルセルを長く苦しませるよりは、いつそひと思ひに毒でも嚥ませ、苦痛を短くしてやるはうが情けのある仕方だといふのでせうが、あたしはこの腕に生きたマルセルを抱きたいとこそ思へ、殺してまで救出したいとはかんがへません』

ラ・ヴオアザンは眼を瞠つて、

『おや、誰が殺すといひました。わたしはたゞ鐵假面に毒を嚥ませて……』

『同じことではありませんか。毒を嚥ませればマルセルは死にます』

ヴオアザンは、手で制へて、

『まア、しまひまでお聽きなさい。……たとへ終身囚でも、死ねばかならず監獄から出されて墓地へ葬られる。これには例外がないのです。よござんすか、こゝのところをよくかんがへてごらんなさい。

どんな重い囚人でも死骸になれば牢から外へ出されるのです。……わたしは鐵假面に毒を嚥ませるといひましたが、しかし、毒で死なしたものは解毒劑を與へてまた生返らせることが出來るのです』

『おゝ、では、いちど死なしておいて……』

『さうです。墓を掘返して死骸を盗出し、解毒劑を嚥ませて生返らせようといふのです。……これだけでは信じるわけにもいきますまいから、納得のゆくやうに前例をお話しませう。……テレエズさん、あなた、あの有名な伊太利の毒藥學者のエキジリ博士が先年バスチーユで牢死したことをご存じでせう』

『噂にきいて知つてゐます』

『ところが、あれは牢死でも何でもない、牢を出るための手段に過ぎなかつたのです。墓地へ埋められるとすぐ弟子の一人が博士を掘出し、預かつてゐた解毒劑で事もなく生返らせました。……その證據はここにあります』

と言ひながら、手箱から一枚の書附を取出してテレエズに手渡した。

受取つて讀んで見ると、それには上品な筆蹟で、「……あなたの渝りない信實により、私は土の底から掘出され、生きてまたこの國へ來、あなたにお目にかかる事が出來たのは何ともお禮の言葉に苦しむほどで……」といふ書出しで、ラ・ヴオアザンにつくづくと、再生の恩を感謝した手紙で、その

終りに「フローレンス侯、エキジリ」と署名してある。テレエズは、呆氣にとられて、

『この頃、巴里で伊達者の名で知らぬものはないフローレンス侯といふ伊太利の貴族があのエキジリ博士なのですか？……そして、博士を掘出して生返らせた弟子といふのは、あなただつたのですね』

ラ・ヴオアザンは、うなづいて、

『ご承知の通り、わたしはエキジリの弟子。してみれば、それくらゐのことはするでせう。……エキジリはたしかに蘇生しました。しかも、この部屋で生返つたのです』

コフスキーは椅子を乘出し、なるほど思ひ切つた方法ではあるが、かういふむづかしい情況になつたのだから、その手段を用ひるほかはないのではなからうかと言ふと、テレエズもすぐその意見に贊成した。

ラ・ヴオアザンは納得のゆくやうに解毒劑の效能を二人に說明してから、殺し切りにするのなら易しいが、假死にとどめる毒藥とその解毒劑は、毒藥の處方のうちでも極くむづかしいもの、一滴間違へても取返しのつかぬことになるのだから充分念を入れて調合し、その上で、たしかに生返るかどうか試驗をして見なければならぬ。いよいよこの方法を用ひるとしても、たしかに成功すると見極めがつくまでは早くて二た月はかかるのだから、それまで待つてもらはなくてはならないと聲を密めて語つてゐるとき、裏口の扉をホトホトと叩く者がある。

ラ・ヴオアザンはその音で誰が來たのか察したらしく、スラスラと座を起つて行つて、間もなくイスナアール男爵を居間に導いて來た。

密々と頬に生えた赤髯も、この魁偉な面魂も、テレエズにはまざまざと見覺えがある。かうして眺めてゐると、ブリユツセルのあの夜のことが思ひ出され、恨みと怒りが一時に胸へ衝きあげてくる。

イスナアール男爵は、歐洲で一二といはれる劍士の品格を失はず、ヴオアザンに鄭重に再生の禮を述べてから、

『伯爵夫人が送られた糸梯子はこの私へではなく、もう一人の鐵假面のためだつたといふことを伺ひまして、たつた三日の間とは言へ、伯爵夫人が私に愛情をかけてくださるなどと身分不相應な夢を見たことを恥かしく思つてをります』

辛苦に窶れた頬を子供のやうに純眞に赧らめ、

『……今から十年前、私がガスコーニュの慓騎隊長をしてをりましたところ、ハプスブルグ家の宴遊會で、その當時まだドランプ・マンチーニ孃であつた夫人にお目にかゝり、その時以來私は夫人にたいして深い尊敬と愛を捧げてをりました。……ブリユツセルのあの雪の夜、「白い寢臺」のそばで氣を失なつて倒れてゐられた伯爵夫人を「マキシミリアン」旅館へソツとお移しじたのも、ペロンヌの要塞兵の伏勢を屠殺しにするつもりでそこへ乘込んで行つたのも、伯爵夫人にたいする私の密かな忠誠の

精神によることだつたのです。……今朝、濠のそばで、私がもう一人の鐵假面を殺して糸梯子を奪ひ取つたのだらうなどといふ心外なご叱責を受けましたが、しかし、夫人が私をどんなふうに待遇なさらうと、夫人にたいする私の尊敬と愛は終生渝ることはないのです』

『それにしても、あなたはどういふ理由であんな鐵の假面などを被せられたのですか』

男爵は、頷いて、

『つまり、裏切りをした私にたいする憎しみのゆゑです。私は密偵部の祕密にも充分通じて居りますので、それであんな殘忍な取扱ひをしたのでせうが、それは私を生きながら長く苦しめるためばかりではなく、もう一つほかに目的があつたからです』

『それはどんなことですか』

男爵は、瞋恚の炎を眼の中に點じながら、

『あいつらの奸惡と狡智には、實に驚き入るほかはないのですが、つまり、同じやうな鐵假面を二人こしらへ、いづれがどれと見分けのつかぬやうにするのが目的だつたのです。それほどの罪もない私にわざわざあんなものを被せたのは、畢竟、そのためだつたと思ひます。これからのことは今朝ほども一寸お話し申しましたが、私は七月の末頃までペロンヌの要塞に囚はれてゐて、つい二月ほど以前にバスチーユへ送られてそこで鐵假面を被されたのですが、私はその取扱ひを不當だと思ひ、散々に

暴れてみなを手こずらせると、典獄は、鐵假面はお前一人ではない。この向ふの監房に半年も前から被されてゐる者がゐるが、その者はお前のやうな荒武者とちがひ、さすが國事犯人だけあつて溜息ひとつつかぬ。お前もすこし見習つて大人しくしろなどと申します。それで、じぶんのほかにもう一人鐵假面がゐることがわかつたのですが、つまり、それと私を紛らはしくするためだつたと言ふことは、今度の間違ひによつてもよく證明されるのです』

テレエズは、怨みも忘れてイスナアール男爵の方へ膝を乗出し、

『イスナアール男爵、典獄は、もう一人の鐵假面は國事犯人だけあつて歎息ひとつ洩らさぬと言ひましたか』

『確かにさう言ひました』

テレエズは喜悦の情に我れを忘れて、

『あゝ、さうすれば、鐵假面は確かにマルセルです。……コフスキー、お前もさう思ふだらう。オビリエ大尉なら溜息ひとつつかぬといふことはないはずだから……』

コフスキーは力をこめて幾度も頷き、

『そんな立派な態度をなさるのは、旦那さまのほかにはありません』

テレエズは、急に男爵のはうへ向直り、

『イスナアール男爵、あなたはもうお見忘れですか。あたしは、ブリュッセルの「金の楯」屋であなたに決闘をしかけられ、酷い手傷を負つた先鋒隊の隊長マルセル・ダルモアーズの従妹のテレエズ・ヴアンダムといふものです。……あのとき、マルセルに引添つてゐた男裝の少女があたしです』

イスナアール男爵は椅子から起ちあがつて、

『どこかでお目にかゝつたことがあると思ひ、今まで一所懸命に思ひ出さうとしてゐましたが……』

と言つて、慚愧に堪へぬ面持でさまざまに詫を言つた。

テレエズは、ブリュッセルを出發して以來、じぶんが聖ジャンの林のなかで手箱を掘出すまでの經緯を手短に物語り、

『……さういふわけで、伯爵夫人はオビリエ大尉といひ、あたしのそれがマルセルであつてくれと祈つて、今日までどちらとも判じかねてゐたのですが、今のあなたのひと言で確かにマルセルだと信じられるやうになりました。いま伺ひますと、もう一人の鐵假面はあなたの監房のすぐ近くにゐたといふことですが、もしや、その姿をごらんになつたやうなことはございますまいか』

男爵は頷いて、

『二度見かけました。……一度は禮拜堂へ連れられて行く途中、私の監房の前を通つたので。もう一度は、その鐵假面　ほかの監獄へ移されて行くとき』

一座の三人は、期せずしてアッと驚駭の聲をあげ、

『おゝ、鐵假面がほかの監獄へ……』

『バスチーユから移されましたか』

男爵は、絶望に沈んでゐるテレエズのやうすに眼を注ぎながら、

『はゞ、鐵假面は一昨日の夜、密かにどこかへ移されてしまひました。……日曜日の朝、道具を受取ると、すぐさまその夜から破獄仕度にとりかゝり、次の月曜の夜、典獄の巡回がすむと、また早速鐵棒の挽切りにかゝりましたが、ちやうど夜の十一時頃でしたらうか、大勢の足音が第二監房のほうへ上つてくるので、さては露見したかと慌てて鑪を寢臺の下へ隱し、ジッと寢たふりをしてをりますと、足音は私の部屋の前を通り過ぎてもう一人の鐵假面のゐる監房のほうへ行くやうすなので、ソッと覗窓から眺めて見ますと、典獄と牢番長が先に立ち、その後から二人の牢番が吊臺を擔いで從いて行きます。……その吊臺といふのは、私がペロンヌからバスチーユへ移されるときにも乘せられた囚人護送用の吊臺ですから、さては鐵假面がどこか他の牢へ移されるのかと思つてゐるうちに、向ふの監房から落着いた聲でこんな風に言ひ罵る聲が聞えてきました』

『どんなことを言ひましたか』

『近いとは言つても、空の監房を一つ距ててゐるので充分には聽取れませんが、何か散々に言ひ罵つ

たすゑ、たとへ、どんな牢獄へ送りつけたッて、時が來たらかならず破つて見せる。そのときは鐵假面を脫いで禮に行くから、よッくルーヴォアにさう言つておけ、とこんなことを言つてゐたやうでした』

テレエズは、涙含んで、

『あゝ、何と勇ましいこと。鐵假面は、やはりマルセルです。……それからどうしました』

『典獄があわてゝ口の覆蓋を閉めてしまつたとみえ、それで聲は聞えなくなりました。……しばらくすると鐵假面を吊臺へ乘せて私の監房の前を通り、中庭を通つて裏門へ行き、飜轉橋をおろしてその向ふへ行つてしまひました。……私が見たのはこれだけですが、以來、第二塔に鐵假面が私がまゝどこかへ行つてしまひました。……私が見たのはこれだけですが、以來、第二塔に鐵假面が私が一人になつたといふ證據に、典獄が見廻りに來ても私の監獄より先へは行かず、食事も一人前しか持つて來ませんから、それでよくわかりました』

と言ひ終ると、テレエズの前へ立つて行つて無骨に頭をさげ、

『喰詰めた末の世過ぎのためとはいへ、大望のあるあなたのご從兄を害したといふことにおいて、またこのたび誤つて益もないこの私がバスチーユから救ひ出されたといふことにおいて、この二つの點で私はあなたに測り知られぬ負債をおふことになりました。この償ひには、鐵假面がたとへどこに移されるにしろ必ず行先を突止め、一命に代へて救出してお目にかけます。テレエズ嬢、今日から私の

一命はあなたのものと思つていただきます』

一座はそれぞれ深い感慨に心を沈ませて言葉もなく控へてゐるうちにヴオアザンは急に口を切り、

『テレエズさん、ルーヴオア侯はその後もちよいちよいあなたのところへ訪ねて來ますか』

テレエズは、ヴオアザンが何のためにこんなことを問ひかけるのかと怪しむやうな面持で、

『はい、どうにも煩さくて困つてゐます。いつかベスモオ典獄の晩餐の席で初めて逢つた夜なぞは、無遠慮に家へ入り込んであたしの歸りを待つてゐたりして。……そのときは幸ひ顏を合せずにすみましたが、それからといふものは毎日のやうに花などを贈りつけ煩さくてたまりませんので病氣で引籠つてゐるからお目にかかられないと體よく斷りますと、今度はフランス第一といふルイ王の侍醫のトルミイドといふ醫者をわざわざよこしたりします。

さういふわけで、口實に困つて、いやいや先日一度會ひますと、そのうちに「キヤッフエ・ド・ベル」といふ料理店へ近日お伴したいなどといつてどうも手に餘りますの』

ラ・ヴオアザンは思慮深げに頷いて、

『それはいゝ都合です。……テレエズさんお聽きなさい。今までは鐵假面の正體を知ること〻救ひ出すことが差當つての目的でしたが、こんな思ひがけない都合になつて今度は鐵假面がどこへ送られたかまづその行先を搜さなければならぬことになりました。假に佛蘭西中の監獄を一つづつ搜して行くとしたらそれだけでも五年や十年はかゝります。それだつて巧く行けばいゝのですが、絶えず次々と居場所を變へるのだからひよんな工合に喰違ひでもしたら永久に搜し當てることが出來ないかも知れません。……ところで、わたしのかんがへるところでは、手近なところにたつた一つ手掛りを握る方法があると思ふのですが』

テレエズは、眼を輝かせて、

『手近なところに……。それは、一體どんな方法ですか』

『しかも、あなたの力で出來ることなのです』

『あたしの出來ることだといふのなら、たとへ、どんな苦勞をしてもやり遂げますけど』

『では、申しませうか。……サツクリしたところを言ふと、鐵假面の居所をルーヴオアの口から言はせるか、さもなくば、ルーヴオアの手控へでも見るといふ方法です』

『でも、どうしてあたしにそんなことが……』

『あなたはまだ齡が若く、世の汚れをご存じないから、かう言つただけではおわかりになりますまい。碎いて言へば、ルーヴオアがあなたに夢中になつてゐるのを利用して、うまく持掛けて言はせようといふのです』

テレエズは、羞と怒りで顏を赧らめ、

『あなたは、このあたしにルーヴオアを蕩込めと言はれるのですか。マルセル初め、淵の藻屑と消えた先鋒隊十二人の敵にあたるルーヴオアを、このあたしに？』

ラ・ヴオアザンは、宥めるやうに、

『かならずさう仰しやるだらうと思つてゐました。だから、敵なればこそ謀計にかけて言はせようといふのです。わたしは何もあなたに身を穢せの操を破れのと言つてゐるのではありません。蕩すといへば言ひ方が悪いが、媚態もときには手段。一旦愛情に眼が眩んだらルーヴオアのやうな武骨な男ほど弱くなるものです。つまり、敵の弱味を利用しようといふまでのこと。女丈夫、烈婦といはれた人でもかういふ手段を用ひた前例は數々あることをあなたもご存じのはずです』

『それは知つてゐますけれど……』

『あなたはいま、じぶんで出來ることならどんな辛いことでもと仰しやいました。どんなに厭はしいと思つても大切な目的の前にはそんな感情は忍ばねばならぬのでせう。……しかも、いまも申したやうにこれ以外にはどんな方法もないのだから、厭らしいの氣に染まぬのと言つてゐる場合ではありますまい。……こんなことぐらゐで二の足を踏むやうでは女々しいといはれても仕樣がありますまい。頼みにはなりません』

テレエズは、やうやく頷いた。

八、「黒頭巾」の强商談
並に、ナアロオの上機嫌

花の巴里も一と皮剝くると乞食の巣。僞畸形、攫攫、拘兒、僞巡禮、强盜、喧嘩屋。

中島に近い「奇蹟の廣場」を寄合場にし、巴里の街々を貫ひ歩く幾千とも知れぬ乞食のうちに、頭からスツポリと黑い頭巾を被り提琴の彈流しをして歩く「黒頭巾」と呼ばれる乞食があつた。

纖剝だらけの荒布のやうになつた服に留金もない破靴を穿いてゐるが、提琴は實に巧みでまた聲も美しく、卑俗な戯歌もうたへば宮廷や貴族の間に流行する優美な小唄もうたふ。その顏を見たものはなく、また、どういふ素姓のものか、どこから流れて來たものか誰れも知らない。たぶんは音樂教師の成れの果てだらうが、聲の調子から推すと左程の老人とも思はれない。

十月も半ばのこと。暮れるに早い秋の陽がモンマルトル・の丘に曰づからうとする頃、軍務宰相の官邸に近い聖トノーレの通りを巧みな音色で提琴を奏流しながら通りかゝつた「黒頭巾」。

急ぐでもなく急がぬでもなく、ソロソロとやつて來ると、チユエルリイの廣場のはうから轍の音も高く走つて來たル・テリエ家の紋章をつけた黑塗の二頭立。急ぎの用とみえ轍で枯葉を舞ひあげながら矢のやうに驅拔けようとすると、「黒頭巾」は手に持つた提琴を街路樹の根方に投棄てるより早く

馬車のはうへ駈けて行き、馬の轡をしつかりと押へて、

「申上げます。……國家の一大事……』

と、叫び立てた。

馬車を停めて國家の一大事などと言ひ立てる者に限つて取上げるほどのものがないのがいつもの例なので、ルーヴォアは煩ささうに舌打ちし、馭者臺に向つて、

『かまはず早くやれ。今日は特別の急用だ。乞食なぞにかゝずらつてゐる暇はない』

「黒頭巾」は、必死な聲で、

『いや、これを聽かねば國家の大損害。きつと後悔なさることがあります』

ルーヴォアは、この日頃、手をつくしてやうやく夕食に招くことが出來たラ・ヘイエ夫人を「キヤツフエ・ド・ベル」料理店で待たせでもしてはと氣もそぞろ、乞食の言葉なぞは耳に入らず、馬車のなかで蹉跎しながら、

『えい、邪魔をせずにそこを放せ』

「黒頭巾」は馬車の窓に縋り、

『お聽きください。あなたにとつて最も怖るべき奴らが、姿を變へて巴里へ來て……』

『お聽きください。あなたにとつて最も怖るべき奴らが、姿を變へて巴里へ來て……』

『馭者、こいつを鞭で打てッ』

『……巴里へ來て、またもや大事を起さうと企んでをります』

『煩さい、どうでも手を放さなければ警官を呼んで縛らせてしまふゾ』

「黒頭巾」は、いよいよ狂した風に、

『あなたは私の名を、いや、私の前身をご存じないからそれで怪しまれるのでせうが、以前私が何者であつたかご承知あつたら、私の申すことがどんな大祕密かすぐお察しになれるはず。輕々しく聞流すやうなことはなさりますまいものを』

ルーヴォアは心を苛立てながらも聞耳を立て、

『前身を知つてゐたら聞捨てにしなからうと。そんなら、貴樣は何者だ。名を名乘つてみろ、名を聞かう』

「黒頭巾」は急に狼狽へだし、

『……さア、私の名は……』

言ひ澱むのへ、ルーヴォアは押被せて、

『どうした、なぜ名を言はん』

『今すぐには申上げられません。……どんな事があつても私を逮捕しないといふ堅い約束がなければ……』

『何、言はれぬ。では、そのむさ苦しい頭巾を取つてみろ。顏に見覺えがあつたら話を聽いてやら？』

「黑頭巾」は、當惑の體で、

『いや、この頭巾を取るわけには參りません。しかし、どうかご信用を。……この大祕密を申しあげようと思つて、この三月の間、あなたとお逢ひするときを待つてをつたのです。どうか、この熱心に免じて……』

『貴樣のいふ國家の大祕密とは何ごとだ』

『それを申しあげたら私のはうは玉無しになります。賞金と引替へでなければ』

『それをわしに賣りつけようといふのだナ』

『決してご損にはなりません』

『幾らで買へといふのだ』

『はい、百萬リーヴルで』

ルーヴオアはセヽラ笑つて、

『百萬リーヴルだと。……こいつ氣狂ひか。えい、つかもない。こんなものに關り合つてだいぶ暇をつぶした。……これ放せ、離さなければかうしてくれる』

と、馭者の手から鞭を取るより早く、力任せに「黑頭巾」の頭を打据ゑた。

「黑頭巾」は痛さに堪へかねて兩手で頭を抱へ、俯向けざまに落葉のうへへ倒れると、馬車は轍の音も高くロアイヤール街のはうへ走り出す。

「黑頭巾」は道路のうへに起直り、片手で頭を押へながら、追縋がるやうに、

『……あなたは「半獅神の淵」のことをお忘れですか。……その先鋒隊の一人が……』

と、呼びかけた。

もしこの聲がルーヴオアの耳に屆いたらかならず馬車を返したであらうが、このときはもう馬車は遙か彼方へ走り去つてゐた。

「黑頭巾」は腰を擦りながら恨めしさうに起上り、悄々と提琴を投棄てた街路樹のはうへ戻つて行くと、またそこへ來かかつた一臺の輕やかな馬車。

馬車の主はテレエズで、ルーヴオア侯と夕食をするために「キヤツフエ・ド・ベル」料理店へ行く途中と見え、銀糸で緣取りした水色の絹の上衣に白椿の花をつけた帽子をかぶり、いつもよりは念を入れて化粧をしてゐるので素質の美は化粧の色と相俟つて殆ど照り輝くかと思ふばかり。內に憂ひを包んで俯向きがちに馬車に搖られながら來かゝるのへフト眼を止めると、「黑頭巾」は何か思つたかひとり頷いて無三に馬車のあとを追ひはじめた。

やがて、「キヤツフエ・ド・ベル」料理店の前に馬車が停まると、コフスキーを玄關に待たせ、テ

レエズは案内の給仕に導かれながら華やかな男女の群れる廣い食堂を横切り、二階の奥まつた一室へはいつて行くと、ルーヴオアは贅澤な薄紗の袖口のついた空色天鵞絨の長上衣に白絹のズボンを穿き、鬘には念を入れて打粉をし、いつか典獄の官邸で逢つたときはまるで別人のやうにどこもここもめかし立て落着かぬ風に椅子にかけてゐたが、テレエズが入つて來るのを見るなりまるで跳ねあがるやうに椅子から起上り武骨な足取りでテレエズのはうへ近づいて來ると、下僕でもかうはしなからうと思はれるやうな鞠躬如とした身振りでテレエズの手に接吻をし、さて、改めて萬たけたテレエズの顏をうち見返しながら、

『あまり遲いのでまたスツポかされるのかと思つてをつたが、約束を違はずよくお出でくだすつた』

嬉しさで眼が眩むといふやうなやうすでソワソワとテレエズを椅子へ掛けさせた。

テレエズは、もの靜かにルーヴオアの顏を眺めながら、

『來いといふことですからお言葉に從ひましたが、あたしに何のご用？』

あどけなく問ひかけると、ルーヴオアは泣出さんばかりの顏付になつて、

『何の用とはあまり酷い。かうまで逆上せ詰めてゐるルーヴオアの心がおわかりになりませんか』

豪腹冷淡、この世の傲慢を一人で身につけたと思はれるやうなルーヴオアが、まるで廿歳の青年のやうに羞らひながらおづおづと手を伸ばしてそつとテレエズの手を握つた。

テレエズは、然氣なくルーヴオアの手を拂つて、片微笑を浮べながら、

『どうなさいました。あなたともあらう權勢なお方が、そのやうにブルブルお顫へになつて』

ルーヴオアは身の置きどころに窮するといつた風に、

『……顫えますとも、これが顫へずにゐられるものですか。私はもはやあなたの奴隷。あなたの前に出ますと、今にも息の根が止まるかと思ふばかり。手足を動かすさへまゝにならぬのです』

『おや、それはたいへんですこと。どうしてあなたがあたしなどの奴隷なものでせう。ご冗談ばかり』

ルーヴオアは苦しげに兩の拳でじぶんの胸を打ち、

『もし、ラ・ヘイエ夫人、あなたは情けを感じる優しい魂をお持ちではないのか。三十二歳の今日まで、たゞの一度も女になど振向いたことのないこのルーヴオアが、こんなにあなたを愛し、慕つてゐることがどうしておわかりになりませんか』

名譽も恥も忘れて床の上に膝をつき、

『どうか、たつた一と言でいゝから私を愛すると言つてください。さア、たつたひと言。佛國第一の宰相たるルーヴオアが、この通り跪いてお願ひしてゐるのです。さア、どうか愛するとたつたひと言』

ルーヴオアほどの男も、愛情に溺れるとこれほど愚に返るものか、額に汗を流し、眼に涙を浮べて

擦寄つて來るのを、テレエズは冷やかに見流し、

『まア、眞實らしく仰しやること。大宰相たるあなたが、あたしのやうな土紳の未亡人をどうして本氣で愛したりなさるのでせう。どうせ、一時の戯れにきまつてゐます』

『おゝ、夫人、では、宰相といふ身分が氣に入らぬと仰しやるのか。それならば、今すぐこれから辭職し、一平民ミシエル・ル・テリエになりましたら私の實意を掬み取つてくれますか』

卅二年の間、名譽と富ばかりに心を奪はれ、愛情らしいものを知らずに來た。抑へに抑へた堰が一度にドツと切つて落され、テレエズの愛を得るためなら辭職ぐらゐは仕兼ねぬやうなやうす。

テレエズはルーヴオアの心を推量りながら、この分ならばもう切出してもいゝ頃と思ひ、

『あなたが宰相を辭されたつて、それだけでは實意などを掬取るわけに行きません。女心といふものはそんなことぐらゐではなかなか安心しないのです』

ルーヴオアは、取止めなくなつて、

『では、……では、一體どうすれば』

『あなたの一番苦痛なことを忍んでお見せになれば』

『一番苦痛なことといへば、洩してはならぬ政治上の祕密を洩すことだが、しかし、これは私の良心にとつてどうにも堪へられぬことで……』

テレエズはツと身を退けて、

『ほら、やはり嘘に決りました。あたしを愛するといひながら、そのくらゐのことさへ犠牲にすることがお出來にならないのです。あなたのお心はこれでよくわかりました。つまらない冗談はもうそれくらゐにしておいてください』

ルーヴオアは追縋るやうにテレエズのはうに膝行寄り、

『その疑ひは情けない。よろしい、申します。……私の祕密のうちで一番重いものといへば王弟のコンデ大公と陸軍元帥のチユレンヌ公爵に關する件なのですが』

チユレンヌ元帥とコンデ大公こそは、今度の陰謀の後楯として加盟書の筆頭に署名してゐるのだから、勢ひ、鐵假面のことにも話が及ぶだらうと思ひ、轟く胸を抑へながら控へてゐると、ルーヴオアは言葉をついで、

『現在、ルイ王を追落すほどの權力を持つてゐるのはこの二人。從つて何とかしてこの二人の權力を殺がねばルイ王の王位も危いわけだから、何かの落度を捜つて權力を殺がうと力ると、兩公のはうでもそれに氣附き、この私に失策させようとさまざまに畫策してゐるといふわけで、いはゞ互ひは犬猿の間柄。どちらが先に蹴落されるかといふ際どい鍔競合になつてをるのです。ところで幸ひなるかな、私のはうに分があつて、兩公がさる大陰謀に加擔してゐる事實が判明したので、色々と手を盡し、そ

の一味の先鋒隊の一人を生擒りにして嚴重に拷問しましたが、いつかな口を割らぬ。兩公爵と陰謀黨の間で往復した手紙や連判狀はどこかへ押込んでしまつてその所在がわからない。何しろ確たる證據がまだ私の手に入つてゐないのだから、私が兩公爵を罪に墮すために蔭でこのやうな奔走してゐることが向ふに知れると、忽ち主客顚倒して、私は宰相の位から追落され、誹毀罪の名目で牢獄に繫がれなければなりません。私の手に殘つた駒は生擒りにしたその士官たゞ一人。これも向ふにわかると奪はれるか殺されるかしてしまふから、どんなことをしても顏を見られぬやうな拵へにしてさる所へ閉込め、氣長に年月をかけて取調べるつもりなのです。……さア、これが私の大祕密。これが洩れでもしたら忽ち牢獄に繫がれなければならぬほどの祕密を打明けたのですから、私の眞實に免じて、愛するとたつたひと言いつてください』

テレエズは、こゝが正念場と、殊更に取合はぬ風を裝ひ、

『あなたはまだ掛引をしていらつしやいます。さういふのが宰相の肚とでも申すのですか』

ルーヴオアは、いきり立つて、

『いま申しあげたことはみな眞實。私がどんな掛引をしました』

『これが掛引でなくて何でせう。あなたの仰しやつたことは眞實かも知れませんが、肝心要なところをみな省いてあるではありませんか。その士官の名もいはなければ、どこに押込めてあるのかその場所さへ仰しやらぬ。……どうせあたしは田舍女、たんとお嬲りなさいませ。あたしは、これで失禮しますから』

拗ねた風に椅子から起ちあがると、ルーヴオアは、慌てふためいてテレエズを引止め、

『言ひます、言ひます。……言ひますから、そんな無情な素振をしないでください。……その男は鐵の假面を被せてさるところに閉込めてありますが、その名は二た通りあつて、一つは……』

と、こゝまで言ひかけたとき、案内もなくサツと扉を明けて部屋のなかへ躍込んで來た一人の男。

鞭を振るやうな鋭い聲で、

『ルーヴオア侯、そのあとを仰しやつてはなりません』

と、叫び立てた。

振返つて見ると、それは一度は雪に閉ぢられたブリユツセルの旅籠屋で、二度目はペロンヌの要塞の典獄室で見たあの陰氣な眼。……冷酷陰慘な顏付をしたナアロオ密偵長。

テレエズは、思はずアツと恐悚の叫聲をあげ、いざとなつたら敵はぬまでもと胴衣の奧へ祕めて來た懷劍の柄に手をかけて身構へてゐると、ナアロオは蛇のやうな眼付で嘗るやうにテレエズの顏を睨め廻してから、

『ウム、これだ、この女だ』

と叫ぶと、いきなりテレエズに飛びかゝり懐劍を握つてゐる手を逆に取つて床のうへ捩伏せた。

咄嗟の出來事で、この場の次第はどういふことを意味するのかと呆氣にとられて眺めてゐたが、この始末を見るとルーヴォアは激怒に顏を紫色にして、

『何をする。貴樣、氣でも狂つたのか』

ナアロオの襟髮を引掴み拳をふるつてところ嫌はず打据ゑると、ナアロオは散々に打たれながら、

『あなたこそ氣でも狂ひましたか、こんな女に蕩されて國家の大祕密を口走るなどとは。……侯爵、この女を誰だと思ひます。陰謀黨先鋒隊の隊長キツペンバツハ、……あのマルセル・ダルモアーズの從妹のテレエズ・ヴアンダムといふ娘です』

ルーヴォアは、耳を藉さず、

『何を痴なことを。俺の許しも受けずに私室に亂入し、根もないたはごとを吐きちらすとは。貴樣、酒にでも醉つたのか。現在貴樣の口からテレエズ・ヴアンダムといふ娘は「半獅神の淵」に沈んで死骸さへも上らなかつたとこの俺に報告したではないか』

『はい、今それを、ご納得のいくやうに申します』

ルーヴォアは、荒々しく足踏みをして、

『えい、默れ默れ、申しあげる申しあげると、申しあげるを觸賣りにでも來たやうに！　愚にもつかぬ手柄立てをしようとして出過ぎた眞似をするナ』

と言ひながら、床のうへに氣を失つてゐるテレエズに眼をつけ、

『おう、これはしたり』

そのそばに駈寄つて優しく抱起し、

『これ夫人、氣を確かに持ちなさい。おゝ、何といふ可哀さうなことを』

額に接吻しながら涙を流す體に、ナアロオはチエッと舌笛を鳴らし、

『いや、どうも、たいへんなご執心。豪腹武骨なあなたをこれまで蕩込んだとすれば、この娘もなかなかの凄腕。……侯爵、どうか眼を覺ましてください。その者は先鋒隊の一味で、最も危險な一人です』

ルーヴォアは、癇聲をあげ、

『煩さい、煩さい。もう二度とラ・ヘイエ夫人の名を口にすることは許さん。さア、歸れ歸れ。歸らなければ摘み出す』

ナアロオ密偵長は、どつかりと椅子に腰をおろし、

『いえ、歸りません。申しあげることを全部お聽取りを願ふまではここから出て行きません。……お聽きください、侯爵、つい先刻、あなたが馬車でこゝへお出になる途中、黑頭巾をかぶつた異形の乞

食があなたの馬車を引停めて何事か訴へましたらう。あの者こそは、あり得ようと思はれぬ不思議な事情で「半獅神の淵」で助かつた生殘りの一人。あなたがどうしても訴へをお取上げにならぬので、已を得ず私のところへ申述に參りました。ラ・ヘイエ夫人と名乘るこの女が、實は、テレエズ・ヴアンダムだといふことがその者の口から判明したのです』

ルーヴオアは、手負の虎のやうに猛り立つて、

『何、乞食の口からわかつたと。そんな者のいふことが何の證據になる』

ナアロオ密偵長は陰氣に眼を伏せ、あるかなきかといふやうな薄い唇に冷酷な微笑を浮べながら、

『……この女はあなたの口から鐵假面の名と居所を言はせようとしたでせう。それが何よりの證據です』

ナアロオ密偵長の言葉にルーヴオアもハツと杜胸を衝かれ、ヨロヨロと二三歩うしろへよろけ、そこにあつた椅子にドツと落込むと、

『如何にも俺にそれを言はせようとした』

ナアロオ密偵長は、勝誇つた色で、

『もう一つの證據は、これ、この通り』

と、言ひながら、玉をのべたやうなテレエズの胸元へ遠慮會釋もなく手を差入れ、匿し持つてゐた懷劍をグイと引拔いて卓の上へ投出し、

『これであなたを刺さうとしてをりました。これでもご納得がいきませんか』

さすがのルーヴオアも夢から覺めたやうな心持で嚴しく眉根を寄せて懷劍とテレエズの顏を見較べてゐるうちにナアロオ密偵長はいよいよ毒々しい口調で、

『これも先鋒隊の一人で、この女の伴をして馬車を馭して來た波蘭人コフスキー・クラセヴキッチといふ奴はたつた今この料理店の入口で捕縛し、私の屋敷の留置場へ送りましたが、この女の一味はその男ばかりでなく、王族貴族の家庭に出入りし、一方ならぬ勢力を持つてゐる女易者、毒藥調合人ラ・ヴオアザンとソアツソン伯爵夫人が一致團結して鐵假面救出を策謀し、それによつてルイ王ならびにあなたを打倒しようと頻りに狂奔してゐるのです。……私が更めて申しあげるまでもなく、我々が兩公爵の祕密を追究してゐることがそろそろ向ふに知れかゝつてゐて、是が非でも加盟書を手に入れなければあなたの地位も危いといふ際どい瀨戸際。私の手許に達した報告で、この女がグリュッセルの聖ジヤン寺の墓地の奥へ入つて行く姿を認めたといふことがわかつてをりますから、この女こそは加盟書の在所を知つてゐる唯一の生證人。このはうは私が拷問して白狀させますが、放つて置けないのはラ・ヴオアザンとソアツソン伯爵夫人。苦し紛れに鐵假面の事實を兩公爵に密訴でもされたら私どものみならずルイ王のご身邊も危くなるわけ。最早、躊躇してゐる場合ではありません。……口實

はどんなふうにでも拵上げますから、これからすぐ宮廷へおいでになつてルイ王をお說きになり、兩人の逮捕の勅令をいたゞいて下さい。……さア、どうか一刻も早く。王位の浮沈にも關はる場合、躊躇はご無用です』

ルーヴオアは手に額を押當てゝ默然と俯向いてゐたが、唐突にスツクリと起ちあがると滿面を朱に染め、

『よし、よくわかつた。このルーヴオアとしては生涯にたつた一度の戀愛ではあつたが、王にたいする忠節のためにはそれさへ捨てなくてはなるまい』

ルーヴオアは、長椅子の傍へ歩み寄り、その上で氣を失つてゐる美しいテレエズの顏を感慨無量の面持で眺めてからナアロオ密偵長のはうへ振返り、

『ナアロオ、この女を逮捕しろ。……おれはこれから宮廷へ行つて、ソアッソン伯爵夫人の逮捕の勅令を貰つて置くから、貴樣、ヴエルサイユまで取りに來い』

と言ひ捨て、嚴のやうな肩を振りながら荒々しく出て行つた。

ナアロオ密偵長は、含み笑ひをしながらその後姿へ慇懃な禮をし、

『いや、さう來なくてはならぬところです。「白い寢臺」で失敗つて以來、伯爵夫人にたいして少々こちらが弱味になつてゐる。それを今日まで放つて置くなンざ、まるで自分の首を絞める繩をゆるゆ

る自分で綯つてゐるやうなもの。なんとでも口實をつけて、一日も早くこの世から追ひやつてしまはなくてはならなかつたのです。……まアしかし、今日だつて遲すぎるといふことはない。勅令さへ貰つてくだされば、後のところは手前が然るべく取計ひます。……ナアロオ密偵長のお手並拜見。……一人の人間をこの世から消すにしても樣々と奇拔な方法があるのですからねえ。まアいづれそのうちに手前がどんな智慧を絞つたかお覺りになる時もあるでせう。……伊太利女め、今までさんざ手を燒かせやがつたが、いよいよこれで寂滅往生か。フン、これで世間がよつぽど靜かになるだらう」

例によつて、手を振り足を振り、首をすくめたり舌を出したり、さまざまな身振りをしながらブツブツと呟いてゐたが、チラと長椅子の方へ横目づかひすると、思ひ出したやうにノソノソとこちらへ戻つて來、刺すやうな毒々しい眼付でテレエズの顏を眺め、

『……なるほど、ちつとは見られる面相をしてゐるが、多寡が乳臭い娘ッ子。こんなものに迷ひ込むなんてルーヴオア侯も少々落目かな。……それにしても、こいつが生き殘つてゐたとは、ナアロオ密偵長たるものも今日まで夢露知らなかつた。なんとも運のいゝ女さ。……女だてらに謀叛人交りするだけあつて、人もあらうにルーヴオア侯を色仕掛けにし、「鐵假面」の居所を引出さうなンて企んだまでは大出來だが、天なるかな命なるかな、ナアロオ密偵長はしかく御健在。貴樣のやうな牝鷄の雛ッ子にノメノメと大それた眞似をさせては置かない。……このおれさまをスカして、利いた風な眞似

をした仕返しに、これからおれの邸の留置場へ連れて行つて一寸不思議な目に逢はしてやる。どんなことがあるか待つてゐるがいゝ。……ふ、ふ、ふ、知りたけりやア言つてきかせようか。おれの留置場にはナ、骸骨と人間の合の子のやうな、……大鎌を持つたあの「死神」そつくりの化物がゐるから貴様をその部屋へ入れてやる。舐められるなと抱かれるなと精々可愛がつて貰ふがいゝ。いや、面白い、面白い。こんな愉快なことはない。死神と女神の抱合せなンざ、誰の繪にもなかつた趣向だ』

『コフスキーといふ野郎は一と足先にこれからバスチーユへ持つて行くが、貴様の方はあの化物にさんざ嬲らせ、それからゆつくりと鐵假面を被せてやる。……これでまた鐵假面が一つ増えるか。ヘツへ、女の鐵假面なンざ、これア、よつぽど粋だぜ。……これでもう一人ラ・ヴオアザンを〆上れば一件の連中は全部根絶し。いや、愉快、愉快』

たまらないといふ風に身體を二つに折つてケラケラと笑ひ出した。

第三部

悲哀の谷

一、囚人「白助」の差嘆並に、袖に書く血文字

一六八一年といへば、巴里にあのやうな出來事があつてからちやうど八年後。

佛國のほんの南西端、ピエモン州、ピニュロールといふ寒村の要塞監獄に七年ほど前から幽閉されて殘忍な取扱ひを受けてゐるあはれな囚人があつた。

この邊はもとサヴォイ公國の一部だつたが、一六三二年に佛蘭西に併合された地方で、西はパルマ公國、北は瑞西に境を接したアルプスの南麓。

氷雪に蔽はれた嶮峻な山々が屏風のやうに立て連り、僅かばかりの森林がある深く暗い谷の底をボオの急流が銀の帶のやうに流れ下つてゐる。

ピニュロールの要塞は、佛國領の南西の邊關の一つで、削り立つたやうな深い谷の間にあり、一方は溪流に臨み、うしろは磽确たる岩山、四時、川霧と瘴氣にとざされて晝間でさへ陰暗と薄暗い。

獄舍のあるあたりは、溪流を天然の濠とした嚴重な一劃で、獄舍は軒端まで高々と石塀に圍はれてゐるので、ろくろく陽の光さへ差込まず、煙のやうな山霧ばかりが自在に窓から往來する。

二坪にも足らぬ穢苦しい狹い監房の壁に寄せて牛馬の寢所かと思はれるやうな粗末な藁床がある。

窓の傍でさへ仄暗いのに、そこはずつと片隅に寄つてゐるのでおんどりとした闇溜になつてゐる。

その闇溜の中で微かに藁床が軋む音がしたと思ふと、頭からスツポリと黑い丸い鐵の甲を被つた痩せさらばへた襤褸屑のやうな男がよろめき出して來た。

赤錆の浮いた監房の鐵の扉に一塊の鐵の丸のやうな奇妙な頭を押しつけて廊下の氣配をうかゞつてゐたが、やがて、地の底からでも響くやうな力の弱い嗄聲で、

『……ちやうど、交代檢査の時刻だから、しばらくサンマルスもこゝへはやつて來まい。……どれ、この間に、假面を脫いで顏を風に吹かせようか』

途切れ途切れに呟いてから、長い溜息を一つ吐き、

『……七年餘りの苦心のすゑ、蝶番の螺旋釘を拔いてこの重苦しいものを脫ぐことを覺え、わづかの間、顏を風に晒すことがこの上もない愉しみ。……あゝ、どのやうに貧しく、また哀れな者であつても、當然の權利として享有し、これが自然と訝しみもせぬことが俺にとつては何物にも代へ難い唯一無上の愉しみであるとは！……いや、愚痴を言つて見ても始まらぬ。……さ、あいつの來ぬ間に……』

兩手を首のうしろに廻して蝶番のあたりをまさぐつてゐたが、そのうちにソロソロと假面を脫ぎ取つた。

あゝ、これが人の顏といふならば、まづ、これ以上の悲慘な類型はなからう。

陽の光を透さぬ厚い鐵の假面に長い間包まれてゐたゝめか髪の色素が失せて異樣な白さになり、それが蓬々と目の上まで垂下つてゐる。頰は落窪んで羊皮紙のやうに涸れ、唇まで自然の色を失ひその形でそこに唇があると察しられるばかり。

衣服はズタズタに引破れ垢で汚れ、どこが襟やら袖やら、ちやうど木の葉でも綴り合はせて身體に掛けてゐるといつたふう。

齢は四十位とも見え、また七十位とも見える。年齢を失つたといふのは、多分このやうな男のことをいふのであらう。人間といふよりは、これは人間の脱殼。

假に、テレエズやコフスキーを連れて來てこの男の前に立たせても、このあはれな一造形物がアルモアーズなのかオビリエ大尉なのか容易に判定を下すことは出來なからう。

いかなる人間といへども、この世で嘗つてこれほど無慘無悲な取扱ひを受けたことはなかつた。

その慘苦な年月が、むかしは壯健であつたらうその人を、このやうに見るも哀れなほどに零落させてしまつたのにちがひないが、それでも死にもせずかうして命を長らへてゐるのは、この囚人の精神の中にまだ燃え盡きぬ一點の靈火が燠のやうに殘つてゐるからであらう。

肉體は影のやうに衰へてゐるが、眼だけは清く深く澄んで、その奥に烈々たる光を宿してゐる。瞥へていふなら、僅かに消え殘つた生命の火と精氣と生に對する執着が皆こゝに集つてこの烈しい光を

なすかとも思はれるのである。

あはれむべき囚人は、太い鐵の棒が籠の目のやうに縱横に組合はされた獄窓に倚つて吸ひ取るやうな眼付で空のあるはうを見上げてゐたが、突然、鞭にでもうたれたやうにビクツと身を顫はせると、

『おや、唄聲がきこえる』

と、呟いた。

耳を澄ませば聞えるが、窓から身體を離すと聞えなくなる。塀の外で唄つてゐるのか、深い谿間で唄つてゐるのかわからないが、せゝらぎの音にさへぎられながら途切れとぎれに聞えてくるのはたしかに優しげな唄聲。……心なしか、この窓に屆けとでもいふやうに、同じ歌をいくども繰返し切々と心をこめて唄つてゐる。

哀れな囚人は、精靈でも憑つたやうにくわツと眼を押開き、窓の鐵棒を折れよとばかり摑りしめながら唄聲に聽き入つてゐたが、

『氣の迷ひではない、たしかに女の唄聲。……それにしても、どうして同じ唄ばかり繰返してゐるのだらう。この俺に聞けよと唄つてゐるやうにしか思はれぬが……』

と、狂したやうに身悶えしてゐるうちに、唄聲は追々消えるやうに細くなり、やがて、せゝらぎの音だけになつてしまつた。

囚人は窓から身を離すと兩手で顏を覆つて壁に身を投げかけ、

『あゝ、まだ悟り切れぬ。……たとへ、どのやうに迫害されても、この命さへ保つてゐたら、十五年、二十年、或ひは三十年の後にでもいつか救出されることもあらうかと思ひ、消ゆべき命を大切に守りつゞけて來たが、死んだと思はれてゐるこの俺を救出しに來るものなどあらう道理もない。……むかしは友もあり愛するものもあつたが、政府の手にかゝつてみな空しくなつてしまつた。たとへ、一人や二人は生き殘つたとしても、俺がこんな邊境の要塞監獄で慘苦な明け暮れを送つてゐることなぞどうして知らう。俺がこゝにかうして生きてゐることは、ルイ王とルーヴオアとナアロオの三人のほか、この世に知つてゐるものはないはず。……もう思ふまい思ふまい、思へばかへつて愁ひを增すばかり。生涯鐵假面を被せられてどこかの牢で死ぬとさへ悟れば辛いも悲しいもないわけ』

壁に言ひきかせるやうに呟きながら、殘り惜しげに窓のはうへ振返り、

『由ないことに心を騷がせたばかりに、いつそ味氣ない氣持になつてきた。間もなくサンマルスが洗濯物を持つてくる時刻だから、もうそろそろ假面を被らなければ……』

床に落ちてゐた假面を取上げようとするとき、またほのぼのと唄聲がきこえてきた。

囚人は、窓のそばへ駈戻つて、

『あゝ、あれは十年ほど前に巴里で流行つた「君を慕ひて」といふ小唄。それそれ、「……君はいづこに、われに答へよ」と唄つてゐる。……たしかに歌のこころを通はせようとしてうたつてゐる唄！よし、では、あの玉を！』

言ふ間ももどかしさうに藁床の底を探つて杏の實ほどの大きさの玉を取出し、

『かういふ折もあらうかと夢想して、麵麭の殘りを煉り固め、爪で俺の名を彫りつけ、長い年月丹精して石のやう乾し固めて置いたが、いよいよこれを投げる機會がきたやうだ。この長年の俺の夢想も希望もみなこの玉ひとつに籠つてゐる。……これを造つてゐる間は憂さも辛さも忘れたものだつたから、これを手離すのはさながら生きた子供にでも別れるやうな思ひがする』

涙を浮べながら麵麭屑の玉に接吻し、

『さア、俺の命よ、行つてこい。どうか、唄をうたつてゐるあの女に拾はれておくれ』

禱るやうに呟いて、鐵格子の間から塀の外へその玉を投出すと、暫くしてドブーンと微かな水音が返つてきた。玉が谷川の中へ落込んだその音だつた。

哀れな囚人は、アッと聲をあげ、

『この塀の外はすぐ谷川だつたのか。あゝ、知らなかつた、知らなかつた。俺はまア何といふ不運な男だらう。これで、俺の夢も望みもおしまひになつてしまつた』

落膽のあまり藁床の方までよろめいて行つて、藁床と壁の間の窪みへ仰向けさまに落込むと聲をあ

げて泣きだした。

廊下に跫音がし、少しばかり押開けた扉の隙から洗濯物が投込まれた。

鐵假面は手早く假面をつけると、寂然と藁床の端に掛けてゐたが、そのうちに、突然何かの思念が心をかすめたと見え、ッと立上ると、

『おゝ、まだあゝして唄つてゐる。……あの悟れよがしの素振から察すると、たとへば、……たとへば、この洗濯物の中に何か隱してあつて、それを見ろといふ謎ではないかしらん』

顫へる手をソロソロと洗濯物のはうへ伸ばし、

『何かあると思へばかへつて氣にかゝる。何を望むでもないが、せめて、心遣りに……』

ともしい下着類を取上げ、膝のうへで打返し打返し眺めて見ると、袖口の裏のところに何か薄黑いところがある。慌て假面に近づけて眺めて見ると、暗くてよく見えないがどうやら文字のやうでもある。

鐵假面は、アッと叫び聲をあげ、指先を火傷でもしたやうに下着を投げつけてうしろへ飛退き、胸に手をあてゝ動悸を押へながら脅えたやうに立竦んでゐたが、

『いや、夢でもない、見違ひでもない。たしかに文字のやうだつた』

兩手を頭のうしろに廻してもどかしさうに假面を外し、火のついたやうな眼眸で袖裏を檢めると、

そこには思ひもかけぬこんな文字。

あなたは誰？　救ふ手段あり。洗濯物の端にあなたの名を。

鐵假面は氣拔けした人のやうに眼を空にしてぼんやりと壁に凭れてゐたが、急に溢れるやうに涙を流し、

『あそこに俺を救出さうとしてゐるひとがゐる。あの唄で俺にむかしのことを思ひ出させようとしてゐるあの女性はいつたい誰だらう？』

遠い記憶の中を搔さぐるやうに視線を宙に漂はせてゐたが、急に何ともいひやうのない悅びの色を顏一面に漲らせ、

『もしや、あの人では？……さうならば、急いで指圖通りに運ばなければ！』

憑れたやうにソワソワと監房のなかを狼狽へ廻りながら、

『あゝ、何といふ辛いこと。……書けど言つたとて、ペンもインキもないのにどうして字など書けやうか』

兩手で顏を蔽つて呻吟してゐたが、間もなく決然と顏をあげ、

『あまり慘苦な生活を續けたゝめ、むかしは有餘るほどあつた勇氣がいつの間にか俺の心から脫け落ち、こんな臆した氣質に變へてしまつたのか。假りに、これが露見したところが、鐵の假面を被せられて生きながら葬られる以上の責苦があるはずはない。この期を逃がしたら、いつまたこんな機會が來るか知れぬ。……おゝ、さうだ、金曜日毎に夕食につける肴の骨。あれがその邊に落ちてゐるはず。あれをペンにして。……インキは指を喰切つてその血で用を達せばいゝ。……さう言つてゐるうちにもサンマルスが洗濯物を蒐めに來る。さ、少しも早く……』

大急ぎで着てゐた下着を脫ぐと、右の中指の根元を喰裂いて手早くその血を右の掌で受け、肴の骨を拾つてペンにして血の文字を書きはじめた。

下着の袖裏には、

手巾を見よ

と、書き、手巾の隅のはうへは、じぶんの名と捕へられた時と處。自分のゐる監房の模樣を細かくしるし、下着の袖と手巾の端を結び合せて堅い結玉をつくり、それを解かなければ文字を見られぬやうにこしらへて床の上に一纏めにして置き、もとのやうに假面を被つて待つてゐるところへ、まるで驅込むやうな勢ひで要塞長のサンマルスが入つて來た。

ペロンヌの要塞にゐた時は薄い胡麻鹽だつた鬢も今は半ば白くなり、額が廣く拔け上つて、もとも

と禿鷹のやうな酷薄な面がまへがいよいよ無慈悲な相になつてゐる。

サンマルスは、早足で鐵假面の側まで歩み寄ると、眉間に八の字を寄せ、目脂で赤く爛れた瞼の間から守錢奴のやうな狡猾な瞳をのぞかせてジロジロと鐵假面のやうすに眼を配りながら、

『オイ、「白助」、たつたいま塀の向ふで誰か歌をうたつてゐたが、貴樣それを聽いたらうナ』

鐵假面は、一心に心を落着けながら、

『いや、一向に。……何しろ、こんなものをスツポリ被つてゐるのだから、そんなものが聞えよう道理がないではありませんか』

サンマルスは、安心したやうに、

『うむ、それならばいゝが』

と、言つて、急に改まつた口調になり、

『それはそれとして、今日は特別な話がある』

鐵假面は、ハツトと息を嚥み、

『特別な話とは？』

サンマルスは、急に勿體振つたやうすになつて、聲に重みをつけ、

『いや、ほかのことではない。……この間、貴樣が政府に差出した手紙にたいして、忝なくもルー

ヴオア閣下から俺にまで御返事があつた。……貴樣が俺の命令をよく守つて至つて神妙にしてゐるとこの俺がわざわざ書き添へてやつたので、祈禱書を差入れることを特に許されたばかりではなく、年に一度、降誕祭の日に彌撒を受けさせてやれといふ有難いお言葉だ』

囚人に祈禱書を與へるのは極くあたりまへのこと。また、どんな極惡の大罪人でも一週に一度彌撒を聽くことを許されてゐるのに、年に一度の彌撒をお慈悲だと思へと言ふ言葉に、今日までどのやうな苛酷な待遇も甘んじて受けてゐた鐵假面も、さすがに悲憤の涙に咽んで低く頭を垂れてゐると、サンマルスは聲を荒らげ、

『コレ、どうした。有難いと言はぬか。お禮を申しあげぬか』

鐵假面は、煮えかへるやうな胸をおさへながら、

『……まことに、どうも、……有難う』

『ルーヴオアさまの御恩は忘れませぬ、と言ふのだ』

『……』

『どうした。……なぜ、默つてゐる。これくらゐのことを言へぬことはあるまい。……早く言へ！』

鐵假面は、震へる聲で、

『……ルーヴオア、さまの、……御恩は、忘れませぬ』

と呟くやうに言つて、サンマルスの顏を振仰ぎ、

『私はあの手紙に、……この七年の間、陽の光といふものを見たことがないから、ほんの少しだけ見させていたゞきたいと願つて置きましたが、その方はどうなりました』

サンマルスは、セヽラ笑つて、

『それは、俺が打消して置いた』

『何、打消した！』

『陽の光を見せようとすると、目隱塀のない監房に移さねばならぬ。それでは不用心ですからこの願ひはお取上げにならぬはうがよろしいとこの俺が書き足してやつた』

あまりにも無慈悲なあしらひに、鐵假面は悲しさに耐へかねてドツと藁床のうへに倒れかゝると、サンマルスは鐵假面の悲嘆を尻目にかけて大口を開いて、アハヽと笑ひ出し、

『貴樣に陽の光などは身分不相應。それこそ大それた望みといふものだわ。貴樣は知らぬだらうが、こゝはアルプスの南麓の深い谷間で、めつたに太陽などが照らぬから、要塞長のこの俺さへこゝへ來てから大して陽の目などを見たことがない。……それに霧ばかりかゝつて濕氣がはげしく、そのためにひどく眼を痛めて、むかしのやうに細かい字が讀めぬやうになつた』

サンマルスは、爛れた眼をしよぼつかせながら、

『これ見ろ、この通りだ。……それもこれも、みな、貴様のため。……貴様があんな太いことを企てさへしなかつたら、俺はベロンヌの要塞長から出世して、今頃はバスチーユの典獄になつてゐる頃。……怨みを言ひたいのはむしろ俺の方だ。……陽の光どころか、本來ならば土牢へでもぶち込んで、怨みのいくぶんでも晴らしてやりたいところだが、下手に死なれでもしたらルーヴォア閣下にお叱りを受けねばならぬから、まアこの位のところで勘辨してあるのだ』

嘲笑ふやうに唇をへの字に引歪め、

『まアまア、そんな泣ツ面をせずにもうすこし我慢してゐろ。……俺にしたところが、いつまでもこんな山の中に置かれることもあるまい。長年の俺の忠勤が認められて、いづれ間もなくもそつとましなところへ轉任させられるだらうから、その時は貴様も一緒に連れて行つてやる』

『えッ、また、あなたの轉任先へ？』

サンマルスは、椅子から立上つてズボンの埃を拂ひながら、

『當然なことを。貴様ばかりではない「黑・ノアース」の方も連れて行く。貴様ら二人は、生涯俺から離れることが出來ぬ運命なのだ。籠の鳥のやうに死ぬまで俺の手飼にしておく。まアそのつもりでゐるがよからう。……うむ、こゝに出してあるのが汚れものか』

床の上へ纏めてあつた下着類を小脇に抱へてノソノソと監房から出て行つた。

二、洗濯女バルトロメ並に、灰になつた手巾

谷底からいきなり突立ちあがつた岩山の麓に小さな窓を開けた灰色の要塞の壁が屏風のやうに立ちつゞき、その裾をボオの急流が白い泡を噴きながらはげしい水音を立てゝ馳せ下つてゐる。

年がら年中、白い霧が立迷つてゐる陰氣な谷合だが、さすがに五月ともなれば、この谷間にも僅かながら春の陽差が訪れ、岩の間でまばらに矢車草の花が咲き、銀松や山毛欅の梢で小鳥が啼く。

今日はとりわけいゝ日並で、絶壁の間の帶のやうに細い蒼空に暖かい春の太陽が輝いてゐる。

監獄の濠を隔てゝ山懷のやうになつたところにむかし砲臺のあつた空地があつて、そこで濡れた洗濯物を綱に掛けながら屈托のないやうすで唄をうたつてゐる女がある。

この要塞に勤務してゐるマリオ軍曹の妻のバルトロメといふ女。

マリオは伊太利のゼノアの軍隊で砲兵伍長を勤めてゐたといふことだつたが、七年ほど前にこのビニュロールに流れて來て要塞兵を志願した。

僻地の要塞では外國兵や野武士を雇入れるのが通例なので、試みに傭入れると無頼怠惰な兵士の風に染まず、勤勉に職務に精を出すので、追々引立てゝ軍曹にし、その妻のバルトロメに監獄の洗濯物

を一手に任せるやうになつた。

要塞に女を寢泊りさせることは出來ないので、バルトロメはビニュロールの村外れに小さな家を借りてそこに住み、毎日要塞へ洗濯物を取りに來り、マリオが非番のときは二言三言立話しては歸つて行く。

伊太利人の常で、いたつて氣さくな性だが、今日はめづらしくよく晴れたので氣が浮立つらしく、洗濯物の始末をしながら樂しさうに鼻唄をうたつてゐる。

洗晒した衣服の裾をたくしあげて下着を丸出にし、髪はもう幾月も櫛の目を通したことがなからうと思はれるほどだが、面差は優しく、手足もしなやかで形よく、貴婦人のやうな裝ひをさせたら、どんなにか艶かだらうと思はれる。

バルトロメは籠の洗濯物を廣げては綱に掛けてゐるが、口は手よりも忙しく、濠を隔てゝすぐ眼の前に聳立つてゐる監獄の塀を見上げながら、唄聲が屆けとでもいふやうに、小休みもなくそのはうへ唄ひあげる。

それだけでも訝かしいのに、伊太利人だといふのに、むかし巴里で流行つた「君を慕ひて」といふ小唄を、奇麗な佛蘭西語で繰返しくりかへし唄つては、あちらこちらと急がしく監房の窓に眼を走らせてゐる。

もう間もなく干し終へようとしてゐると、一人の番卒が急ぎ足で濠の橋を渡つて來て、

『おい、バルトロメ、何か用があるといつて、典獄が呼んでゐるぜ』

バルトロメは、愛想よくニツコリ笑つて、

『はい、それはどうもご苦勞さま。何の用でしたらう』

番卒はむづかしい顔をして、

『何の用かおれは知らんが、何だかだいぶお冠のやうだつた。愚圖愚圖してゐるとまた雷が落ちるから、そんなことは後にして早く行くがいゝ』

バルトロメは、キツと眉を寄せたがすぐ顔色を直して、

『雷は毎度のことですが、どうしたといふのでせう、お叱りを受けるやうな失敗をした覺えはないのだけど……』

大急ぎで洗濯物を干し終へ、空の籠を小脇に抱へて要塞の廣い中庭を横切り、要塞長の邸の裏口へまはつて案内を乞ふと、居間へ、といつてサンマルスの部屋へ通された。

いつもとだいぶやうすが違ふので、バルトロメは怯々と入口に立竦んでゐると、サンマルスは太い薪が燃えてゐる煖爐の前に立ちはだかりながらキツとバルトロメを睨めつけ、

『おい、バルトロメ、貴樣、いま、砲臺の空地で何をしてゐた』

バルトロメは、小腰をかがめて、

『はい、あの、あそこで洗濯物を干してをりました』

サンマルスは地團太踏んで、

『えい、これ、誰があそこへ洗濯物を干すことを許した』

『言葉を返して恐入りますが、あそこはこの谷間でいちばんよく陽が當りますので、副長にお願ひしてみましたら、差支へないといふことで……』

『やかましい、默れ。……副長は俺の部下だ。副長が許したか知れぬが、この俺が許した覺えはない。俺に無斷で氣儘な眞似をするといふのは、實にどうも、太いやつだ』

『でも、些細なことでいちいちお手數を煩はしてはと存じまして……』

『默れ默れ、ツベコベいふな。今後はあそこで干物など一切干すことはならん。確かと申渡したぞ』

と、言つて、鷹のやうな眼を鋭く光らせ、

『そればかりではない、貴樣は監獄のある塀の下で大きな聲で歌をうたつてゐたナ。誤魔化しても知つてゐるぞ』

『べつに誤魔化しなどいたしません。仕事をするときに歌をうたふのはわたくしの癖。今日はとりわけていゝお天氣で、めつたに來ない小鳥の聲などがいたしますものですから、つい、浮々して。……

あそこが囚人のゐるところだと知つてゐましたら、いくら何でも歌など唄ひませんでしたものを。知らないことでございますから、何卒、ごかんべんを』

『何、知らぬ。七年も監獄に出入りして囚人のゐるところを見ると、貴樣、大いに怪しいナ』

『飛んでもございませんこと。いつも用度長屋の裏口まで來て、洗濯物を受取るとすぐ引返すのでございますし、あの空地に出たのは今日がはじめて。囚人のゐるところなぞ知らうはずはございません』

サンマルスは、苦り切つて、

『それアさうよ。貴樣などに囚人の居所を知られるやうでは祕密監獄の意味をなさんからナ』

と、言つて、まだ不承の面持で、

『しかし何だナ、やはり、まだ腑に落ちぬところがある。伊太利人の貴樣が、佛蘭西の小唄をうたふのはどういふわけだ。あれは十年ほど前に巴里で流行した歌だ。チト妙ぢやないか』

バルトロメは、事もなげに笑つて、

『そんなことでございますか。それは、先年、マリオが巴里府の傭兵になつてあちらへ參りましたときわたくしも一緒に行き、そのとき覺えた歌でございます。べつに怪しいなどといふことでは……』

サンマルスは、地團太を踏んで、

『えゝ、煩さい。ツベコベとよく喋べる女だ。目をかけられるのをいゝことにしてあまり增長するとマリオもろともこのビニュロールから放逐してしまふゾ』

バルトロメは、小腰をかゞめて、

『お氣にさはつて申譯ありません。以後、かならず氣をつけますから、今日のところは、なにとぞ、どかんべん下さいませ』

と、詫ゝを言ひながら、サンマルスが持つてゐる汚れものに眼をつけ、

『それは洗濯にお出しになる汚れものでございますか。では、それもいたゞいて……』

そのはうへ手を伸ばしかけると、サンマルスはツイと身を退いて、

『出過ぎた眞似をするな。これは、さうやすやすと渡されぬ』

と言つて、マジマジとバルトロメの顏を眺め、

『うむ、どうした？　何でこの洗濯物をさう急いで受取りたがる。何でこれが入用なのだ』

バルトロメは、ビクツと膝頭を震はせ、

『……それは、その、間もなくまた雨になりますから、今日のうちに急いで釜で煮てしまはなければ……』

『雨が降つたら、また天氣になるのを待てばいゝ。この汚れものは少々こちらに入用があるから、明日の朝また改めて取りに來い』

どうしたのか、バルトロメは、よろりとよろけ、急に顏の色まで惡くなつて、お辭儀もそこそこに部屋から出て行く。

サンマルスは、その後姿を眺めながら、眉間に皺を寄せて小首をひねり、

『どうもチト妙だわい。……この洗濯物を渡されぬと言つたら、急にブルブルと顫へ出した。長年、典獄で鍛へあげた俺の眼に狂ひがあらう筈はない。……今まで元氣に喋り立てゝゐたやつが、忽ち打つて變つて、あのやうに、絞首臺へでも上るやうな足調でトボトボ歩いて行く。……これア確かに何か曰がある。……よし、ひとつ念入りにこの汚れものを調べてくれよう』

アルプス山中の習慣で、五月になつてもまだ火を絶やさぬ大きな壁煖爐の傍へ行つて火明りで洗濯物を調べようとしてゐるところへ、サンマルスの妻のローランヌが入つて來て、

『おや、そこで何をしてゐます。火の中から金貨でも拾はうといふのですか』

と、馬鹿にしたやうなことを言つた。

ローランヌの實家は家柄がよく、妹のド・ブウロオ夫人は宮廷にも出入りするといふので、それを鼻にかけて兎角サンマルスを下目に見る風がある。

サンマルスが何か狼狽て背後に隱しながら煖爐の前を離れようとするのをローランヌは眼敏く見て

とり、

『おや、妙な眞似をなさること。何を隱したのです、お見せなさい』

ひつたくつて眺めると、おゝ厭だ、といふ風に床の上へ投出し、

『これは囚人の下着ではありませんか。何でこんな物を仔細らしくひねくり廻していらつしやるの』

サンマルスは、當惑げに額へ手をやり、

『まア、さう言つてくれるな。お前には汚らはしいとしか見えぬだらうが、ひよつとすると、この中にわしの出世の緒口が潜んでゐるかも知れんのだ。……見られた以上はしやうがない。ついでのことに、この汚れもののどこかに字でも書いてゐないかよく調べて見てくれ。こゝへ來てから視力が弱くなつて、細かい字は讀みかねるから』

ローランヌは、柳眉を逆立てゝ、

『汚らはしい、そんなことは下女におさせなさい。いまこゝへ呼びますから』

と、呼鈴の綱を引きかけるとサンマルスは椅子から飛び上つて、

『飛んでもない。國家の大祕密に關係のあるものを下女などに渡されてたまるものか』

ローランヌは、ツンとして、

『こんな穢いものが國家の大祕密に關係があるんですつて？　人をからかふのもいゝ加減になさい』

サンマルスは、躍氣となつて、

『穢いなどとは勿體ない。わしにとつては寶物も同然。あまりさう口汚くいつてくれるな。……これはナ、わしがよく「白助」と呼んでゐるあの囚人の汚れものだ。この洗濯物に文字でも書きつけて外部の一味と通信でもしてゐるのではないかそれを調べようといふのだ』

『通信するならおさせなさいな。こんな嚴重な要塞監獄に閉込めてある以上、どうジタバタしたつて外部からなど手が出せるものですか。一體、あなたはすこしコセコセし過ぎます。そんなちつぽけな了見でよく要塞長などが勤まりますこと。……そんな風にキヨトキヨトしてばかりゐるから大切な役を失敗つて、こんなところへ左遷されるやうになるのです。……洗濯に出すのがそんなに怖かつたら、煖爐の中へ投込んでしまへばいゝ。……そら、こんなぐあひにして』

靴の爪先に下着を引掛けて火の中へ蹴込まうとするのを、サンマルスはワツと叫んでローランヌの肩にしがみつき、

『待つてくれ待つてくれ、こいつを燒かれては玉なしだ。せつかくの昇進の道が絶えてしまふ』

『くだらない。こんな穢い物で昇進するのは繿褸買ひ位なものでせう』

『お前はもう忘れたか。……いつか囚人が靴下の毛糸をぬいてそれを並べ、喰殘した麵麭を練りつけて紙のやうにこしらへ、それに字を書いて出さうとしたのを俺が運よく發見してルーヴオア侯へ上申

したところが、その手柄で年俸を增されたことがあつたらう。ところで、これはそれどころの段では
ない。お前が歸りたい歸りたいと口癖のやうに言つてゐる巴里へこれによつて呼返されることにもな
らうといふのだ』

ローランヌは、忽ち貪慾に眼を輝かして、

『おや、そんなわけなのですか。そんならさうと早くおつしやればいゝものを。……では、早速調べ
て見ませう』

下着を取上げると、拔目なく縫目まで剝がすやうにして綿密に調べ上げ、下着と手巾を結合せてあ
る結び玉を解いて手巾をひろげると、

『おや、こゝに何か書いてあります』

と、呼び立てた。サンマルスは狂喜して、

『何、書いてある。それは、ありがたい。一體、何が書いてあるんだ、さア、早く讀んでくれ。早く
早く……』

夢中になつて急き立てるのを、ローランヌの方は、落着拂つて火明りに照しながら、

『……では、讀みますから聞いていらつしやい。……おゝ、こんなことが書いてあります。……「余
は一六七三年三月二十八日の夜半、佛蘭西ノール縣ペロンヌの要塞に近き（半獅子の淵）を渡らん

としてその途中捉へられたる者。すなはち余の名は……』

と、こゝまで讀みあげると、サンマルスはいきなり妻の手に飛びつくと手巾を引つたくつて火の中
へ投込み、すつかり灰になつたのを見すますと、やうやく安堵の體で額の冷汗を拭き、

『いや、危なかつた、危なかつた。……しかし、かうしておけば、これで國家の祕密は無事安泰。……
それにしても、俺も運の好いところがある。かういふ際どいところで喰止めることが出來たといふの
は、つまるところ、まだ出世の神に見放されぬ證據だらうテ』

そばにゐるローランヌのことも忘れたやうに、獨りでブツブツ呟いてゐるのを、ローランヌは、冷
やかに見下ろし、

『わたしにも言はれぬ國家の祕密といふなら、べつに訊きたいとも思ひませんが、あなたのすること
はまるつきり尻拔けです』

サンマルスは眉を顰めて、

『それは、どういふわけだ』

『あのあとにまだ六行ばかり細々と書いてありました。あれを讀むと、誰に通信したものか、どん
な打合せがあつたものか何もかもくはしくわかつたものを。大切なところを讀ませもせずにいきなり
ひつたくつて燒いてしまふなんて、あなたといふ人はあまり利巧ではありませんね。見棄てぬどころ

か、出世の神様などはとうのむかしに愛想をつかしてゐることでせうよ』

サンマルスは、椅子から飛びあがつて、

『や、や、それは大變。えらいものを燒捨てた』

煖爐のはうへ駈寄つて火搔棒で火のなかを搔廻したが、一度灰になつたものがまたそこから出て來やう筈もない。

ローランヌは、氣拔けしたやうに火の中を見詰めてゐるサンマルスの横顏を情けなささうに眺めやりながら、

『あんなものぐらゐが燃えたつて命でも奪られるやうに悄氣かへるには及ばないではありませんか。何事も氣附かなかつたやうに今まで通りに扱つてゐれば、向ふは油斷してまた通信を始めるでせうからなにもそんなに氣落ちするほどのことはありはしない』

サンマルスは、息を吹きかへして、

『さすがお前は家柄がいゝだけあつて智慧も俺よりもよく廻る。言はれてみれば、その通り。油斷をさせてやるだけやらせ、一度にギュッと喉元を絞めあげればいゝわけだ。……俺にとつてはお前はほんたうに救護の天使だ』

と、言つてローランヌの手に接吻した。

三、パルマ國の貴婦人並に、盡きぬむかし語

パルトロメが汚れものを入れた籠を抱へて洗濯場の横から突角堡のある暗道の入口までやつて來ると、暗道の暗闇から軍曹の服を着た要塞兵が然氣ないやうすでパルトロメのはうへ近づいて來た。近東の產と見えて顏の色は淺黑いが、キリッと引緊まつた立派な容貌で、身體も小柄ながらスラリと均整がとれてゐる。

パルトロメの肩へ手をかけると、

『おや、今歸るのか』

馴々しく言つてから、急に聲をひそめ、近東人特有の深味のある黑い眼でパルトロメの顏をさし覗きながら、

『ご案じ申してをりました。首尾は如何でした』

と、逼迫した口調で問ひかけた。

パルトロメは、素早くあたりを見廻してから囁くやうな小聲で、

『駄目です、失敗しました。……サンマルスが感づいてしまつたらしい。洗濯物は明日取りにこいと

言つて、どうしても渡してくれないの。……尤も、あたしもすこしやり過ぎた。監獄の塀の下で歌などうたつたものだから』

軍曹の服を着た男は顏色を變へて、

『それは不可ません。マゴマゴしてゐると、あなたまで捕へられてしまひますから、すぐお逃げください。チユラン（トリーノ）の町までは僅かな里程ですから旅館にでも隱れてゐてくだされば、私があとのやうすを見屆けて明日の朝までにあなたのところへ參ります。……どんなことにも運數といふものがあつて、機が熟さなければ、どれほど努力しても成し遂げられるものではありません。かうまで刻苦しても成功しないところを見ると、まだその時機が來ないのだと思ひますから』

ボルトロメは、涙で眼を曇らせ、

『八年待つて駄目なものが、一體、いつになつたらさういふ機會が來るといふのだらう』

軍曹は、首を振つて、

『ラ・ヴオアザンは七年前にラ・グレーヴの廣場で火焙りになつてしまひ、ブリガンベールは行方知れず、コフスキーも消息なく、これほどの大仕事をたつた二人でやるといふのであれば、たとへ十年二十年かゝつても、まづ、當然。こゝで失敗したからといつて、まだいくらでも機會があります。サンマルスはまるで典獄に生れついたやうな男だから、そのうちにかならず昇進してどこかほかの要塞

へ轉任するに決つてゐます。よそへ移されれば、またどんないゝ機會があるかも知れませんから、焦らず氣長にやるほかはありません。ともかく、この場は、お逃げになるのが何より急務。あとのところは、私の才覺で何とかうまくやつて置きますから』

中庭のはうに突然人の足音がするので、ハツとして振返つて見ると、要塞長のサンマルスが急ぎ足で、二人のはうへやつて來る。

今更逃げ隱れならず立竦んだまゝでゐると、サンマルスは滑ツ面をつくり笑ひでひきほぐしながら近づいて來て、手に持つてゐた洗濯物を差出しながら、

『ベルトロメ、お前がまだこの邊にゐるだらうと思つて持つて來た。さア、これを持つて行け。……おゝ、マリオ軍曹、今日はお前は非番だつたナ。一週に一度の非番だから構はずユルユルと話するがいゝ、何といつても夫婦だもの、何かと話があらうといふものサ』

いつにもなく愛想のいゝことを言つて、後手を組みながら官邸のはうへ戻つて行く。

マリオは、油斷のない眼付でその後姿を見送りながら、

『あの因業な奴が、今日にかぎつてあんな愛想のいゝ顏を見せるのは奇妙ですな』

ベルトロメは、頷いて、

『あのやうすから推すとたしかに何か變つたことがあつたのにちがひありません。あたしたちに油斷

させようと思つてそれでわざとあんな笑顔をして見せるのでせう』

『そのへんのところと思へば間違ひありますまい。……しかし、油斷させようといふ向ふの肚なら、あなたが今すぐビニュロールから逃げ出すのは却つて不得策かも知れませんからもう一日やうすを見ることにしませう。……お嬢さま、とにかく、それを家へお持歸りになつてよくお調べになつてください。あまり長話をしてゐてこの上怪しまれてはなりませんから、私はもう詰所へ歸ります。では、ご機嫌よう』

バルトロメはマリオと別れて小走りにビニュロールの町へ入つて行くと、知事の官邸の前に往來もならぬほど大勢の人が集まつてゐる。何事かと思つて訊ねてみると、隣國パルマ公國の高貴な婦人が漫遊のついでにこのビニュロールへ立寄り、知事の茶會に臨んで、いまそこから旅館へ歸られるところだといふことだつた。

バルトロメは早く家へ歸つて洗濯物を調べたい一心で貴婦人を見物するどころではなく、人垣を押分けるやうにして一町ばかり行過ぎると、唐突に背後からじぶんの肩に手をかける者があるのでギョッとして振返つて見ると、立つてゐるのは立派な衣服をつけた上品な面持の紳士。バルトロメが振返ると、帽子をとつて慇懃に禮をし、

『私はパルマ公國のカスタルヴァ夫人の執事をつとめてゐる者でございますが、いま知事の玄關で馬

車に乘られるとき、あなたさまをお見かけし、いちどお目にかゝりたいからぜひとも旅館へお伴ひするやうにといふことで、失禮も顧ず、お足を止めました』

カスタルヴァ夫人なぞといふ人に知合はないので、何かの間違ひかと思ひ、それを言ひださうとすると、紳士は顏色を察して、あたりを見廻してから聲を低め、

『……もし不審らしいやうすだつたら、「半獅神の淵」と囁くがよいと申されました』

バルトロメは、ハツと顏色を變へたが、すぐ隙のない顏付になつて、

『……「半獅神の淵」……。何のことか存じませんが、御用があるとおつしやるのでしたらどこへなとお伺ひいたします』

紳士は、無言のまゝ鄭重に頷いて、先に立つていま來たはうへ戻りかける。バルトロメはその後に從いて行くと、大通りを十町ばかり行つた角の「サヴォイ・ホテル」の裏手へ行き、商人專用の戸口から二階の一室に導き入れ、しばらくお待ちくださるやうにと言つて出て行つた。

高貴な客のために特別にしつらへられた部屋とみえ、家具調度なども至つて贅を凝らしてある。

バルトロメは、さまざまな疑問を起しながら、洗濯物の籠を抱へたまゝ落着かぬふうで扉口の近いところに控へてゐると、奥の扉があいて衣擦れの音がした。思ふと、一人の貴婦人が、

『おゝ、テレエズさん』

と叫びながら走り寄つて來た。

顏をあげて見ると、それは、もうこの世にゐないはずのラ・ヴオアザン。

ラ・ヴオアザンは歐洲を震駭させた有名な「毒藥審問事件」を惹起し、硫黃の火刑といふ前代未聞の極刑を申渡され、七年前の春、ラ・グレーヴの刑場で火刑になつたといふ噂はこの邊土まで傳はり、もうこの世では逢へないものと諦めてゐたそのヴオアザンがパルマ公國の貴婦人などと名乘つて、突然、眼の前に現れて來たので、懷かしさよりむしろ飽氣にとられてぼんやりとラ・ヴオアザンの顏を眺めてゐると、ラ・ヴオアザンはテレエズを力まかせに胸のなかへ抱緊め、

『あれ以來どうしてもあなたの消息がわからないものだから、多分、あなたも鐵假面を被されてどこかの牢獄へ押込められてしまつたのだと思ひ、この七年の間、あなたを尋ねて佛蘭西中を漂泊ひ歩いてゐたのです』

テレエズは、思ひもかけぬ再會と、いつにかはらぬヴオアザンの友情にうれしさで胸がいつぱいになり、ヴオアザンの胸にしがみついて泣出すと、ヴオアザンはテレエズの涙を拭いて椅子に落着け、自分も並んで掛けながら、

『私がこんな苦勞をしてゐたのは、强ちあなたのためではないのです。……なんとかして鐵假面を探し出してコンデ大公やチュレンヌ大公のところへ連れて行き、ルーヴオアが兩公を罪に落さうと企んだ事實の實證にしてルーヴオアを失脚させ、夫のアントアンヌの靈を慰めたいと思つて……』

『……すると、アントアンヌさんは?……』

『ラ・グレーヴの刑場から私を救出さうとして大勢の護衞の兵士と渡合ひ、たうとう斬死してしまひました』

テレエズは、眼を潤まして、

『それはほんたうに殘念なことでした。……それで、イスナアール男爵などは?』

『男爵はもとじぶんの手下だつた暗殺團の壯士を二十人ほど率ゐて火刑臺の近くに入込んでゐましたが、後から後から繰出される兵士に十重二十重に圍まれ、前後から蜂の巢のやうに刺されながら、ソアツソン伯爵夫人によろしくと叫びながら笑つて死んで行つたといふことです。……あんな優れた腕を持ちながら、あのひとも不幸な騎士でした』

テレエズは、身を乘出して、

『すると、やはりコフスキーも?』

『いゝえ、コフスキーは助かりました』

テレエズは、飛立つやうな思ひで、

『それで、今どこにをります』

『コフスキーも、やはりあなたを尋ねて佛蘭西中を遍歷してゐるのです。今頃はちやうど西班牙の國境のあたりまで行つてゐる頃です。ピニユロールの要塞監獄に鐵假面がゐることがわかつたから、すぐこちらへ來るやうにと半月ほど前飛脚便をやつてありますから、もう間もなくこちらへやつて來るでせう。……それはさうと、テレエズさん、あなたはどんなふうにしてナアロオの手から逃れましたの』

テレエズは、「キヤッフエ・ド・ベル」料理店の奥まつた部屋でルーヴオアに會ひ、もうすこしで鐵假面の名を言はせようとしてゐるところへ、思ひがけなくナアロオ密偵長が飛込んで來てこちらの素姓を見露されてしまつた前後の經緯を話し、

『……失神してゐるうちに運び出されたのだとみえ、氣がついて見ると、眞暗な部屋の中に、いつかお話した、聖ジヤン寺のあの髑髏男と二人で押込められてゐるのです』

ヴオアザンは、怪訝な顏をして、

『……その髑髏男といふのを、實は私も見たのです。手箱を掘出しに來たところから察すると、ナアロオの手先だつたとしか思はれないのですが、それがどうして留置場などに入れられてゐたのでせう』

『あたしもいろいろかんがへてみましたが、その邊のところはよくわかりかねます。……でも、髑髏男は、俺の忠誠にたいしてよくもこんな酷い目に逢しやがる、などとブツブツ呟いてをりました。……それはいゝのですが、あのゾツとするやうな奴があたしの肩へ手をかけたり、しなだれかゝつたりして散々にあたしを虐めぬくのです。……怖ろしいやら氣味が惡いやら、死ぬやうな思ひで二日ばかり暮してをりますと、その夜更になつて、突然、監房の扉を開けて一人の男が飛込んで來て、あたしを抱きすくめようとしてゐる髑髏男を引離して力任せに壁へ叩きつけ、あたしを横抱きにして監房から逃出しました』

『それは、一體、誰でした』

『思ひもかけない、……あなたもご承知の、マルセルの馬丁のアリ・ベーだつたのです』

さすがのヴオアザンも驚いて、

『それは意外な！　アリは死んだのではなかつたのですか』

『死んだのではなかつたのです。……話を聽いてみますと　マルセルと轡を並べて淵へ馬を乘入れたと思ふと、馬が底石に脚を辷らして横倒しになり、それを引起さうとしてゐるうちに一番後になつてみなが一齊射擊を受けてチリヂリに川の中へ落込んでゐるとき、やつとこちらの岸を離れたばかしのところだつたのです。アリはこれは失敗した、かういふ有樣では、進んで無益に命を捨てるのは愚だ。いづれ誰か生殘るものもあらうから、それと力を合せて再擧を計るに如くはないとかんがへ、ソロソロとあとへ引返してオルネエ河の水車小屋まで落延びました。翌朝農夫に化けてペロンヌへ入込んで

さまざま捜索をしましたが、一向消息がわからないので、この上は巴里でみなに邂逅ふ機會を待つほかはないと一人で巴里まで戻つたのださうです』

『さすが土耳古人だけあつて沈着なものですね。それで、あなたを救つた經緯は』

『……巴里へは戻つたものゝ世すぎの道もないので、馬丁の口入宿へ行つて轉がつてゐると、これも何かのめぐりあはせなのでせう、ありついた口といふのがナアロオの馬丁なのです』

『おや、それは不思議ですこと』

『こゝまでお話しすると、後はお察しになれるでせうが、何しろアリは、ご承知のやうに、馬の世話をしにこの世に生れて來たやうな男ですから、たいへんにナアロオに可愛がられ、ごく祕密の出先にも伴をするやうになつたのださうです。……あたしが「キヤッフェ・ド・ベル」から連れ出されたとき、アリはひと目見てあたしだといふことがわかつたさうですが、油斷をさせるため、ナアロオに手を貸してあたしを留置場へ擔込んだりしたのださうです』

『なるほど、さういふ都合だつたのですか。それで、あなたが助かつた筋道はわかりました。イスナアール男爵とコフスキーはナアロオの留置場へ踏込んだところ、あなたがゐないので力を落して歸つて來ましたが、すると、アリがあなたを助け出した後へ乘込んで行つたといふわけだつたのですね』

『たぶん、そんなことだつたのでせう』

『それにしても、鐵假面がこのピニュロールにゐるといふことがどうしてあなたにわかりました』

『それも、アリ・ベーのお蔭だつたのです。……留置場から救ひ出されマレエの安宿へ落着いてから、今まであつたことをくはしく話をし、せつかく鐵假面が、バスチーユにゐることを突止めたと思つたら、またどこかへ移されてしまつて途方に暮れてゐると言ひますと、アリは横手を拍つて、ついあの前の晩、バスチーユへ行くナアロオの馬車を駆りましたが、そのときベスモオ典獄とナアロオの立話の中に、「ピニュロール」といふ言葉が二度ばかりありましたから、もしや、そこではあるまいかと言ふのです。イスナアール男爵が話した護送の日と照し合せてみますと、ナアロオがバスチーユへ行つたといふ日と鐵假面が護送された日とピッタリ合ひますから、たしかに間違ひないといふので、すぐこのピニュロールへやつて來て、表向は夫婦といふことにし、アリは要塞兵に傭はれて向ふへ入りこみ、あたしは監獄から出る洗濯物を引受け、今日まで機會を狙つてゐたのです。……さア、こんどは、あなたの番。……火刑になつたはずのあなたが、いつたいどうして助かつたのですか』

ラ・ヴオアザンは、頷いて、

『さう、それをお話しませう。……あなたが「キヤツフェ・ド・ベル」へ出かけて行つたきりいつまでたつても歸つて來ない。伴をして行つたコフスキーもこれもまた音沙汰なし。これは不可ない、この上は、すこし亂暴な處置だが、ナアロオを押へて二人の居所を吐かせるほかはないといふので、ア

ントアンヌと男爵がナアロオの邸へ乘込んで行きました。……門の近くまで窺ひ寄つたとき、ちやうど玄關から馬車が走り出して來て、それにナアロオが乘つてゐるやうすだから、これは註文だとばかりに前後から馬車に飛びつき、アントアンヌが馭者臺から馭者を押おとしてゐるうちに男爵のはうは馬車の中へ躍込んで、やい、ナアロオ、長い間、俺を理不盡な目に逢したお禮をするぞ、と言つて、ナアロオを馬車隅へ捩伏せてグルグル卷にし、フトそばを見ると頭からスッポリ布を被せた大きな包があるので布を引裂いで見ると、それは、手錠をかけられたコフスキー。……ちやうどバスチーユへ送りつけられる途中だつたのです』

『おゝ、それはよかつたこと』

『二人は馬車ぐるみナアロオとコフスキーを攫つてパッシイの伯爵夫人の別莊まで運んで來ました。……アントアンヌの迎ひで別莊へ行つて見ますと、佛蘭西第一等の密偵長が手足をがんじがらにされて椅子の上に引据ゑられ、あの不氣味な死人面を引歪めて口惜しさうに齒軋をしてゐます。……そこで、鐵假面の名とテレエズの居所さへ言へばすぐにも放してやる、さもなければこの毒藥で殺してしまふ、と五人掛りで責立てましたが、ナアロオもさるもので、テレエズは俺のほか誰一人知らぬさるところの地下室へ押込めてあるのだから、俺が死んでしまへばあの女は餓死してしまふばかりだ、それでよかつたらお殺しなさいと小憎らしくセヽラ笑ふのです。脅しでは駄目だから、假死の毒藥の

試驗にそれをナアロオに嚥ませ、四十二時間經つてからまた生返らせて、言はなければ本當に殺してしまふと荒膽をひしぎ、否應なしに白狀させてやらうといふことに相談がまとまり、では、望み通り殺してやると毒藥の罎を鼻へ押しつけますと、アッとも言はずに息が絶えてしまひました。……それから五人寄つていろいろ評議をしましたが、さるところの地下室といふのは、どうやらナアロオの邸の留置場のことらしから、乘込んで見ようといふので三人が出かけました。三人が出て行つて一時間ほどたつてから、私が何氣なくフイと庭に向いた窓のはうを見ると、髑髏のやうな不氣味な顏をした男が部屋の中を覗込んでゐて、私が顏をあげるとツイと窓から庭へ飛びおり、黑い頭巾を頭からスッポリ被つて植込傳ひに一散に逃げて行つてしまひました。……黑頭巾をかぶつた髑髏男の話はあなたからも聞いてゐて、どうもナアロオの手先と思ふほかなかつたので、これはたいへんなところを透見された、佛國第一等の密偵長を毒殺したなどといふことを密告されたらそれこそたいへんな騷ぎ。巴里はおろか外國まで廣く手が廻り、われわれにたいする追及も生優しいことではすまなくなる。これはどうでも蘇生させて置くはうがいゝと心を定めてゐるところへ玄關のはうに馬車が停まる音がし伯爵夫人の妹のマリイ・アンヌ夫人の夫、……夫人には義兄にあたる侍從長のド・ブウイヨン侯爵が案内もなく驅込んで來て、「伯爵夫人、ルイ王はナアロオ密偵長毒殺の廉であなたにたいする逮捕の勅令をお出しになりました。さア、こゝからすぐ私の馬車で御子息のユウジエンヌ王子のゐられる

塙太利へお逃げなさい。マゴマゴしてゐると命が危い」と伯爵夫人の手を引きたて馬車に乘せてどこかへ行つてしまひました。……果して塙太利へ行つたのかどうか、その後、サッパリ消息を聞きません』

ラ・ヴオアザンは、ひと息ついてから、

『……さて、一人になつてかんがへるところ、一旦はその氣になつたものゝ、どうしてもあまり早く解毒劑を嚥ませる氣にならない。伯爵夫人はもう安全だし、あの三人もこゝにはゐないのだから、假に捕吏が來てもじぶんの身一つが逃げればすむこと。部屋の入口に錠をおろし、いよいよ押破られさうになつたら、そのとき解毒劑を嚥ませて窓からでも逃出せばいゝ。たとへ三十分でも長く間を置いてから解毒劑を嚥ませようと決心をし、入口の扉に確かり鍵をおろして覺悟をきめて待つてゐますと、夜の白々明けになつて大勢の捕吏がやつて來て扉を壞しかけましたから、これが最後だと思つて、手早くナアロオに解毒劑を嚥ませ、窓から庭へ飛び出したまではよかつたのですが、向ふもさる者で足が庭の土に落着かないうちにウマウマと捕まへてしまひました。誰だと思つたら、わたしの手を摑まへたのは、ルーヴオア自身なのです』

ラ・ヴオアザンは、その夜の口惜しさを思ひ返すやうに強く舌打ちして、

『……ルーヴオアはわたしをヴアンセンヌの監獄へ繫いでおいて、先鋒隊のことや加盟書の在所など手を代へ品を代へ祕密に訊問しましたが、わたしがどうしても白狀しないのと、わたしがルーヴオア

の弱點……、「白寢臺」で伯爵夫人を殺さうとしたことや、兩公にたいする陰謀などの大祕密を知つてゐるので、毒藥販賣の名目にかこつけて、殺してしまはうと考へたらしく、「火刑裁判所」へ引出してル・レニエに火刑の宣告をさせました。運惡く毒藥を買つた人の名を書付けて置いた手控へを發見され、そのためにさまざまな名流の人達が法廷へ呼出されてたいへんな騷ぎになりましたが、毒藥審問は表面のことで事實は、どうしてもわたしを殺さうといふルヴオアの魂膽なのです』

ラ・ヴオアザンは、冷然たる微笑を浮べながら、お話もしませんが、いくら水責めをしても何を『拷問の模樣なぞ大して聞きたくもないでせうから、「白寢臺」のことや鐵假面の祕密しても、わたしの方は、向ふの言はせたいことを言はぬばかりか、拷問はそれつきりを大聲で喚き散らしてやつたもんですから、さすがのル・レニエも呆れたとみえ、牢へ戻しましたが、それから十日經つと、いよいよ火焙りにすると言つて檻馬にしてヴアンセンヌ、牢へ戻しましたが、それから十日經つと、いよいよ火焙りにすると言つて檻馬車に乘せてラ・グレーヴの廣場へ引出しました。……この前のブランヴイリエ侯爵夫人の死刑のときもたいへんな騷ぎでしたが、わたしのときはまたそれ以上。何萬とも知れぬ見物が廣場を埋めつくし、廣場を四角に圍んでゐる家々の窓には人が鈴なりになつてゐるといふえらい景氣で刑場に向いた窓が一つ二千リーヴルの相場だつたさうです。……わたしは、あの三人さへ無事なら、かならず何とか救出す手段を講じてゐるだらうと思つて、わざと檻馬車の格子の間から顏を出し、見物に挨拶しながら

運ばれて行きますと、馬車が火刑臺の下へ着かうといふころ、何とも穢らしい乞食が一人寄つて來て、冥途の道にも拔け穴がある、世の中には思ひ けないこともあるものサ、と意味あり氣なことを呟いてから、向ふの二階の窓を見ろと眼で合圖するので、そのはうを見上げると、刑場の眞正面の「北の場」といふ居酒屋の二階の窓からコフスキーが顏を突出して、安心しろといふ風に瞬きをして見せました。案の定、わたしを救ふ手筈がしてあるものと思ひ、悠々と火刑臺へあがつて、もう一度その窓のはうを見上げますと、今までそこにあつたコフスキーの顏が無くなつて、その代りに田舍の商人のやうに服裝を變へたナアロオが顏を突出し、ザマを見ろ、といふ風に大口を開いて笑つてゐるのです、

テレエズは、

『あゝ、すると 解毒藥が效いてナアロオは生返つたのですね』

と、呼ぶやうに言ふと、ラ・ヴオアザンは、頷いて、

『えゝ、さう。解毒劑が效いたのです』

『それにしても、そのときコフスキーはどうなつてゐたのですの』

『これは、あとで聞いた話ですが、いよいよわたしが火刑されるといふ公示が出たので、イスナアール男爵は、以前、じぶんの部下だつた暗殺團の手の利く騎士を廿人ばかり率ゐ、夫のアントアンヌは「奇蹟の廣場」から浮浪人や乞食に日當を拂つて百人ほど狩出してみなで火刑臺の周りを取卷き、居

酒屋の二階にゐるコフスキーが合圖をしたら一擧に番兵どもを蹴散らしてわたしを攫つて逃げる手筈になつてゐたのださうです。……ところで、コフスキーの方はどうだつたかといふと、廣場に向いたその窓を借切つて何時でも合圖が出來るやうに用意してゐるところへ田舍の商人らしい男が入つて來てじぶんもこゝにをらせてもらひたいと頼込むので無下に斷ることもならず、その商人が用意して來た葡萄酒などを飲んでゐるうちに、どうにもならぬほどに睡くなり、後のことは何ひとつ知らないのださうです』

『その商人といふのが、ナアロオだつたのですね』

『さうです。……こんなこともあらうかと思つて、商人に化けて來て睡眠藥の入つた葡萄酒を飲ませて眠らせてしまつたのです』

『それからどうなりました』

『……そのうちに、いよいよ火焙りの用意が出來、もう火を點けるばかりになつたといふのに一向合圖がないものだから、イスナアール男爵が窓のはうを振仰いで見ると、ナアロオが憎體な顏をして坐つてゐるものだから、すぐ事情を察し、その三階へ駈上るより早くナアロオを窓から街路へ投げ落し、コフスキーに代つて帽子を振つて合圖をすると、暗殺團の壯士といつしよに番卒の群のなかへ斬込んでアントアンヌと二人で二百人にも餘る兵卒を喰止めてゐる隙に、浮浪人どもは臺からわたしを擔ぎ

おろし、待たせてあつた馬車にコフスキーといつしよに乘せ、壯士の一人が手綱をとつて群集を蹴散らしながら聖ドニ門から巴里街道へ出、無事にブリユツセルまで送り屆けてくれました』

『アントアンヌさんとイスナアール男爵は、そこで斬死なさつたのですね』

『暗殺團の壯士はわたしを救ふのに忙しくて二人を助けることが出來ず、みすみす見殺しにしてしまつたのださうです。……そこで、わたしはコフスキーと相談をし、西と東の二手に別れ、地中海の沿岸までひとつづつ根氣よく要塞を搜ることに決め、コフスキーはノルマンデイ州から海岸寄りに西班牙の國境までの西側を引受け、わたしはローレンヌ州から舊サヴオイ公領までの東側を受持ち、二た月に一度互に便りをし居所を知らせ合ふ約束をして白耳義の國境で西と東に別れました。……さういふ風にして、わたしは七年がかりでやうやくパルマ公國まで辿り着きましたが、一つとして手掛がない。……この上は當分ここへ落着いて、コフスキーの便りを待つてまた別な方法をかんがへようと、音樂教師といふ觸込みでささやかな看板をかけましたところ、わたしのところへクラヴサンを習ひに來てゐた貴婦人の手引きで宮廷音樂師に抱へられることになりました。……ご承知でせうが、この邊では佛蘭西風といへば何より有難く、巴里から來たと言ひさへすれば、もうそれだけでわけもなく尊敬されるといふ具合なのです。……ザルツブルグの王樣はたゞ巴里から來たといふだけの理由で、破門されて流されて來た、氏素姓のわからない女を妃にし、その娘をハノーバア家へ嫁入らせた前例の

やうに、大して取柄もないわたしがたいへん國王のお氣に入り、一介の音樂師に後繼が絶えてゐたカスタルヴア伯爵の家を繼がせ、行く行くは結婚したいといふ思召らしいのです。……何しろパルマ公國はこんなふうに伊太利と佛蘭西の間に挾まれてゐる關係から、どちらの國へも拔目なく大勢の間諜を入込ませてゐるのですが、實は、鐵假面がこのビニユロールにゐることが、間諜らの報告から知れあるとき國王が、何氣なくそれを私に話してくだすつたので、今日、このビニユロールへやつて來たのは、じぶんでその實否を訊して見るためだつたのです。……それで、鐵假面はたしかにこゝの要塞監獄にゐるのでせうね？』

テレエズは頷いて、ちやうど今日あつたばかしのことを細かに物語り、どうやらサンマルスに見露されたかも知れないと言ふと、ラ・ヴオアザンも顏を引緊めて、

『それが事實かどうか、洗濯物を調べて見たらわかるでせう。洗濯物といふのはこれですか』

と、言つて、床のうへに置いてあつた籠の中から汚れ物を引出して手に取ると、すぐテレエズのほうへ振返り、

『これは不可ない。やはり見露されました。……ほら、ごらんなさい。この下着がすこし濕つてゐるでせう。たぶん何か字でも書いてあつたのを水で洗ひ出し、大急ぎで火で乾かしてあなたに渡したのです。……しかし、インキで書いたものなら水で洗つたぐらゐではなかなか落ちるものではないから、

念を入れて調べて見ませう』

下着を打返して調べて見ると、左の袖の裏に血で書いた文字らしいものが點々と微かに殘つてゐる。

二人は息を嚥んで蠟燭の明りに近づけて眺めて見ると、「委細……手巾……」と書いたらしい文字の跡が見える。

委細は手巾に書いて置いた、といふ意味らしく取れるので、テレエズは狼狽し籠の中を搜して見たが手巾などは一つもない。

ラ・ヴオアザンは、覺つて、

『このやうすでは、手巾はたしかにサンマルスが取上げたのです。この下着をあなたに渡したのはあなたを油斷させてもつとくはしい通信をさせようといふ肚なのでせう。……事情がこゝまで押詰まつたとしたら、もう悠長なことはしてゐられません。私はカスタルヴア伯爵夫人といふ威光で直々監獄に出かけて行き、巧くサンマルスを煽て上げて監獄の內部を見物し、ことによつたら鐵假面にも逢つてその上で救出す工夫を凝らしませう』

テレエズは氣を呑まれて、

『ご承知のやうに、サンマルスは「半獅神の淵」で生擒りにするはずの先鋒隊をみな射殺してしまつたので、ルーヴオアやナアロオの怒りに觸れ、こんな邊鄙なところへ追落されたのですから何とかして手柄を立てゝもう一度巴里に近い要塞へ戻りたいと思ひ、まるで必死の勢ひですこしの油斷もないのです。……鐵假面が喰べた食器は、もしやその裏に字でも書いてゐないかといちいちじぶんで洗ひ、監房で點す蠟燭は一つづつ引割つて芯まで改めるといふふうですから、あなたが出かけて行つてもとてもそんなことを承知するはずがなからうと思ひます』

ラ・ヴオアザンは、落着き拂つて、

『たとへさうだとしたつて、べつに、屈托することはないでせう。やつていけなければそれまでのこと。わたしが今日知事のところへ出かけて行つたのも、實は、サンマルスに會ふための下拵へ。それに、評判をきくと、サンマルスの妻はド・ブウロオ夫人の妹でたいへんに虛榮の心が强く、宮廷や貴族やといふと神よりも有難いくらゐに敬ひたがる女ださうですから、私がカスダルヴア伯爵夫人の權勢をひけらかし、ルイ王やルーヴオアとは友人だから、いづれバスチーユの典獄にでも昇進するやうに口をきかうといふふうに持ちかけたら、大抵の無理は聽くでせう。私には私の工風がありますから、まア、心配せずに結果を見てゐてごらんなさい』

四、ボヘミヤの大力男並に、アリ・ベーの離業

それから二日ほどの後・ビニユロール要塞監獄の獄室で、四股を踏んだり壁に身體を押しつけたりして盛んにひとりで暴れ廻つてゐる逞しい面魂の囚人があつた。

この監房も谷川には臨んでゐるが、鐵假面の部屋のより遙かに高く、それに窓に目隱塀などついてゐないので、乏しいながら春の陽差が窓から射し込み、谿川のせせらぎも遙か下のはうにきこえる。

そんな風にしてゐるところへ扉を開けて入つて來たのは、氣のよささうな白髮頭の牢番。粗末な食物をのせた盆を粗木の卓の上に置きながら、

『おい、ブリガンベール、お前、また暴れてゐるのか。いゝ加減にしておかぬとサンマルスさまからお叱言を喰はねばならぬゾ』

囚人は、大口を開いてアハヽと笑ひ、

『俺はボヘミヤの百姓でナ、牢から出されたら、すぐにも鋤鍬とつて一家を養はなければならぬのだから、力が拔けぬやうにこうして毎日壁と角力をとつてゐるのだ』

黑麵麭を取つてムシヤムシヤと頰ばりながら、

『それはさうと、牢番。今朝から何かえらい騷ぎをしてゐるが、いつたいこゝで何があるといふのだ』

『實は、隣國パルマ公國のお妃にならうといふカスタルヴア伯爵夫人といふ方がござらつして、名代のこの要塞監獄をぜひ見物したいとおつしやる。粗相があつてはならぬといふので、サンマルスさま

が先に立つて、あちらを磨き立てるやら、こちらを拭くやら今朝からテンヤワンヤの大騷ぎ。見苦しくてはならねえといふので、番兵をはじめ儂らにまで新しいお仕著せを著せ、平に御入來をお待ちしてゐるといふ次第なのだ』

『芝居や遊山といふならわかるが、こんな穢くるしい監獄を見物したいなぞといふのは醉興な女もあればあるものだ』

『それどころか、その貴婦人は、囚人といふのはどんなことをして暮してゐるものかそれもついでに見物したいとおつしやる。これにはさすがのサンマルスさまも大きに弱つたふうで、たとへ大切な賓客人でも、さう容易く見せられぬ囚人もある、といつて御意にそむくわけにも行かぬ。ブリガンベールの馬鹿なら圖體がでかいばかりで至つて氣はいゝのだから、當り障りのないところ、あいつを見せてお茶を濁しておかう、と、かう言つてをられたから、いづれ間もなくその貴婦人がこゝへやつて來るだらう。お前も眼の保養に拜んで置くがいゝ』

ブリガンベールは、出て行く牢番の後姿を見送りながら、また大口を開いて笑ひ出し、

『サンマルスが、俺を馬鹿で氣がいゝと言つたか。ウム、それは面白い。この鐵棒をユルユルと搖り動かし、俺が拔出せるほどの隙間をつくるには後六七年もあれば事が足りる。……そのときになつて俺が何のつもりで大暴れしてゐたか覺つたら、その時はさぞ膽を潰すこつたらう』

ブリガンベールは、藁床の上に大の字になり、マジマジと天井を見上げながら、

『……思へば八年前、ブリユツセルの聖ジヤン寺の林の奥で手箱を埋めるお手傳ひをし、巴里の同志に宛てた手紙をことづかつてお孃さまやアルモアーズさまに別れたが、同じ巴里に歸るにしても、やがて先鋒隊が進發するときの用意に、手頃な間道を搜しておかうと思ひ、あちらの裏道、こちらの峠といふ工合に、ウロウロ脇道を搜してゐると張込んでゐた政府の密偵に怪しまれ、捉へられてカクローエの分塞へ押込められどうやらそこを逃出したが、三月もたつてしまつたのだからまるつきり世間のことはわからない。多分、もう巴里に攻め上られた頃だらうと、巴里へ引返してヴエルサイユの近くを彷徨つて見たら、ルートヴオアの野郎がルイ王と相乘りで澄ました顏で馬車を馭つてゐる。これは何か手違ひがあつたのだらうと、またブリユツセルへ驅戻つて聞合せて見ると、アルモアーズさまをはじめお孃さま、決死先鋒隊の一同は一と月も前に巴里に向けて進發したといふこと。これはしまつた、三十日もたつてまだ巴里に着かぬやうでは、てつきりどこかで待伏せされて屠殺しになつたのにちがひない。とすると、生殘つたのは俺一人。さういふときには手箱の始末を賴むと密々アルモアーズさまから云ひつけられてあつたことを思ひ出し、すぐ聖ジヤン寺へ行つて手箱を掘出し、加盟書とやらは手箱諸共燒き捨てゝしまつた。……この大役だけは仕をはせたが、何といつても一同のことが氣にかゝる。コフスキーの話では、だいたいペロンヌの近くの間道を通るだらうといふことだつたから、遲蒔ながらそこまで出かけて行つて名代の「半獅神の淵」のあたりをうろついてゐると、兵隊を連れて見廻りに來たナアロオの奴に見咎められ、こいつ胡亂な奴だ、貴樣も例の一味だらう、で、ロクロク調べも受けずにペロンヌの監獄に投込まれ、それからサンマルスのお荷物になつてあちらこちらと曳摺りまはされたすゑ、こんなアルプスの山の中で七年の年月を暮してしまつたが、なアに今に見ろ、かならずこの窓を破り、行きがけの駄賃にサンマルスの頭をぶツ壞して今までのお禮をしてくれるから！……ボヘミヤの百姓にどれほど力があるか、そのときこそは思ひ當るだらう。何を、糞め』

あとは鼻唄になつて、空嘯いてゐると、廊下の端の方に大勢の跫音が聞えはじめ、それがだんだんこちらへ近づいて來る。

ブリガンベールは、ノツソリと起きあがり、

『何とかの貴婦人とやらがやつて來たのだな。では、せいぜい氣のいゝところをお目にかけて褒美の林檎にでもありつくことにするか』

神妙な恰構で藁床の端に控へてゐると、立派な服に磨き立てた靴を穿き、鯱張つて入つて來たのはサンマルス。人が違つたやうな猫撫聲で、

『これこれ、ブリガンベールや、パルマ國のカスタルヴア伯爵夫人といふ貴いご身分のお方がお前を

ひと目見たいとおつしやる。粗相のないやうにしなくてはならぬゾ』

ブリガンベールは、殊勝らしく頭をさげ、へいへいと畏つてゐるところへ、美々しいほどに著飾つた美しい婦人が入つて來た。

怖る怖る顏をあげて眺めて見ると、それは忘れもしない同志の一人、ラ・ヴオアザン！

ブリガンベールは、思はず床から飛上り、我を忘れて、

『おツ、あなたはヴオア……』

ラ・ヴオアザンもあまりの奇遇に驚き、張裂けるばかり眼を瞠つてブリガンベールの顏を睹めてゐたが、咄嗟に指を唇にあてゝ、默れ、といふ合圖をした。

ブリガンベールはハツと我に返り、早速の氣轉で、

『おゝ、あなたは、あなたは！……いや、どうも、長生きをすればさまざまふしぎな目に逢ふ。あなたのやうな立派なご婦人がわざわざ私のやうな穢くるしい囚人を見物においでになるとは』

と、やうやくの思ひで言ひ紛らはしたが、サンマルスは、忽ち二人のやうすに感づき、鋭い眼付でジロジロと顏を見較べてから、いきなりブリガンベールのはうへ進み寄つてその肩をひツ摑み、

『お前は、この貴婦人を知つてると見えるナ。ボヘミヤの百姓だといふ貴樣が、こんな方を見知つてゐるといふのはチト奇妙ぢやないか。……いま何か言ひかけて誤魔化したが、いつたい、何を言ふつ

もりだつたのだ。さ、俺の前で言つてみろ』

ラ・ヴオアザンは、ホヽホと輕く笑つて、

『おや、これは面白いこと。この囚人を私が知つてゐるかツて。……あなた方のやうな社會ではさういふ言ひ方は普通なのでせうが、われわれの社會ではあまり重んじられません。こゝにゐるのは、どういふ身分の婦人かお忘れないやうに願ひますよ、サンマルスさん。私が囚人と友達だなどとは、たとへ洒落だとしても聞捨てにはなりません』

サンマルスは、頭を低くしてお辭儀をし、

『職務に熱心なあまりつい地金を出し、失禮なことを口走りましてまことに申譯ありません。……しかし、この囚人が何か言ひかけたとき、あなたは、唇に指をあてゝ、默れ、といふ合圖をなすつたやうに思ひましたが……』

『おや、あなたは後にも眼があるのですね。たしかに、それをごらんになりましたか』

サンマルスは、額に手をやつて、

『いえ、見たのではない、そんな氣がいたしたのですが……』

ラ・ヴオアザンは、冷笑して、

『長らく典獄などを勤めてゐると、狐疑心が強くなつて、この世にあるものはみな怪しく見えるので

せう。あなたのやうな方にお目にかゝつたのは、ほんたうにしあはせでした。宮廷へ歸りましたらこの話を披露してみなの腹を捻らせてやるつもりです。……小話にしたら、差詰め、「王妃と囚人と典獄一とでも題をつけるところでせう。あなたとしてもずゐぶん名が賣れるわけで……』

サンマルスは、閉口して、

『つまらぬ邪推をしましたのは私の失敗。宮廷などで私を笑話になさることだけは、平にご勘辨願ひます。何といつても、典獄などといふものは威嚴を保たなくては示しのつかぬ役柄なのですから……』

ラ・ヴオアザンは、ジロリとサンマルスの顏へ流眄をくれ、

『では、もうお疑ひは晴れましたか』

『いや、どうも、恐入りました』

『あまりあなたをヤキモキさせてはお氣毒ですから、こゝはもうこの位にしてあちらへ參りませうか』

『はい、お伴いたします』

散々の不首尾で、サンマルスは鼠廻ひをしながら先に立つて扉を開け、さア、こちらへとラ・ヴオアザンを案内して出て行つてしまつた。

ブリガンベールは、藁床の上へ腰をおろし、滴りおちる額の冷汗を袖で拭ひ、

『夢なのか現なのか。……あのラ・ヴオアザンがパルマ公國の貴婦人などと名乘つてこんな邊鄙な山奥へやつて來たなどとはどうしても眞實のことのやうな氣がしない。……折も折、ちやうどむかしのことを思ひ出してゐたところだつたもンだから、俺の思ひが凝つて、赤の他人がヴオアザンのやうに見えるのかと思つた』

ホツと大きな吐息をついて、

『それにしても、危いところだつた。あまり思ひがけないことで、我を忘れて叫び出したが、もしヴオアザンの名前を口走つてゐたら、どんな破目になつたか知れたもンぢやなかつた。あゝ、危かつた』

頭のなかの考へをまとめようといふ風に苛々と長い髯を撫でおろしながら、

『ラ・ヴオアザンほどの智慧の廻る女だとしても、あのサンマルスを誤魔化して監獄の中へ入込んで來るのはなかなかの大骨折だつたらう。よくよく金を使つて番兵や牢番などを抱込んだものと見えるが、それにしても、俺のところへなぞやつて來たのはどういふわけだらう。俺がこんなところへ押込まれてゐることは誰一人知らぬはずだし、俺は先鋒隊の中でも大飯を喰ふほか大して能のない男。その俺を救ふためにそれほどに骨を折るとも思はれないが……』

一心になつてかんがへる風だつたが、やうやく何か思ひ當つたやうに膝を拍つて、

『あゝ、さうか、やうやくわかつた。……さつき牢番が、この監獄に大切な囚人がゐるが、それを見

せるわけにはゆかないから身代りにお前を見せてお茶を濁すのだと言つてゐた。誰か知らぬが、ラ・ヴオアザンはたぶんその囚人を見にやつて來たのだ。……さうださうだ、それにちがひない。……ヴオアザンはさつき俺を見て意外だといふやうな顏をしたが、俺を目指して來たのならあんな驚きやうをするはずはない。俺以外の囚人を目當てにして來たところが、こんなとこに偶然俺がゐたもンだからそれで、あんなに驚いたのだ』

ブリガンベールは、腕を組み、

『……すると、俺より大切な人といへば、言ふまでもなくアルモアーズさま、お孃さま。ソアツソン伯爵夫人のこの三人だが、あの高貴な夫人をこんな監獄へ閉込めるほどの權力はルーヴオアだつて持つてゐないはずだし、この監獄に女の囚人がゐるといふことも聞かないからお孃さまでもない。すると……、すると……あゝ、さうだ！』

ブリガンベールは、藁床から跳上つて、おのれの智慧の疎いのを怨むやうに兩手で髪を搔きむしりながら、

『たしかにアルモアーズさま！……あゝ、どうしてこんなことにすぐ氣がつかぬのか。アルモアーズさまなればこそ、ラ・ヴオアザンはどんな骨でも折る。……俺はこの監獄の中にアルモアーズさまといつしよにゐながら、つい今日まで氣がつかなかつたのか。あゝ、知らなんだ、知らなんだ』

無念のやり場がないといふやうに身悶えしてゐたが、そのうちに顏に血を注いでスツクリと起ちあがり、

『知らないうちならともかく、さうと知つた上は、たとへ一分でも安閑としてゐるわけにはゆかぬ。窓を押破つてこゝから拔出し、ラ・ヴオアザンと力を合せてアルモアーズさまをお救ひ申さねば』

いきなり窓の太い鐵棒に飛びついで、エイヤエイヤと捻りはじめた。

ブリガンベールは、そんな風にして、牢番が夕食を運んで來るまで、約そ五時間ほどの間撓みもなく鐵棒を捻つてゐたが、如何に臂力が優れてゐるといつても人間の精力には限りがある。半日の間、全身の力を奮起して働きつゞけたので、身體の筋骨が綿のやうになり、粗末な夕食を終る間もなく藁床の上へ倒れ、大風のやうな鼾をかいて前後不覺に眠込んでしまつた。

それから何時間ほど經つたらうか。頭の上のあたりでゴシゴシいふ異樣な音に夢を破られ、フト眼を覺ましてそのはうを見上げると、鐵格子の外に天からでも垂れたかと思はれる一本の繩に一人の男がブラさがり、大きな鑪でソロソロ獄窓の鐵棒を挽切つてゐる。

高い空からくる淡い星明りに透かして見ると、籠の目のやうになつた鐵格子はもう大分挽切られ、あと一本切離せばたやすく拔出せるまでになつてゐる。

ブリガンベールは、藁床から跳ね起きて窓のそばへ走り寄り、一心に鑪を使つてゐる男に、

『有難い、俺はブリガンベールといふ者だが、この俺を救ひに來てくれたのか』

と、聲を忍ばせて忙しく問ひかけると、その男は手を休めずに、

『ブリガンベール、久振りだつたナ。それにしてもよく生きてゐてくれた。俺はアリ・ベーだ。今すぐこれを挽切つてしまふから、もうすこし待つてゐろ』

ブリガンベールは、懷かしさに涙聲になつて、

『おゝ、アリ・ベー。お前も生きてゐたのか、あゝ、こんな嬉しいことはないナ』

思はず高聲になるのを、アリ・ベーは手で制して、

『俺は七年前からこの要塞の番兵に傭はれてゐたのだが、お前がこんなところにゐようとは今日の今日まで知らなんだ。ラ・ヴオアザンがさうと知らせてくれたとき、俺はいつそ飽氣に取られてしまつたくらゐだつた。……しかし、こんなところで長話をしてゐられぬ。これを挽切つたらお前は窓から出て、この綱に縋つて一人で逃げろ。七尺ほど下ると石塀の上端がある。塀と壁の間は一尺ほどしかないから塀の上端に立つたら改めて綱を塀の外へ垂らし、それに縋つて崖の緣まで降りるのだ。忘れても濠の釣橋を渡つてはならぬのだぞ』

『よしわかつた。崖の緣まで降りたらそれからどうする』

『崖傳ひに谷底まで降り、しばらくそこでやうすを見てゐて、追手がかゝらぬやうだつたら谷川を泳ぎ渡つて向ふ岸へ行け。向ふの崖をのぼるとビニュロールの街道へつゞく間道があるから、そこを眞直ぐ行くと、もう町へ入らうといふところに一軒家があつて、そこにお孃さまが待つてゐるからそこで、お孃さまと落合へ』

『よしわかつた。それで、お前はこれからどうする』

『俺はもう一と仕事あるからこゝへ殘る』

『仕事があるなら、俺も手傳はう』

『いや、それは不可ぬ。この綱は細くて一人の重さを支へるのがやつとだから、お前にゐられてはかへつて手足纏ひ。俺にかまはずお前は逃げてくれ。あとのことは俺が引受けたから、どんなことがもちあがつても決して引返して來てはならぬ。……さア、もう大方挽切れたからこれをへし折つてしまへ』

『わけのないことだ』

鐵棒をメリメリとへし折ると、挽切つた口開きから這ひ出して綱に縋かり、

『では、アリ・ベー、一軒家で待つてゐる』

綱にすがつて七尺ばかり降りると、高い石塀の上端に足がつく。言はれた通りに綱を手繰りあげて塀の外に垂らし、その下を見おろすと、わづかばかりの空地を殘して眼も眩むやうな深い谷間の遙か底の方ポオの急流が仄白く光つてゐる。

ブリガンベールは繩を傳つて崖の端まで降り、降りたといふ合圖に二度ほど輕く綱を引くと、綱はスルスルと手繰りあげられて塀の向ふへ入つてしまつた。

まづ、これでよしと、切立つた崖、岩角傳ひ、幾度も膽を冷やしながら三十分ほどかゝつてやうやう谷底まで降り、岩に腰をかけてしばらくやうすをうかゞつてゐたが、格別、立騷ぐらしい人の聲もないので、矢よりも早い谷川を泳ぎ渡つて向ふ岸へ着く。そこでまた崖へ取付いて虫が這ふやうに崖の上まで攀ぢのぼり、ホツとひと息ついてゐると、突然一發の銃聲が劈くやうに響き渡つたと思ふと、消魂しい怒號や叫びが騷然と湧き起り、監獄のなかは鼎を覆すやうな大騷ぎになつた。

ブリガンベールのゐる崖の端はちやうど監獄の塀のなかを見下すやうな高みになり、谷は深いが幅はごく狹いので、監獄の騷ぎはすぐ下に見下され、人々の叫ぶ聲も手にとるやうに聞き分けられる。

谷を隔てゝすぐ前にそゝり立つてゐる監獄の建物を見上げると、塔の天邊から垂らした繩に縋つて途中まで降りかけつたアリ・ベーがいま、見咎められて慌て塔の上のはうへ逃戻らうとするところらしく、窓のほか何ひとつ凸凹のない眞ッ平な壁の上を蟻が這ひのぼるやうに一心に攀ぢのぼつて行く。

空には月はないが一面の星で、その明りが灰色の壁の面に射しかけ、小指の頭ほどのアリの姿がクツキリと黑く浮びあがつてゐる。

建物の下のはうを見ると、手ん手に鐵砲を持つた三十人ほどの番兵の先頭に立つて、サンマルスが

まるで狂氣したやうに足摺をしながら、

『鐵假面の部屋へ行くのかと思へば、さうでもない。あれあれ、だんだん上へあがつて行く。誰でもいゝから擊つてしまへ。擊落した者には褒美をやるぞ！』

と、聲を嗄らして叫んでゐる。

ブリガンベールは、生きた空もなく手に汗を握つて眺めてゐると、もうあと十尺ばかりで塔の矢狹間まで屆くといふところで、力が盡きたものかバツタリと動かないやうになつてしまつた。

これに勢ひを得たものか番兵は筒先を空に向けて矢繼ぎ早に擊ちかける。どうなることかと思つてゐると、アリ・ベーは綱に縋つたまゝ塔の天邊のあたりで振子のやうに大きく身體を搖りはじめた。下の番兵は筒先を右にやり左にやり、狙ひが定まらぬので擊つことも出來ず、たゞワイワイ叫びながら狼狽へるばかり。

ブリガンベールは、感嘆の聲をあげ、

『アリ・ベーは以前土耳古の戰爭に度々出て戰場を馳驅した勇士だけあつてなかなか大した度胸だ。どんな東洋の輕業師だつてあんな身輕な眞似はできまい。あんなふうにして狙ひを外らしながら充分氣力を養ふつもりだと見える』

と、言つてゐるうちに、雜兵の中から進み出た一人の狙擊兵。腕に覺えのあるものか充分に狙ひを

定め、轟然と一發擊放すと、空の高みでアッと絶叫する聲がきこえ、アリ・ベーは石のやうに眞逆さまに墜ちてしまつて中庭の敷石の上へ身を打ちつけ、それつきり動かなくなつてしまつた。

ブリガンベールは、崖の端まで走り出し、いまにも崖下へ驅下りようといふ身構へをしたが、やうやう思ひ直し、

『いま俺があそこへ驅込んでみたつて犬死をするばかり。みすみす眼の前で同志の一人が殺されるのを見ながら手出しも出來ぬといふのは臓腑が煮返るやうな思ひがするが、いま逸つたとてどうなるものでもない。あの死骸を見て、俺を破獄させたのはアリ・ベーだといふことがわかれば、すぐお嬢さまのはうへ追手がかゝる。ともかく、お嬢さまを連れて一旦逃延びておいて、あとからゆつくりアリの復讐をしてやる』

ひとりうなづきながら拳で涙を拭ひ、間道を拔けてビニュロール街道へ出、驅行くほどもなく道の向ふにポッツリと燈火が見える一軒家。

案内を乞ふ間ももどかしく家のなかに飛込んで見ると、この八年の間絶えて忘れる暇もなかつたテレエズが粗末な服裝でションボリと蠟燭の灯のそばに坐つてゐる。

ブリガンベールは、さまざまな思ひが一時にドッと胸の中に迫り、何といふ言葉も出ず、いきなりテレエズの足元に跪いて大聲で泣出した。テレエズも、ワッと泣聲をあげ、

『おゝ、ブリガンベール。よくまア無事でゐておくれだつた。さア、どうか、お前の顏を見せておくれ』

ブリガンベールは、しやくりあげ、

『あゝ、お懷かしうございます。あなたもよくまアご無事で。そのお姿をお見受けすれば、どんなに艱難辛苦をなすつたことやら。なんともお傷はしうございます』

テレエズは、手早く涙を拭いて、

『そんなことより、マルセルとアリはどうしました』

ブリガンベールは、口ごもつて、

『たゞもう逃げろ逃げろと急立てられ、アルモアーズ樣の事は存じませんがアリ・ベーの方は……』

また大粒の涙を流しながら、いま見て來たやうすを物語り、

『如何にも無念でなりませんでしたが、アリの仕業だとわかれば、すぐにこゝへ追手がかゝるわけ。さう思つて、飛ぶやうに驅けつけて參りました』

さう言つてゐるうちに、街道の向ふに夥しい蹄の音がし、それが一團になつて疾風のやうにこちらへ近づいて來る。

早驅けする乘馬の一隊はアッといふ間に家の門のあたりまで驅寄り、口々に何か喚めき立てながら玄關へ雪崩れ込んで來た。

ブリガンベールは、テレエズの手をとり、

『さア、參りました。では、裏口から』

『裏口に馬が三頭用意してあるから、ともかく、そこまで』

『心得ました』

ブリガンベールは、手早くテレエズを横抱にし　扉を足で蹴開け、脊戸に繋いであつた馬にテレエズを押乘せると、自分もすぐそのあとに續き、地境の柵を一と飛びに飛越え、チュランの町のはうへ矢のやうに驅出した。

番兵どもは、ソレ、あそこへ行くと、一齊に馬に乘り、半丁ほど置いて犇めきながら追ひかけて來る。追手の士官は、逃すな、擊殺せ、と下知をすると、忽ち擊出す雨霰。凄まじい銃聲とともに彈丸は耳を掠めて飛去る。

ブリガンベール、ははがみをして、

『いよいよいけなければ、俺が彈丸除けになるまで。身幅の廣いのがかういふときには役に立つ』

馬の脚が地につかぬばかり驅けさせ驅けさせ、およそ一時間ほど走りつゞけると、追手は追々に引離され、やがて蹄の音は聞えないやうになつてしまつた。

ブリガンベールは、息をついて、フト道端を見ると、この邊の樵夫が雨宿をする番小屋のやうなものがあるので、こゝでしばらく小休みしようと、テレエズを馬から抱きおろし、番小屋の中へ入らうとすると、その途端、内部から出て來た一人の男。ギョッとしたやうに一足うしろへ退いて、手に持つてゐた角燈の光で二人の顏を照しつけたと思ふと、

『おッ、これは、お孃さまに、ブリガンベール！』

と叫び立てた。

二人は、アッと聲を嚥み、もうこゝまで追手が廻つたのかと、身體を固くして身構へすると、その男は、慌てたやうな聲で、

『お驚きになるには及びません。私はコフスキーでございます。急いでピニュロールへ來いといふヴオアザンさまからの飛脚便で、夜を日についでプロヴアンスから駈けつけて來たところでございます』

テレエズは、夢かと驚き、

『お前はコフスキー、よくまアこゝへ』

と、その手を取ると、コフスキーは、涙を流し、

『あなたもご無事で、こんな嬉しいことはございません。あなたの消息を尋ねて佛蘭西中を漂泊つてをりましたが、その苦勞も、これで報いられたといふもの』

と、言つて、ブリガンベールのはうへ振返り、しつかりとその肩を抱へて、

『お前が生きてゐやうとは夢にも知らなかつた』

ブリガンベールも、あまりの意外と嬉しさにたゞもう髭面を涙浸しにするばかり。

しかし、かうしてゐるうちにも追手が迫つて來るかも知れない。ともかくラ・ヴオアザンが宿をとつてゐるチュランの町まで行き、そこでヴオアザンと落合つてこれからの相談をしようとテレエズだけを馬に乘せ、コフスキーとブリガンベールは左右から馬の轡をとつて、今までのことを細々と語合ひながらチュランのはうへ歩き出した。

翌朝、夜の明けぬうちにチュランに着いて宿をとり、使者に手紙を持たせてやると、ヴオアザンは目立たぬ服裝ですぐ三人のゐる宿へやつて來た。

この長年の辛苦に何のひとつ報いもなく、またしても失敗に終つてしまつたので、さすがのテレエズもコフスキーも落膽し悄れ返つてゐると、ラ・ヴオアザンはいつにかはらぬ强氣な口調で、

『おやおや、だいぶ悄れてゐるやうですね。なるほど、今度も失敗しましたが、このくらゐのことで力を落すには當らないでせう。鐵假面を救出す機會はまだいくらでもあります。……私は先日からいろいろかんがへてゐるのですが、ルイ王とルーヴオアの暴政はますます募つて、これにたいする反感と呪詛の聲は歐洲中に充ちてゐるのだから、これにたいする反擊が起らずにはすみません。私がパルマ公國のフイリップ王と結婚して氣長に說き立てれば、かならず佛蘭西打倒の一翼に加はるでせうし、

われわれ先鋒隊を後援したライゾラア伯爵もいま墺太利にをり、ソアツソン伯爵夫人の末子のユウジエーヌ王子も墺太利の兵學校に入つて一心に兵學の勉强をしてゐることですから、第一に反擊の姿勢をとるのは墺太利だと思ひます。これにもしパルマ公國が加はれば、從つて、伊太利の小王國もみなそれにつき、この和蘭、南の西班牙もこれに參加して四方から兵を起すことになりませう。その時こそは、われわれがルーヴオアを倒し、鐵假面を牢獄から救出す日なのです。……歐洲の情勢はこのやうに緊迫してゐるのですから、われわれが目的を遂げるのもさう遠い日ではありますまい。氣を落さずに奮發しなくてはなりません』

と言つて、一寸、言葉を切り、

『先程の手紙でだいたいやうすがわかりましたから、道々、これからの方針の腹案を立てゝ來ました。何といつても鐵假面の所在を見失はないのが大切だから、すぐそばに引添つて、行く先々、どこまでも從いて行く人間がいります。ブリガンベールはもう駄目だが、コフスキーはまだサンマルスに顏を見知られてゐないから、ピニュロールへ行つて土地の人足になり、市中の雇仕事をして暮しを立てながら氣長に監獄に住込む機會を待つことにしたらいゝでせう。それから、テレエズさんのはうは、ブリガンベールとこのチュランで家を借り、目立たぬやうに暮しながらコフスキーからの通知を待つてゐてください。……私は、この上、チュランの宿屋などにゐて疑はれてはなりませんから、今日の午

後にでもパルマに歸り、三人の運動資金や生活の料を調達する工夫をしませう。いよいよ鐵假面を救出すときが來たら、また四人が落合つて力を合せることにし、今は、ともかく、それぞれ三方に別れることにしませう』

それにしても、この四人は、どういふ不幸な宿緣に結ばれたのか、血を分けた兄弟より親しく離れ難ない思ひがするのに、八年九年を經てやうやく邂逅つたと思ふと、たつた一日の愉しさも味はぬうちに、また、ちりぢりにならなければならない。いま別れると、今度逢ふのはまたいつの日であらう。ひよつとすると、これがこの世の別れになるかも知れぬと思ひ、テレエズは胸に悲しみの潮が滿ちてきて、顏に手をあてゝ泣出すと、コフスキーもブリガンベールも同じ思ひに、泣き沈むのであつた。

翌日、テレエズとコフスキーはチュランの町外れにさゝやかな家を借りてそこへ移り、コフスキーは、ピニュロールの町へ行つて人足になり、要塞に傭はれる機會を狙つてゐたが、あの事件以來、いよいよ警戒嚴重になつて、要塞に手蔓を求めることなぞは思ひもよらず、爲すことなく日を送つてゐたが、その年の暮になつて、サンマルスはポルト・デエグジールの要塞に移されることになつたのでコフスキーも後を追つてエグジールへ行き、そこに住みついて機會を待つてゐたが、こゝでも空しく

四年の歲月を過してしまつた。

その年の秋になつて、エグジールの要塞で普請が始まり、やうやうのことで土工に傭はることが出來たので、何とかしてサンマルスの目にとまらうと、骨身を惜しまずに働いたお蔭で番卒に取立てられ、追々、奮發するうちにサンマルスの信用を博し、並の兵士よりは多少とも重い仕事を命じられるところまで漕ぎつけた。

これは一六八五年のことで、それから二年經つと、サンマルスはまた昇進してプロヴアンスのカンヌの沖にある聖マルグリート島の要塞に轉任することになつた。

ポルト・テグジールから聖マルグリート島へ移るときも、サンマルスは副長にさへ行先を明さず、一日に十七粁づつ歩けばいゝのだと言つて、やうやく聖マルグリート島へ着いてから、こゝが轉任地だと披露するといふ要心振り。鐵假面は鐵の網をかけた輿に乘せ、宿に着くとじぶんの寢室へその輿を擔込ませ、食事もサンマルスがじぶんで與るので、道中の間、コフスキーは鐵假面の着物の端さへ偷見ることが出來ない始末だつた。

聖マルグリート島といふのは、地中海に浮ぶレランス群島の一つで、岩山だらけの全島を堡壁でかこみ、島全體が角面堡になつてゐるやうな嚴重な要塞で、コフスキーは、この島へ來てから伍長心得に取立てられ、執事のやうな役までさせられるやうになつたが、サンマルスは、そのコフスキーにさへ

一向に心を許さず、五年を島で過したが、鐵假面が島のどこに押込められてゐるものやらその推量さへつかぬ有様。チュランに住んでゐるテレエズのところへよこす手紙には、いつも、まだ何の手掛りもないが、いづれ、そのうちに、といふ當のない便りばかりだつた。

五、軍務宰相の急死並に、「香橙苑」の路易王

ヴェルサイユ宮は巴里の南西十六粁のところにあり、ルイ十四世が政廳として建築されたもので、それに費された費用は六千五百萬リーブル。一六六四年に着手して一七一四年にほゞ完成するまでに五十年の歳月を費してゐる。

宮殿の兩翼は南北に延びて五百五十間に及び、建物の中央部は背後に突出して「宮廷の中庭」と名づけられる中庭を圍んでゐる。宮廷の背後は日々三萬六千人の人夫と六千頭の馬を用ひたといふル・ノートルの設計にかゝはるバロック風の廣大もない庭園で、さまざまな形の花壇や池や噴水や露壇が造庭術の粋をつくして配置され、林の中に通じられた數多い小徑のところどころには圓柱や美しい彫像が置かれてある。

庭園の奥は廣袤千町歩にも及ぶ大獵苑で原野もあれば谷もあり、晝もなほ暗い深い森林が道の行手

を遮つてゐるといふぐあひで、バロック式の美々しい庭園と對照の妙をなしてゐる。

一六九一年、……チュランの宿で、四人が三方へ別れ別れになつたあの年から丁度十一年後の七月一日の夕方、巴里街道に沿つたマロニエの林の入口に、卅五六の、上品な面持をした婦人が仔細ありげなやうすで佇んでゐた。

烈しい日中の暑氣も、夕方近くになつて追々に衰へ、木の間を透して涼しい夕風がソヨソヨと吹きつけてくる。

この街道は巴里とヴェルサイユを繋ぐ本街道で、丁度退廳の時間とみえ、巴里へ歸る役人を乘せた官廳用の嚴めしい馬車が埃をあげてはいくつも通り過ぎる。

淑やかな中年の婦人は、馬車が通るたびに伸びあがるやうにして馬車の主を見る。馬車は次々に通つて行くが、待受けるひとはなかなか來ないとみえ、傍目にもハツキリ見てとられるほど苛立つてゐる。

そんなふうにしてゐるところへ、小暗い林の奥から、婦人の下僕とも見える五十ばかりの老人が出て來て、氣遣しさに堪へられぬといつたやうすで、婦人の背後から、

『お嬢さま、今まで待つてもやつて來ぬところを見ると、この計畫は思ひ止れといふ神のお思召なのかも知れません。もうまるつきり見込みがなくなつたといふのではなし、今もつてコフスキーは怠ら

ず努めてゐるのですから、もうすこし待つてゐればかならず機會がやつて來ます。どうかんがへても、ルーヴオアと直接談判をするなどといふのはチト無謀のやうに思はれますが』

テレエズは、キツパリした口調で、

『あたしはバスチーユから國家の祕密の犯人を破獄させた人間。その素姓が知れたら、かならず捕縛されてしまふくらゐのことはあたしもよく知つてゐます。佛蘭西中に手配が廻つてゐる重罪犯人のあたしが、探索嚴重なこの巴里へわざわざ乘込んで來たからには、それだけの覺悟があるのです』

テレエズは、巴里へ死に來た。

コフスキーほどの忠實な男が、十一年も骨身を碎いてもどうする當もないといふことでは、この先、幾年待つてゐても何時救出せるといふ見込みも立たない。この上は、命を的にして、直接ルーヴオアに會見を申込み、一と目、鐵假面の顏を見る許可を强請するほかはないと決心をし、ラ・ヴオアザンにも細々とじぶんの決心を書送り、ブリガンベールを連れて六月初めにチユランを出發し、七月の始めに巴里へ潛入すると、今日で七日の間、毎日こゝでルーヴオアを待つてゐた。

テレエズは、言葉をついで、

『ブリガンベールや、お前は無謀といふが、どのみち命を惜しんでゐては出來ない仕事。いけなければ死ぬだけのことだから、止めだてしないでおくれ。……お前がこゝにゐると人目に立つから、さつきのやうに林の奥で待つてゐてください』

いつになく强い言葉で言渡され、ブリガンベールは返す言葉もなく、また林の奥のはうへ戻つて行つた。

もう六時にも間近いかと思ふ頃、王宮の正門から一臺の小馬車が出て來た。「軍隊の廣場」を横切り、王宮の前の坂をおりて巴里街道へさしかゝる。じぶんで手綱を取りながら馬車を馭る人は、紛れもないルーヴオア侯。

「キヤツフエ・ド・ベル」で會つたときからもう二十年近く經つてゐるので、あの頃、漆黑だつた髪はおほかた白くなり、顏の皺も彫が深くなつて以前のやうな猛々しさはなくてどことなく衰への翳が見える。

朝からの激しい政務に疲れ果てたといふやうに、背を丸め頭を垂れ、馬車を馬まかせにしてソロソロと林の前を通り過ぎようとする。

この七日の間、待ちつゞけたその人、ことによれば、じぶんを捕縛させて牢に投込む人、さもなければ、切な願ひを容れて、この二十年の間、思ひ詰め望みつゞけてきた希望を容れてくれる人、いつかはじぶんに愛の言葉をかけたこともあるこの大宰相の顏を、テレエズは轟くやうな胸を抑へて眺めてゐたが、ツト、樹の下から走り出すとしつかりと馬の轡を押へた。

ルーヴオアは垂れてゐた頭をあげ、眼を開いてジツとテレエズの顏を瞶めてゐたが格別、驚くふうもなく、極く穩かな聲で、

『おゝ、美しいご婦人、何をなさる』

と、言ふと、すぐ何か思ひ當つたふうに頷いて、衣囊から財布を引出すと、懶さうにいくらかの金を掴み出した。

むかしならば大喝一聲して押退けて行くところだが、長年の宮廷勤めであの圭角も擦り取られてしまつたか。以前は人を人とも思はぬ傲岸な人物だつただけに、何か一沫の侘しさがあるのである。

ルーヴオアは、テレエズのはうへ金を差出し、

『さア、これをお持ちなさい。政府の仕事は多端だから、充分注意しても兵士の恩給の渡洩れといふことがあります』

テレエズは、首を振つて、

『何とおつしやる。私は金なぞ頂くために馬車をお停めしたのではありません』

ルーヴオアは、煩さうに首を振つて、

『この林のそばを通るとき、戰死した兵士の妻が馬車を停めて恩給の支拂ひを催促することが度々あります。あなたもその件だと思つたのが……』

テレエズは、轡から手を放して馬車の横手まで近づき、靜かに顏を振上げながら、

『ルーヴオア侯、あなたはあたしをお見忘れですか。あんなにも愛してくださつたこのラ・ヘイエ夫人を……』

ラ・ヘイエ夫人といふ聲が耳に入ると、ルーヴオアは、丁度、雷にでもうたれたやうに激しく身體を顫はせ、垂れさがつてゐた眼瞼をグイと押上げ、穴のあかんばかりテレエズの顏を瞶めてゐたが、皺の波の寄つた頰にサツと血の色を刷いて、

『おう、あなたはラ・ヘイエ夫人。どうして忘れてなるものか。俺の生涯に、たつた一度の戀であつたものを……』

震へる聲で低く呟くと、馬車からヒラリと飛びおりてしつかりとテレエズの手を握り、

『そして、あなたは何の用があつて？　また、私を苦しめに來たのか』

と言ふと、落窪んだ眼をうつすらと涙で曇らせた。

フランソア・ル・テリエ・ド・ルーヴオア侯が生涯獨身で終つたことは史實にも明かである。晩年、自分の後繼者である甥のバルブジユウに、俺が戀の情意を動かしたことは生涯にたゞ一度だけだつたが、生涯、その不幸な戀の痛手から恢復することは出來なかつたと語つたといふことである。

二十年後もまだ消去らぬ　ーヴオアの愛情の熱にうたれて、さすがにテレエズもたじろぎながら、

『あたしは少々お願ひの筋があつて、今日で七日の間、この林の入口であなたをお待ちしてをりました』

『願ひと言はれるか。私に會ひに來てくださつたのではなかつたのか』

テレエズは、冷靜な口調で、

『あなたの思召は、忝く思ひますが、佛蘭西中に人相書が廻つてゐる重罪犯人のあたしにたいして、あなたのそのお取なしは、すこしご親切にすぎるやうに思ひます』

ルーヴオアは、テレエズの言葉に急に冷理に立返つたのか、今まで握つてゐたテレエズの手を放すと、むかし、いつも見たやうなあの嚴めしい顏になり、

『うむ、なるほど。如何にも仰しやる通りだ。それで、その重罪犯人のあなたがお願ひといふのは？……密偵の追及がはげしくて逃げをはすことが出來ない、自訴するつもりだから、特別穩便の沙汰を願ふとでも言はれるのか』

テレエズは、首を振つて、

『あたし一身のことなどで、何であなたにお願ひに來るものでせう。……あたしに聖マルグリート島のあの囚人の顏を一と目見せていたゞきたいと思つて……』

ルーヴオアは、我を忘れて、アツと叫び聲をあげ、

『おう、あなたは、どうして？……國家の大祕密を、どうして、あなたは知つてをられる』

『それを知らない道理がありませうか。この十餘年の艱難辛苦はあの囚人の居所を搜るためだけに費して來たのですもの。……バスチーユからビニユロールへ移され、ピニユロールからポルト・デグジールへ、それから地中海の聖マルグリート島へ。……サンマルスが轉任する毎にその先々へ移されてゐたこともみな知つてゐます。……これほどのあたしの苦辛を憫れと思召したら、あなたの胸の中に溫かい人間の血が一滴でもおありになつたら、どうぞ、あたしの願ひをお聽屆けください。……あたしは、たゞひと目その顏を見さへすれば滿足すると申上げてゐるのです。たとへ祕密の囚人であらうとも、一と目、顏を見せるくらゐのことがどうして國家の害になるものでせう』

ルーヴオアは、冷酷無情な口調で、

『ラ・ヘイエ夫人、……いや、テレエズ・ヴアンダム嬢。あなたはたいへんな考へ違ひをしてゐられる。その顏を何人の眼からも隱すために鐵假面を被せてある。して見れば、あなたにその者の顏を見せることはあるまいではないか。その願ひだけは、いくら賴まれても、承知するわけにはゆかぬ』

テレエズは、必死の勢ひで、

『たゞとは申しません、交換の條件があります』

ルーヴオアは、頭を振つて、

『たとへ、どんやうな條件があらうと、それだけは絶對に聽容れるわけにはゆかぬ。……三日の猶豫をあげますから、佛蘭西から出て行きなさい。さもないと、猶豫なくあなたを捕縛します。三日の猶豫を與へるのは、あなたにたいする私の心づくしです』

と言捨てゝ馬車に乘らうとするのを、テレエズは前に廻つて立塞がり、

『まア、どうかこのひと言だけ。……あなたは謀反黨の加盟書の入つた手箱がお入用はありませんか。……黑頭巾をかぶつた骸骨のやうな男が聖ジャンの林に掘りに行つたが、手箱はもうそこになかつたことはあなたもご存じでせう。それもその筈、このあたしがその男より先に掘出してしまつたのです もの。手箱の中には、謀反黨の資金を出した人々の名前、運動の方法、同志の間に取交はされた手紙までみな入つてをります。あなたがあたしに一と目鐵假面の顏を見せてくださるなら、それをそのままそつくりお渡ししようといふのです』

コンデ、チュレンヌ、――その名を認された王位顚覆の加盟書を手に入れ、兩公を朝廷から追退けたいためばかりに、この長年心を碎いてきたことだから、それと聞くと、ルーヴオア侯は、キツと顏を引緊め、

『なるほど。それで、その手箱はあなたが持つてゐられるのか』

その手箱は、危しと見てブリガンベールが燒棄てゝしまつたのだから手許にあらうはずはないのだが、テレエズは、かねて覺悟して來たことだから、顏色も動かさず、

『たしかに、あたしの手許にあります』

『それは、どこにある』

『それを申したら、あたしの賣物はなくなつてしまひます。そんな物騷なものを手許に置くはずもなく、實は、さるところに匿してあります。あなたがあたしの願ひを聽屆けると約束をしてくだすつたら、箱の在所だけ申上げ、約束を果してくだすつたら、その曉に、相違なく手箱をお渡しいたします』

ルーヴオアは、冷笑を泛べ、

『よくかんがへたやうでも、やはり女の智慧。……ヴアンダム嬢、私はいますぐこゝであなたを逮捕し「附屬監獄」へ連れて行つて拷問をかけ、否應なしに手箱の隱し場所を白狀させることも出來るのですぞ』

テレエズは、微笑し、

『あたしにしたつて、そのへんに拔かりがありますものか。……もし、あたしがこゝであなたに逮捕されるやうなことがあつたら、くはしい手紙と手箱を持つて、すぐコンデ公かチュレンヌ元帥のところへ驅付けるやうに、ある男に云ひつけてあります。……その手紙といふのは、あなたがいつか「キヤツフエ・ド・ベル」であたしにお明かしになつたあ たの大祕密、……つまり、あなたが兩大公を

失脚させるためにさまざま策謀なさつた事實と、その事實を陰祕するために、ある男に鐵假面をかぶせ、聖マルグリー島の砲臺監獄へ幽閉してあることまで殘らず書いてあるのです』

テレエズは、林の奥のはうを指して、

『ルーヴオア侯、あなたにはお見えになりませんか。その男は、あれ、あの林の奥にをります。あなたがあたしの肩に手でも掛けたら、すぐこの場から馬でコンデ公のところへ驅付けるのです』

假に、それが事實であつて、そのやうな手紙が兩太公の手に渡つたら、忽ち自分の身の破滅になる。ルーヴオアは身を竦ませ、言葉もなくテレエズの顏を眺めてゐると、テレエズは、際さず、

『さア、どうぞ、お返事を承りませう。あたしは、たゞ一と目、鐵假面の顏を見られたら、かならず手箱をお渡しすると申してをるのです』

ルーヴオアは、突立つたまゝ凝然と考へに耽つてゐたが、やがて重々しく頷き、

『よろしい。……あなたの願ひを聽けるかどうか分らないが、ともかく、とつくりと相談しよう。私はもう一度王宮へ引き返すから、あなたは、王宮の後の「香橙苑」までおいでなさい。目立たないやうにソツと取次を出しておくから、その者といつしよに左翼の一番端の入口から入つて、「石の廣間」まで來てください』

と言捨てると、馬車に飛乘つていま來たはうへ引返して行く。

テレエズは、林の奥へ手招ぎしてブリガンペールを呼び、

『さア、いま聞いたやうな始末だから、ルーヴオアも無闇にあたしを逮捕するやうなことはしないでせう。心配せずに宿へ歸つて待つてゐておくれ』

ルーヴオアの馬車の後から坂道をのぼり、王宮の左手の鐵の柵門から裏手の「香橙苑」へ入つて行つた。

ヴエルサイユの政廳はマルレエにある離宮とちがつて、さまざまな役人を住まはせてゐる一種の官邸なので、用達の商人や市民の出入りが激しく、門の締も嚴重でなく、蜜柑の樹がたくさん植はつてゐる「香橙苑」と稱ばれるこの庭まで誰でも自由に入りこむことが出來る。殊に、ルイ王がこの政廳にゐるときは毎日この邊を散歩するのが例で、ルイ王の姿を見ようとする市民がいつも大勢ここに待受けてゐるため、テレエズは、格別、怪しまれるやうなこともなく庭の奥まで入つて來て、蜜柑の樹の下に佇んでゐたが、三十分ほど經つても誰も迎ひに來るやうすがない。

待兼ねてソロソロと玄關のはうへ近づき、ソツと内部を覗いて見ると、何か變事があつたらしく、召使とも見える者があわたゞしくあちらこちらと往きちがひ、「石の廣間」のあるはうから喧をふり絞るやうな呻き聲まで聞えてくるので、我を忘れて玄關から廣間のはうへ入つて行つたが、大勢の人間はみな何か口々に叫びながら眼の色を變へて走り廻り、一人としてテレエズに眼をくれる者も

ない。

いつたい、何事があつたのだらうとぼんやり廣間の端に佇んでゐると、長い廊下の向ふから立派な服裝をした二人の役人體の男に兩脇から抱へられ、擔上げられるやうにしてこちらへやつて來るのはルーヴオア侯。

急病の發作でも起したのか、顏は紫色に見えるほどに充血し、虫の鳴くやうな聲で、

『早く、侍醫を。……息が、詰まる、……早く、早く、血を取つてくれ……』

と呻めいてゐる。

どのやうに憎んでも憎みたらないルーヴオアだが、この哀れな有樣を見ると、さすがにテレエズも氣の毒になり、手を藉さうとでもするやうにそのはうへ近づいて行くと、ルーヴオアは光のない眼でテレエズの顏を瞶め、何かものを言ひたさうにしきりに唇を動かすふうだつたが、そのときが最後だつたと見えビクビクと手足を顫はせたと思ふと、兩脇から抱かれたまゝガツクリと上半身をのめらしてしまつた。

二人の役人は、アツと顏色を變へ、何やらわけのわからぬことを一齊に絶叫すると、その聲を聞きつけて廊下の上下、並連なる部屋部屋から大勢の役人や召使が走り出し、走り寄つて來て、上を下への大騷動になつた。

醫者を、醫者を、と連呼する者があると思ふと、もう駄目だ、と言ふ者もあり、擔上げて部屋へ移さうとする者もあるかと思ふと、金切聲をあげてそれを制止する者もある。おのおの自分が何を叫んでゐるのか、何をしようといふのかわからぬまゝに、たゞもうゴツタ返すばかり。

テレエズは、まるで夢でも見てゐるやうな氣持で廣間から拔出し、顫へる足を踏しめながら「香橙苑」まで戻つて來たが、手足の力が萎へ、息苦しくてもう一足も歩くことが出來なくなつたので、以前の庭木に凭れて眼を閉ぢてゐると、騷ぎはいよいよ大きくなつて駈けちがふ人はこの庭先までに及び、口々にさまざまな噂をしながら柵門のはうへ走つて行く。

その切々の噂を綴合はせると、ついさつき、パルマ公國から外交上の公文書が屆き、ルーヴオアがその封を切つて讀みかけると、忽ち顏色が變つて倒れてしまつた、といふこと。先日、密偵長のナアロオが伊太利領のある國から來た至急の手配書の封を切つて讀み出すと同時に絶命してしまつたが後で見たら、それは、ただの白紙で、その上に粉末でも包んだやうな痕跡があつたといふこと。

善惡ない召使どもの噂話だからどこまで信用していゝかわからないが、しかし、かんがへて見ると、いつかヴオアザンがいよいよ手段がつきたら手紙に毒藥の粉末を入れてルーヴオアやナアロオを一擧に斃すことも出來ると言つたことをフト思ひ出した。ナアロオまでが同じやうな死方をしたといふなら、多分、ヴオアザンの仕業なのかも知れない。じぶんが巴里へ行つてルーヴオアに會ふといふ手紙

を見、じぶんを危險から救ふためにそんな思切つた手段を採つたのではあるまいか。

ル・ヴオアザンの心づくしはなるほど有難くはあるが、これでは鐵假面の顏を見るといふ望みが全く絶えてしまつたわけ。せつかくこゝまで運びながら、思ひもかけない障礙のためにまた蹉跌してしまつた。この上は、どういふ方法を採らうかと、あれこれと思ひ煩つてゐるとき、苑のなかに通じた小徑の向ふに人の跫音がするので、フト顏をあげて見ると、それは黃金の杖をついた六十ばかりの一人の老人。穩かななかに無限の威容を湛へたその人こそは、ルイ十四世王であつた。

テレエズは、ハツとして慌てゝ木蔭に身を退けようとする間もなく、ルイ王は、眼慧くテレエズの姿を見つけ、

『おゝ、これは美しい女、ご機嫌やう』

と、帽子を脫いで挨拶した。

ルイ十四世は、歷史にも名高い多情多恨の王で、最初はマザラン大宰相の姪のドランプ・マンチーニ孃、その次はド・モンテスパン侯爵夫人に移り、その次は宮女のルイーズ・ド・ラ・ヴアリエール孃、その次にド・モンテスパン侯爵夫人に移り五十を越えたその頃、有名な醜男のスカロンといふ貧乏詩人の寡婦のマンテノン夫人と祕密の結婚をするといふふうで、どんな女性の前でも帽子を脫がずに通つたことがなく、王宮の廊下でも、召使の卑い宮女にまで叮嚀に挨拶したと、ルイ十四世の言行錄を書いた、フランソア・ショアジイ大僧正

もその「書簡及び覺書」（レ・レツトル・エ・セ・メモアール）にハツキリと認してゐるのだから、こゝでテレエズに挨拶するぐらゐのことは、格別、不思議はないわけだつた。

テレエズは逃げるにも逃げられず、面を俯向けて控へてゐると、ルイ王は片頰に微笑を浮べながらユツクリとテレエズのはうへ近づいて來て、

『ついに見かけない美人だが、何かわしに願ひでもあつて來たのかな』

ルーヴオアに懇願するよりは王の前に平伏して願ふはうがたやすく望みを遂げられるかも知れぬ。思ひがけずルーヴオアは急死し、殘る手段は王の袖に縋るほかはない。こちらから奔走するまでもなく、僥倖でこんなところで王に逢ひ、願ひがあつたらきいてやるといはんばかりのルイ王の言葉。この機を外したらいつまたこのやうな折に邂逅へるか。さア、言ふならいま。早く早くと心を急き立てるが、王の威容に壓され、喉が涸れて聲が出ない。

身體を熱くして固唾ばかり嚥んでゐるのを、ルイ王は、不憫さうに眺めながら、

『何も怖がることはない。言ふがいゝ。……さうしてモジモジと言ひ出しかねてゐるところを見ると、さては、愛人の身の上だな。政府の裁判に手落があつて、愛する男が迷惑してゐるから、理非を正してくれとでもいふのであらう。どうだ、それにちがひなからう』

テレエズは、微かに頭を動かして頷くと、ルイ王は滿足げに笑ひ出し、

『さうだらう、さうだらう。やはり思つた通りだ。それで、どうした？　戀人が牢にでも入れられたか』

テレエズはやうやくの思ひで喉を絞り、

『立會人のゐる前で、一と目その者にお會はせ願ひたいと存じまして』

ルイ王は、不審さうに眉をひそめ、

『はて、妙なことを言ふの。立會人のゐる前で面會させるのは、どの囚人にも許してあること。それを、殊更に、わしに願ふところを見ると、それは國事犯人だナ』

テレエズは、ルイ王の言葉にハツと我に返り、つくづくとかんがへてみれば、マルセル・ダルモアーズこそは國事犯も國事犯。王位を顚覆して王弟を擁立しようと企てた大謀反人。その當のルイ王に謀反人のことなどを言ひ出すのは沙汰の限り。思ひがけなく王に逢ひ、つい取逆上せて言ふべからざることまで口走つてしまつたが、今となつてはもう後にも退れぬ。この身はどうなり行くか知れないが、願ふだけは願つてみようと思ひ、臆しがちな心を勵まして、一歩、王のはうへ進み出し、草のうへに跪いて兩手を合せ、

『恐れ多い次第でございますが、あたしが逢ひたいと申しますのは、通例、「鐵假面をつけた男」と呼ばれてゐるその囚人のことでございます』

ルイ王は、鐵假面と呼ぶと、サツと顏色を變へ、

『お前は、どうしてそんなことを知つてゐる』

『どうして知らぬわけがございませう、あたしは、その者の從妹のテレエズ・ヴアンダムと申す者なのでございます』

王は、言ひやうもない不快な面持で、

『お前は、その者がどういふ罪で捕はれたか知つてゐるのか』

『もとよりよく存じてをります。あなたがヴエルサイユ宮殿から聖ジエルマン・アンレエの離宮へお成りになる途中をマルレエ・ル・ロア村の入口でお待受け申し、あなたを囚擒にして國内の反路易黨を蹴起させ、王位を顚覆せしめようと企てた大謀反人でございます』

王は、何を思つたか、ホウホウと笑ひ出し、

『さては、お前は狂人だナ。さもなければ、わしを苦しめ、わしを王位から逐はうとした謀反人をそのわしに向つて助けてくれなどと口走るいはれはない。いや、たしかにこれは狂人だ』

テレエズは、叫ぶやうに、

『いえ、氣狂ひでもなければ血迷つたのでもございません』

と言つて、跪いたまゝルイ王のはうへ膝行り出し、

『なるほど、大それた謀反人ではございませうが、廿年の間この世にあらうとも思はれぬ無慈悲な鐵

の假面を被せられ死ぬより辛い苦しみを受けてをります。あたしはその罪を許してくれとお願ひ申してをるのではございません。たゞ一と目その顏を見たいと……』

ルイ王は首を振つて、

『氣狂でないといふならば言つてきかさう。願ひの筋はよくわかつたが、それは、人間の力では叶へることは出來まいのう』

『それは、なぜでございますか。國民の父、國の王でゐられるあなたのお力に及ばぬなどこの世にあらうはずはございません』

『たとへわしが王でも、こればかりはどうすることも出來ぬ。「半獅神の淵」でたゞ一人生擒られた賊は、ペロンヌの要塞で死刑になつてしまつた。廿年前に死んでこの世にゐない者を、たとへわしにどのやうな力があつてもお前にその顏などを見せることは出來ぬ』

テレエズは、のけ反るほどに驚いて、

『何と仰しやいます、では、あのときもう死刑に？』

ルイ王は、迫らぬ口調で、

『如何にも死刑になつた。……よく聽きなさい、ご婦人。……劍で首を刎ねる代りに鐵の假面でその首を包み取つてしまつた。生きた人間にあのやうな殘酷な物をかぶせることは、どこの國の罰條にもない。死刑を申渡したればこそ地の底に葬るかはりに鐵の假面のなかに葬つたのだ。サンマルスが預つてゐるものは、たとへ命があるにしても、いはゞ、囚人の死骸。それを生返らしてこの世の人間に逢はせるほどの力はこのわしにもない』

『では、このやうにお願ひ申しても？』

『たうてい、叶はぬ願ひだ』

と、言捨てると杖を曳きながらいま來たはうへ戻りかけ、もう一度テレエズのはうへ振返つて、

『これ、婦人。お前のやうすが如何にも哀れなので何となくわしの心も痛む。死刑にされた罪人には墓碑を建てることをゆるさぬのが佛蘭西の國法だが、お前にだけは特にそれをゆるしてやる。お前のやうな危險な婦人が巴里にゐることがわかると、かならず捕縛されるであらうが、それもお前が二度と國事犯に關係せぬ間は捕縛させぬやうに言ひつけて置く。……では、ご機嫌よう、ご婦人』

ルイ王は林の向ふへ行つてしまつた。

王に願つてもゆるされぬ以上、この上もうつくす手段もない。テレエズは力なく起ちあがつて巴里の宿に歸つたが、王の勅許で逮捕をゆるされることになつたので、ブリガンベールと相談して、バスチーユに近い聖タントアンヌ大通の聖ボオル寺内にあるさゝやかな家を借りてこゝに住むことになつた。

聖ポール寺院のジロオといふ長老は、以前、ブリユッセルの聖ジヤン寺へ手箱を埋めに行つたときその寺にゐていろいろ世話になつた人。これも何かの縁であらうと、ブリガンベールは寺僕になつて寺へ住込み、テレエズは日毎彌撒に出て信仰に心を傾け、コフスキーの便りをたゞ一つの力にして六年の月日を巴里で送つた。

その年の十月の便りに、この十年の辛抱でやうやく待ちに待つた機會が來かゝつて居りますとコフスキーから便りがあつた。

六、サンスの谷の山莊並に、腰に繫いだ大輿

一六九八年十一月十二日の午後四時頃、シヤンパーニユ州サンスの谷合に臨んだ山莊に何とも異樣な行別が到着した。

人數はほゞ十人ほどで、その半數は騎乘の兵、あとの半ばは歩兵と荷擔ぎの人夫である。どのやうな大切なものが入つてゐるのか、嚴重に金網をかけ六人の男に擔がせた大きな輿を前後から護衛してゐる。何と判じやうもない奇妙な一行なので、谷合の村の人々は道端でこれを見送りながらさまざまに取沙汰した。

この年の夏、バスチーユ監獄の牢奉行典獄兼帶のベスモオが病死したのでサンマルスがその後任になり、鐵假面を輿に乘せていま巴里まで行く途中。「半獅神の淵」で鐵假面が捕へられてから、ちやうど二十六年目の秋のことである。

サンマルスの一行は、その年の九月の初めに聖マルグリート島を出發し、プロヴアンス州のアルからロオヌ河を舟でのぼり、リヨンからまた陸地をたどり、泊りを重ねてこの月の初めにブルゴーニユ州に入り、このサンスのサンマルスの山莊で一泊してからセイヌ河に沿つて巴里に入る豫定だつた。

このあたりはラングルの高原に挾まれた美しい谷合で、セイヌ河から分れたヨンヌの川が谷底を浸してゐる。

一行が山莊の入口に着くと、サンマルスは何より先に黑塗の大輿を二階の自分の寢室に運込ませ、明のオルマノオに命じて山莊の夜番の割當を言ひつけ、嚴重に塀の内外を警戒するやうに命じると、谷にのぞんだ露臺の窓を明け放し、夕陽づく秋の山々を滿足さうな面持で眺めはじめた。

長年の望みが叶ひ、いよいよ巴里の大バスチーユの牢奉行に昇進したのだから、その悦びに堪へられず後手を組んで大機嫌で露臺を歩き廻つてゐたが、ツカツカと輿のところまで戻つて來るとトントンと輿の扉を敲き、

『これ囚人、眼を醒ましてゐるか。眼が醒めてゐるなら返事をしろ』

と、聲をかけると、輿の中から沈んだ聲で、

『はい、今まで眠つて辛い夢を見てをりました。あなたが扉をお敲きになつたので……』

如何なることもベスモオの上機嫌を害ふものはなく、いつにもなく愛想のいゝ聲で、

『おう、さうか。いま眼が醒めたばかりだといふのか、よしよし。……お前の今ゐるところは、サンスの谷間にある俺の別莊なのだぞ』

『はい、さやうでございますか』

『バスチーユの典獄ともいはれるものが、官邸のほかに別莊一つ持つてゐないといふことでは估券にかゝはるから、昨年の暮この別莊を買入れ、庭師を大勢入れて充分に手を入れた。と、言つても、お前には見えないだらうが……』

『それは、さぞお立派なことでせう。私は何十年にも庭などを見たことがありません』

また己の不幸を思ひ出したやうに聲を顫はせると、サンマルスは、顏を顰め、

『おや、また泣くのか。お前もずゐぶん泣蟲だな。何もそんなに悲しがることはなからう。お前は長年俺と苦勞をしたのだからその誼でバスチーユでは塔の一番いゝ部屋を用意させて置いた。悲しがるどころではなからう、禮を言つて然るべきところだ』

『それは有難いこと。そこには清い空氣がありませうか』

『空氣もあれば、陽の光もある。今までとは格段の相違だ。……しかし、何と言つても牢と別莊とはちがふ。山に入りかけた夕陽が谷の斜面に照りつけ、庭の植木越しにホンノリ水の色が見えるところなんぞ、實に、何とも言へないゝ景色だ。一寸、貴樣を出して見せてやりたいなア』

鐵假面は、檻のなかで身動きしたと見えてゴトリと輿を動かし、

『どうか、たつた一と目。……せめて、木の葉の色だけでも。……もう、何年にも草木の色なぞ見たことがありませんから……』

『お前は元は身分のある者だから、庭の善惡ぐらゐはわかるだらう。せつかく買つた別莊でも、かうして俺一人で見てゐるのではつまらん。……よしよし、見せてやる。貴樣は、この頃は神妙に俺の言ふことをきくやうになり、年に一度政府へ差出す手紙にも俺の言ふ通り、まことに鄭重な扱ひで何の不足もありませんと書くから、それに免じて慈悲をかけてやらう』

輿の中では濕つぽい涙聲で、

『お見せくださいますか。あゝ、有難いこと』

サンマルスは油斷なく露臺の端まで出て四邊隈なく目測をくれ、また戻つて來て、

『露臺にさへ出なければ、どこからも貴樣の姿を見られる氣遣はない。さア、いま出してやる。その代り、たつた五分間だぞ。……この立派な別莊を見て、何侯爵の山莊によく似てゐるとか、何伯爵の

庭よりもまだ見事だとかと、精一杯に賞めてくれ』

サンマルスは、腰に結びつけてあつた鍵輪から鍵を拔取り、網扉の錠を外して扉を引開けると、興の中からはまづ枯木のやうに痩せた片手だけが露れ、興の扉框につかまりながら身をかゞめてよろけ出して來たのは、この二十六年前から陽の色さへ見たこともない哀れな鐵假面。

この一月ほどの間、狹い興のなかに坐りつゞけてゐたので容易に足の關節が伸びぬと見え、兩手で膝を擦すりながらソロソロと身體を伸ばす。

ビニユロールの監獄の一室でその姿を見せたときから更に十餘年も經つてゐる。首から上は鐵假面に隱れて見ることは出來ないが、身體はあの時よりまた一層痩せ衰へ、殆んど歩むことさへも出來かねるやうすである。

サンマルスは、よろけかかる鐵假面を手で支へ、

『お前も意氣地がなくなつたものだ』

と憫れむやうに言ふと、鐵假面は重い鐵の頭を動かして微かにうなづき、

『はい、もう毎日老ぼれるばかりです』

『お前も、むかしは、人も怖れる「半獅神の淵」を馬で渡切つたこともあつたツけが、あの頃の元氣はないか』

『とてもあのやうな氣力は殘つてをりません』

追從するやうに腰をかゞめる。

十四年前ビニユロールの監房で見たときは衰へたりとは言へ、まだ消えやらぬ靈火の一點があつてこのやうな卑屈な態度は決してしなかつた。あまり長い苦痛に逢ふと、肉體ばかりではなく精神までもこのやうに衰へるのか。ルイ王と大宰相を向ふに廻し、歐洲全土を席捲しようとした回天の英雄も、今は一典獄にも憫れまれる。力のないことはまるで泥のやう。

この哀れな零落のさまを見て、涙を催さぬ者はあるまい。影のやうにたゞそこに形があるといふだけの哀れな狀態だが、しかし人に優れた一片の氣骨があればこそ、二十六年の間、殘忍冷酷な拷問に堪へなほまだ微かながら命を保つてゐるのであらう。

サンマルスは、鐵假面の手を曳いて露臺の入口まで行き、目の下の庭を指しながら、

『どうだ、あれを見ろ。築山には天然の小山を採入れ、林の中に川から水を引いて流れをつくつてある。向ふの川の岸までズツト庭續き。大した贅澤なものだらう』

鐵假面は、丸い鐵の頭をかしげて谷間を見下し、また頭を振上げて山の端にあらはれ出した夕星を恍惚と眺めてゐたが、やがて深い溜息をつき、

『あゝ、このやうに美しい世の中もあるものを……』

と、血を咯くやうな聲で呟く。サンマルスは、不服さうに面を膨らし、

『これ、何をブツブツ言つてゐる。立派な庭だとか何とか言はぬか』

鐵假面は、涙聲で、

『はい、どうも、實にたいへん立派な庭で』

サンマルスは、大滿足にうなづいて、

『さうともさうとも、バスチーユの典獄ともあらう者がこのくらゐの別莊を持つてゐなければ幅が利かぬ。……貴樣ももう堪能したちう。あまり長く見てゐてはかへつて眼の毒だ。さア、もう輿の中へ入れ。今晩はまた俺のそばで寢させてやる』

鐵假面を引立てながら輿の中へ押込み、扉を締めて以前のやうに嚴重に錠をおろし、

『さア、ソロソロ夕食の時刻だ。久振りに草入りのオムレツでも賞味しようか。それにしても、神はこの俺に特別の御恩寵を下したまはると見える。あと三四日たてばバスチーユの奉行。實に、どうもいゝ心持だ』

と呟きながら鍵束の鍵を鳴らしながら食堂のある方へ降りて行く。あとには鐵假面が忍び泣く聲。心の中も察しられて、哀れ深かつたのである。

サンマルスは甥のオルマノオを相手にして上機嫌で夕食をしてゐたが、明日は早立なので兵士や人夫

どもゝ割當てられた不寢番のほかは早く寢につかせ、じぶんも夕食がすむと早々に寢室へ引取つた。

この山莊はサンスの町からだいぶ離れた谷合にあり、樹々が繁つて晝も暗いやうな山蔭なので、追追、夜が更けわたると深沈と靜まりかへり、葉擦の音もきこえるかと思ふばかり。

月は山の端に隱れ、星の光が二つ三つ雲間から洩れてくるが鬱蒼たる葉繁みにさへぎられて下草まではとどかない。

もうソロソロ眞夜中にならうといふ頃、山莊の裏手の林の中からホウホウと梟の啼く聲がきこえてきた。

あたりをはばかるやうなしめやかなその鳴聲は、一寸の間杜絶えては、またホウホウと啼く。

たぶん不寢の番人なのであらう、角燈の明りを袖で隱しながら塀に沿つてヒタヒタと歩き廻つてゐたが、その聲をきくと、

『おう、梟が啼いてゐる』

と、呟きながら、その主をたしかめようとでもするやうに谷の斜面の小徑を傳つて聲のする林のはうへ降りて行き、林の奥のはうを透かしながら、ホウホウと二た聲ばかり梟の鳴眞似をした。

その聲が終る間もなく、太い栗の樹の下闇の中からノツソリと起ちあがつた一人の男、囁くやうな忍び聲で、

『コフスキーカ』
と聲をかけた。
コフスキーと呼ばれた不寢番は二足ばかりその男のはうへ進み寄つて、
『おゝ、ブリガンベール、こゝにゐたか。俺がアルルの宿から出した飛脚便を受取つたらうナ』
もう一人のはうは、頷いて、
『それを見たので手筈通りに巴里からやつて來た。いよいよ今夜やるのか。段取りはもう出來てゐるか』
『出來るだけのことはして置いた。廿八年も待つた機會だから、今日を外すといつまたかういふ折が來るかわからん。今日こそはどんなことがあつてもやり遂げなければならん。この折を外してバスチーユへ入れられてしまふと、容易くは救出すといふわけにもゆかない。たとへ、如何に警護が嚴重だといつても、多寡が山の別莊。バスチーユとは比べものにならぬ。力を合せて奮發して、かならず目的を達することにしよう』
急に氣付いたやうに、
『それはさうと、お孃さまはどこにゐられる』
『次の宿の旅籠屋で待つていらつしやるから、無事に鐵假面を攫つたら間道傳ひにフランシュコンテ

州から瑞西へ入り、それから伊太利へ逃げて行く手筈になつてゐる。……それで、そちらのはうの手筈はどんなことになつてゐる』
コフスキーは、ブリガンベールのそばへ蹲みながら、
『塀の外を巡回する不寢番は俺とル・サージュといふ士官の二人に割當てられたが、ル・サージュは、さつき俺が不意に當身を喰はせて氣絶させて塀の外へ轉がして置いた。萬一、失敗つた場合、俺に疑ひがかからず、この後々もサンマルスの執事を勤めてゐられるやうに、氣の毒だが、犯人はル・サージュだつたといふことにそいつに濡衣を被せるつもりなのだ。すこし酷いやうだが、背に腹は代へられぬ』
『さすがよくかんがへた。それならばお前は疑はれずにすむだらう。……それで、家の中の見張りはどんな工合だ』
『護送の兵隊や人足は道中の疲れで他愛もなく寢込んでゐるが、イザといふ場合に飛出して來て騷立てぬやうにそこらの部屋に外から鍵をかけ、料理番のゐる部屋にも抜目なく閂をかつて置いた』
『すると、家の中にはもう見張番はゐないのか』
『いや、二人ゐる。……興はサンマルスの寢室に置いてあるのだが、そこへ行く階段の下に鐵砲を持つた番卒が二人立つてゐる』

『それは少々難物だナ。一人なら縛上げることも出來るが、もう一人のはうに騷がれては手に負へない』

『そのはうは心配するな。その二人は兵卒と言つても、もとはサヴオアの獵師で、獵にかけては目がない。この邊に狐がたくさんゐるやうだがぶち毆つて捕つて見たい、どうも腕が鳴つて堪らぬと話をしてゐたから、手筈が決つたら俺がこゝで狐の鳴眞似をして二人を誘き出してしまふ。どうせ無責任な奴らだから役目などは放棄てきつと出て來るにきまつてゐる』

『その方はそれでいゝ。……では、いよいよ最後の段取りだが、どこからどんなふうに入つて行く』

『俺は夕方のうちに落葉の中へ梯子を隱して置いたから、それで塀を越え、物置のそばの道を行くと向ふに裏口が見える。右は料理場で左は薪置場だ。その扉は開いてゐるから、そこから入つて突當りの扉を開けると廊下へ出る。構はずそれを眞直ぐ行くと廊下が二つに分れるが、そこを右へ曲ると二階へあがる階段の下へ出る。二階には四つ部屋があるが、一番奥の部屋がサンマルスの寢室で、その一つ手前が甥のオルマルノオの部屋だ』

『オルマルノオといふのは何者だ』

『これは陸軍の少尉で叔父には似合はずなかなか沈着な男だ。サンマルスはビニユロールで二人の娘を死なしてしまつたので、行くゆくはそれがサンマルスの後繼者になるはずで、遺產を繼ぎたさに精

精孝行してゐるといふわけだ。……この道中ずつとさうしてゐたが、今晩もサンマルスの隣の部屋で寢ずに興を見張つてゐるはずだ。惡いことには、このオルマルノオの部屋を通らなければサンマルスの寢室へ行けぬやうになつてゐるのだから、先づこゝが一番の難所。しかし、二人で力を合はせれば、騷がせずにあいつを縛上げるくらゐのことは出來ぬわけはない』

ブリガンベールは、聞咎めて、

『いま、お前、何とか言つたナ。……われわれ二人でやるのだと?』

コフスキーは、不審げに、

『如何にもさう言つた。それに不審はなからう』

ブリガンベールは、首を振つて、

『いや、それは不可ん。もし二人でやつて失敗つたら後がつゞかぬ。俺一人ならば、萬一、失敗つて捕まへられても、お前さへ安全なら巴里へ着いてからまた機會を摑まへることも出來る。俺一人死ぬのはいゝが、二人ともそんなことになつたら、これから先、誰がお孃さまの保護をする。萬一、俺が死んだら、お孃さまの後楯になるのは、この世でお前たつた一人きりなのだから、辛からうが、お前は手を出さずにゐてくれなくては困る』

コフスキーは、頭を垂れて考へ込んでゐたが、間もなく强くうなづき、

『いや、よくわかつた。くどくは言ふまい。お前一人を死なせるのは朋友の義に缺けるが、あとに殘るお嬢さまのことをかんがへると、そんなことにかまけてはゐられない。では、どうかお前一人でやつてくれ。俺はどんな場合でも手出しをせず見過しにしてゐるから』

『いや、それでなくてはならぬ。よく理解してくれた』

ブリガンベールは、木の間から空を見上げ、

『もう月も隱れてしまつた。だいぶ時刻も移つたから、俺はこれから乘込む。……では、コフスキー、ひよつとすると、これが今生の別れになるかも知れぬ。どうか、丈夫で暮せ』

『如何にも、これが別れになるかも知れぬ。別れる前に一寸抱かせてくれ。長い馴染だつたが』

腕の中にしつかりとブリガンベールを抱き、

『あまり逸つて無駄に命を捨てるのではないゾ』

ブリガンベールも、コフスキーを抱き返し、眼に涙を泛べながら、

『よしよし、わかつた。では、俺は行く』

『俺はこゝで狐の鳴眞似するから二人の奴が出て行くのを見すましてから塀を乘越えろ』

ブリガンベールは、爪先のぼりの小徑を辿つて塀外の闇の中で待つてゐると、いま來た林の中からコンコンと狐の鳴く聲がきこえてきた。

『あゝ、コフスキーが一心に狐の鳴眞似をしてゐる。うまく番卒が誘き出されればいゝが』

呟いてゐるところへ、門の中からコソコソと跫音を忍ばせながら出て來た二人の番卒。あの聲を聞いては、どうにも我慢が出來ぬ。川の岸へ追詰めて棒で毆殺さう、と、小聲で語合ひながら林のはうへ降りて行く。

しばらくたつと、狐の聲はだんだん遠退き、こんどは小山の峰のあたりから微かに聞えてくる。ブリガンベールは、獨りうなづきながら、

『あんなふうにして、だんだん遠くのはうへ誘き寄せるつもりと見える。よし、では、この間に……』

落葉の中から梯子を捜し出し、それを塀に立てかけて裏庭に忍び込み、言はれた通りに廊下の端の階段から二階へあがつて、オルマノオの部屋の鍵孔に眼を押當てゝ眺めると、燭臺をいくつも押並べた晝よりも明るい部屋のなかに三十ばかりの一人の士官が扉と向合ふやうに椅子に掛け、ガツシリと腕組みをして油斷のない鋭い眼でこちらのはうを睨めてゐる。

士官の視線は、丁度鍵孔のあたりを睨みつけてゐたので、ひよいと覗いた途端、鍵孔越しに二人の眼が出合ひ、ブリガンベールはちやうどじぶんが睨みつけられたやうな心持がしてタジタジと扉から身を離し、これはどうも用心堅固なことだ。こゝを押破つて入るのはたやすいが、下手なことをしたらあの拳銃で一發喰はされる。あのやうすではなかなか眠りさうにもないが、さて、どうしたものだ

らう、と心の中で呟きながらさまざまに思案をしてゐたが、何を思ひついたか獨りうなづき、一旦、廊下の端まで引返し、取付の空部屋の窓を開けてソツと露臺へ出、跫音を忍ばせながら最前の部屋の裏側へ行き、窓から部屋の中を覗込んで見ると、士官は扉のはうを用心するのに忙しく、こちらのはうはまるつきりお留守になつてゐるので、ブリガンベールはこれは好都合とうなづき、ソロソロと窓框の上へ攀ぢのぼり、部屋の中へ半身を入れるより早く、士官の背後から襲ひかゝつて、ものも言はずに兩手でその首をひつ摑み、腕を伸ばせるだけ天井のはうへ伸ばし、身體を弓のやうに左へ反らす。

士官は宙吊りになつたまゝ聲も出せずに四方を蹴りつけて悶搔いてゐたが、十分もたつと息が止まつたのか、グツタリと動かなくなつてしまつた。

ブリガンベールは、士官の革帶を外して手早く手足を括り、長椅子の下に押込んで置いて、次の間につゞく扉を押開けて見ると、部屋の奥に帳を垂らした寢臺があり、そのそばに網をかけた大きな輿が置かれてある。

幾十年の望みがいよいよいま達しられるかと思ふと、ブリガンベールの胸中さまざまの思ひが湧起る。やがて足音を忍ばせてソツと輿に近づき、扉に耳を押當てゝ見ると、中には正しく鐵假面が眠つてゐるとみえ、高く低く不揃ひな苦しさうな寢息が洩れてくる。

ブリガンベールは、その扉に口をあて、旦那さま、ブリガンベールがお救ひにまゐりました、と呟

きながら、六人舁つぎの大輿を息聲も立てずにウーンと肩に擔ぎあげ、いま來たはうへ五六歩引返しはじめると、その途端、何かうしろから引きとめるやうな手應があつたと思ふ間もなく、えらい音を立てゝ誰れかゞ寢臺から轉げ落ちた。

アツと驚いて、振向いて見ると、それはサンマルス。

甥のオルマルノオに不寢の番をさせるだけではまだ安心がならず、鐵假面を縛つてその繩を輿の息抜孔から出し、シツカリとじぶんの胴に結合せ、寢た間も離さぬといふ用心なのであつた。

ブリガンベールは、今更、後にも退かれず、サンマルスの身體を廊下にぶち當てゝ振離さうといふ一心で、興のなかの鐵假面が轟轉するのもかまはず、大駈けに駈けて階段の上り口のところまで駈出すと、サンマルスは長い廊下を轉々と曳きずられ、起たうとしては倒れ、倒れてはまた芋虫のやうに轉がりながら、聲を限りに、

『それ、曲者だ、みな來い、みな來い』

と、血聲を絞つて叫び立てる。

この聲を聞きつけたか、階下からは大勢の兵士が騒立てる聲が凄まじく聞えはじめる。

ブリガンベールは重い輿を擔いだまゝ前と後に敵を受けることになつたが、どうせ最初から命はないものと覺悟して來たのだから、死んでもこの輿は離すものかと、サンマルスを曳きずりながら階段

を二三段降りかけると、階下から最前、狐狩に出て行つた二人の番卒が劍を拔放して喚き叫んで驅け上つて來る。

これは、と、一瞬、立竦んだその束の間、やうやくサンマルスは起きあがり、腰帶に挾んでゐた短銃を取出して、こいツ、と言ひさま、轟然と一發、擊ち放した。

その彈丸は輿に當つたとみえ、輿の中からアツといふ聲が洩れる。つゞいて第二彈はブリガンベールの右肩のあたりを强かに貫いたが、ブリガンベールはすこしも怯まず、先づ下の奴からといふより早く輿をうしろへ投捨てゝおいて、一跳躍すると見ると、逆落しに下から上つて來る兵卒のうへに落ちかぶさり、三人同體になつて階段を轉がり落ちて行く。

ブリガンベールは岩のやうな拳を揮つて二人の兵卒を叩き伏せ、輿を取返さうと階段へとりつくと下の番卒は跳ね起きざま兩足に搦みついて階上へはやらぬと抵抗する。その間にも、サンマルスは短銃を振翳し、大聲に叫び立てながら降りて來る。

この上どう働いても輿を奪ふ工夫はない。この場は逃れるはうがかんじんと、煩くまとひつく一人を引ツ捕へ、眼よりも高く差上げていま降りかゝるサンマルスの胸の眞中へ力まかせに叩きつけ、一と塊になつて悶搔いてゐるひまに勝手口から裏庭へ飛出し、やうやく塀のそばまで走り寄つたが、このときもう十人ばかりの兵卒がすぐ足元まで追迫り、擊殺せ、擊殺せと叫びながら、思ひ思ひに鐵

砲を擊ちかける。ブリガンベールは物ともせずに塀の上までよじりのぼり、梯子に飛びつく三四人を梯子諸共引上げ、群がる兵士のなかへ投げつけて置いて、

『死んだらそれまで』

と、三十尺にも餘る塀の上からエイツと崖下へ飛びおりた。

塀の內の一隊は、サンマルスの指揮に從つてドツと裏門のはうへ押して行き、門を開いて喚き出したが、門のすぐ外はサンスの谷に連なる深い林で、星の光も射込まぬ木の下闇。どちらへ走り込む決心もつかずに狼狽廻つてゐるとき、頃合はいゝと思つたのが、コフスキーは息せき切つてサンマルスのそばへ駈寄り、

『塀の上から飛んだ曲者があそこで氣を失つて斃れてをります』

と、注進した。

塀の外に斃れてゐたル・サアジュといふ士官は、不身持のために巴里の近衛隊を逐はれたもので、平素から大酒の上にふしだらなことが多く、この日もサンマルスの禁制を破つてしたゝかに酒を飲み、コフスキーに當身を喰はされた途端に卒中を起したか、たうとうそれつきり生返らなかつた。

ル・サアジュは、たぶん酒手に困り、金欲しさに謀叛人の一味を手引したのだらうといふことになつて、コフスキーには露ほどの疑ひもかゝらなかつたか、一方、ブリガンベールの方は、十分の九分

まで成功しかゝつたところでまた失敗してしまひ、空しくテレエズが待つてゐる宿へ歸つたが、この上は、いつかヴオアサンが言つた方法で最後の試みをするほかはないといふことになり、サンスの山莊で失敗したことを細かに書添へ、いつかお話のあつた物を巴里の聖ポオル寺院の地内のじぶん宛に送つてくれるやうに手紙を送り、疵の治療をするためにブリガンベールをあとに殘し、じぶんは、次の朝の驛馬車でサンスの村を出發した。

七、「鐵假面」の最後の日並に、その夜の聖保羅寺

サンマルスの一行はその次の朝、サンスの山莊を出發し、八日後の十月十八日の午後三時頃バスチーユ監獄に到着した。

巴里のアルスナール圖書館の古文書庫に貯藏されてゐる副典獄デュ・ジャンカの公務日誌に次のやう認められてある。

「一六九八年十月十八日、木曜日。

この日の午後三時、バスチーユ監獄奉行典獄兼帶サンマルス樣御到着に相成る。サンマルス樣はプロヴアンス州、聖マルグリート・オノーラ砲臺監獄より御榮轉に成りしものにて、相當年配の囚人人興にて御召連れ相成たり。この囚人は假面を被りて絶えて脫ぐことなく、その名は不申知。御到着後、その囚人は取敢ずバザニエール塔第一室に入れ、夜の九時になるを待ち牢番長ロザルジュと共にベルト・オウジエール塔第三室に移す。豫て御旅先より御指圖ありたることにて、同居の囚人は置かず、什器萬端手厚く備へ置きたり」

これが、その日の模樣である。

さて、その年も暮れ、翌一六九九年の三月になつてパルマ公國のラ・ヴオアザンから假死の毒藥と解毒劑を送つてき、それに添へた手紙には、これは死刑囚に試驗して充分にその結果を試したものだから氣遣なくお用ひあるやう、但し、四十八時間以內に解毒劑をお用ひあるべし、私もそちらへ參るところなれど、先年、ナアロオとルーヴオア侯に毒藥を送つたことが悟られたやうなので、巴里へ出向くことは少々不都合。鐵假面をお救出しの上は、すぐにも當地へお越しあるべく、と書いてあつた。

幸ひコフスキーはその後も引續いてサンマルスの執事を勤めてゐたが、依然としてサンマルスに油斷はなく、鐵假面の傍へ寄らせぬので毒藥を渡す機會もなく、一年また一年と空しく過し、鐵假面がバスチーユへ歸つて來てから丁度五年目の一七〇六年の十月になつた。鐵假面がペロンヌの要塞で捕はれてから三十年目のことである。

この月の末になつて、ベエルト・オウジエール塔受持のジャンといふ牢番が病死し、後任が出來る

まで毎日曜日の禮拜堂への送迎をコフスキーに委されることになつた。

十一月の四日は第一の日曜なので、ぜひともこの日に例の物をお手渡しするはずといふ便りがコフスキーから届いたので、テレエズはいよいよ長年待望んだその日が來たかと天にも昇るやうな心持でブリガンベールと二人で聖ボオル寺へ行き、祈禱をあげながら夕方まで待つてゐたが、コフスキーからは何の便りもない。

もしや失敗してコフスキーまでが捕へられたのではないかと胸の潰れるやうな思ひでゐるところへコフスキーからの消息があつて今日は思ふやうにゆかなかつたから、この次の日曜日に、と書いてあつた。

その次の日曜日は十一日で、今日こそはと思つて待つてゐると、その日も駄目。

次の十八日の日曜日もまた音沙汰がない。翌日の十九日、テレエズは例の通り聖堂へ祈禱しに出かけ、夕方近く寺を出て庭傳ひに地内のじぶんの家の近くまで歸つて來ると、誰か入口の扉の前に人が佇んでゐるのでギョッと立竦み、宵闇を透かして見定めると、それはコフスキー。

二人は、コフスキーを家のなかへ引入れるより早く、首尾は、と左右から問ひかけると、コフスキーは、長年の苦勞で痩せ窶れた頰に涙を流し、

『はい、首尾よくまゐりました。旦那さまはもうお亡りになりました』

かねて覺悟したことゝはいひながら、テレエズもブリガンベールも等しくと胸を衝かれ、

『それでやうすはどんなふうだつたの。どうぞ、くはしく話しておくれ』

コフスキーは、ソロソロと椅子に身を落着けてから、

『昨日、十八日の日曜日にいつもの通り鐵假面の手を曳いて禮拜堂の特別聽問室の近くまで來かゝりますと、相役の牢番が聽問室の鍵を忘れたから一寸取りに行つて來ると言つて、慌てゝ駈出して行つたので、この機會を外してはならぬと思ひ、怯む心に鞭打つて、お預かりした毒藥の罎を鐵假面の手に握らせ、「これをお嚥みになれば、かならずお助かりになります。どうか、お疑ひなく」と低聲で囁き、湧立つ胸を抑へながら彌撒のすむのを待つてゐますと、間もなく鐵假面が聽問室から出て來て腕を取つてゐる私の手へソツと空罎を返してよこしました。特別聽問室の中はどこからも見えぬので、彌撒を聽いてゐるうちに嚥み干し罎の棄てどこがないので私に返したのだと思ひます』

テレエズは、膝を乘出して、

『それから、どうしました。……ヴオアザンの毒藥は、ひと息吸つたゞけで、すぐその場で息が絶えるのださうだが、そんなふうでしたか』

コフスキーは、首を振り、

『いえ、さうではありませんでした。しかし、禮拜堂の玄關を出る頃にはそろそろ毒が廻つて來たと

見え、手にたいへんな冷汗をかいて幾度も私に凭れかゝりましたが、中庭の途中まで行くと、そこで歩みも出來ぬやうになつて倒れてしまひました。……相役の牢番は驚いて、「これはたいへんだ、鐵假面が死にかけてゐる」と、大きな聲で叫び立てましたので、その聲を聞きつけサンマルスと牢番長のロザルジュが眼の色を變へて飛んで來て、胸に觸るやら脈を診るやら大狼狽に慌ててをりましたがこれはいけないと思つたか、二人で頭と足を抱いて塔の上まで擔ぎあげ、獄醫のレイユと彌撒を終へたばかりのこの聖ポオルのお長老のジロオ樣を塔へ呼びあげました。……それから間もなく獄醫のレイユが塔から出てまゐり、ジロオ樣だけが遲くまで塔へ居殘つておいでになりましたが、それから察すると、その頃はもう助からぬといふことになつて、お長老樣が聖油の式をお授けになつてゐたのだと思ひます。……鐵假面が息を引取つたのは丁度十時頃だつたらしく、それから間もなくサンマルスがベルト・オウジエール塔から下りて來てロザルジュに棺桶の用意やら政府へ差出す報告書の文案などを差圖してをりました』

テレエズは、唇を顫はせながら、

『それで、墓に埋められるのは何日に決まりましたの。もし四十八時間以上監房に留置かれるやうなことになつたら、これまでの苦心も水の泡になり、まだ老先のあるマルセルの命をわれわれの手で縮めたやうなものだから、それをかんがへると怖しくてゐても立つてもゐられぬやうな氣がします。埋

葬するのは何時に決まりました』

コフスキーは、頷いて、

『私もその點を大きに心配いたしましたが、ご安心くださいませ。鐵假面は明日の午後、この寺の教區墓地の奥にある無緣墓地へ葬られることになりました』

テレエズはブリガンベールと安堵の眼を見合せ、ホツと吐息をついてから、

『教區墓地といへば、こゝからすぐ庭つゞき。鐵假面が昨夜の十時頃死んだといふことであれば、明日の夜の十時前に掘出せば間に合ふわけ。あゝ、これで安心しました。それにつけて、明日の午後葬るといふのは確かに間違ひはないのだらうね』

コフスキーは上衣の内衣囊から一通の手紙を取出し、

『今日私が參りましたのは、この聖ポオル寺のジロオ樣へこの手紙をお屆けするやうにとサンマルスから言ひつかり、それでかうしてあなたさまにもお目にかゝれたといふわけなのでございます。これはサンマルスから長老樣に宛てた埋葬の指圖書でございますから、これをごらんくだされば御納得がゆきませう』

と言つて、その手紙をテレエズのほうへ差出した。

テレエズが受取つて讀んで見ると、こんなふうに書いてある。

例の囚人、いよいよ明日午後、貴寺の墓地に葬ることに致し、葬儀の費用は四十リーブルを以て辨じ度候間、そのおつもりにて御用意願はしく候。葬儀は牢番長ロザルジュ並に獄醫レイユの兩名が執行し、死亡登錄書にも右の兩名が立會署名を致す筈。囚人の本名は Marchiel と申候間、囚人死亡調書には右の名をお認め被下度賴入候。バスチーユ監獄、奉行典獄兼帶ド・サンマルス

テレエズは急がしく眼を動かして幾度もその手紙を讀返してゐたが、サッと顏色を變へ、

『コフスキーや、これを見ると、囚人の本名はマルチェルといふ伊太利人の名になつてゐるが、すると、鐵假面はマルセルでもオビリエ大尉でもなかつたのだね。まるつきり名も知らぬ赤の他人を救出さうとして三十年も骨を折つてゐたのだらうか』

テレエズのこの驚きは至極尤もだと言ふほかはなからう。テレエズが叫んだやうに、鐵假面がもしマルチェルといふ見も知らぬ伊太利人であつたとしたら、世にこれ以上の皮肉もなく、これ以上の悲慘な運命もない。

この祕密の鍵は副典獄デュ・ジャンカの公務日誌が解決してくれる。ジャンカは鐵假面の臨終について次のやうな事實を誌してゐる。

「一七〇三年十一月十九日、月曜日。

サンマルス樣聖マルグリート島よりお伴ひ相成し、素姓不承の鐵假面の囚人は昨日彌撒後病氣となり左迄危篤とも見えざりしに、夜の十時頃に至り、假面のまゝにて死したり。長老ジロオ師はその者の病の床に臨み種々慰めたりといふ。尤も、最早、死際なりし故、身の素姓、一身の過去のことなど長老に打明けしや否や審には知らず」

とあつて、翌廿日の日誌には、

「同十一月二十日、火曜日。

この日午後四時、例の不承の囚人を聖ノーレ街の聖ボオル寺墓地に埋葬す。過去帳には當り障りなき名を記入することにし、マルチェルと名付け置きたり。埋葬に要せし費用四十リーブル也」

と、書かれてある。

老獪なサンマルスは、最後までルーヴォア侯の意志を堅く守つて、鐵假面の本性を永久に祕密の中に葬去り、歷史の記述の外に埋めようと企てたのだつた。

テレエズがもしデュ・ジャンカの公務日誌を見ることが出來たら、この事實の裏を知ることが出來たのであらうけれど、この日誌は一七八九年バスチーユが民衆の手に奪取されるその日まで地下室の書庫に祕藏されて、嘗て陽の目を見ることがなかつたのだから、勿論、それを見るよしもなかつたの

である。

さて、テレエズがさう言ふと、コフスキーは落着いた口調で、

『その點については私もいろいろに思ひ惱み、こゝへ來る途々十分に考へて見ましたが、このマルチエルといふのはいゝ加減な名なのだと確信いたしました』

『それは、どういふ理由から』

『その前の經緯をお話しなければおわかりにならないでせうが、この手紙を持つてサンマルスの部屋を出るとき、ロザルジュはサンマルスにこんな話をしてをりました。……ロザルジュとサンマルスが向つて、いくら何でも假面をつけたまゝ葬るのはあまり殘酷ではないか、と言ひ立てますと、サンマルスは、生きてゐるときさへこんな物を被されてゐた者が死んだ後で假面を被されたとて何が殘酷なことがあるものか。かねてから政府の嚴命で、死んでからも假面だけは取らぬやうに申渡されてあるのだから政府の命令に背くわけにはいかぬ、と言つてをりました。……これから推すと、明日の四時に葬られるのは鐵假面にちがひないわけ。なぜかと申しますと、バスチーユには鐵假面のほかに死んだ囚人なぞはないからでございます。ところで、あなたもご承知のやうに、「半獅神の淵」で捕へられた一人が鐵假面を被せられたといふことはペロンヌの要塞で扉越しに聞いたナアロオの言葉でもチヤンとわかつてゐるのですから、鐵假面がマルチエルなどといふ者ではないことは極めて明白なわけです。……私はこの手紙をジロオ樣に屆けてバスチーユへ歸り、明日の夜の九時頃になりましたらこゝへ參りブリガンベールと二人で萬事拔目なく取計ひますから、どうか、あまりご心配にならず、お心安く明日をお待ちください』

と言つて、それでコフスキーは歸つて行つた。

翌日の午後四時近く、バスチーユから柩が一つ送られてきた。四人の人夫が擔いで、コフスキーがこれに附添ひ、牢番長のロザルジュと獄醫のレイユがそのあとに從つて寺の本堂へ送込み、簡單な埋葬の式を取行つてから棺を墓地へ運び、無緣墓の立並ぶ共同墓地へ埋めて匆々に引取つて行つた。

テレエズとブリガンベールはバスチーユの役人が引取つて行く後姿を窓の鎧扉の隙間から見送りながら、もう五時間ほどすれば鐵假面の顏を見、その聲を聞くことが出來る。三十年この方、待ちに待つたその時があと幾時間の後に迫つたと思へば、嬉しさか不安か、何とも言へぬ異樣な感慨に襲はれ、身を落着けることも出來ずにひたすら日の暮れるのを待つてゐると、九時間近くなつてソツとコフスキーが忍んで來た。

棺を掘出したら本堂まで運んで行つて、そこで解毒藥を嚥ませる手筈にし、テレエズは先に本堂へ行つて待つてゐることになつた。

コフスキーとブリガンベールは鍬を持つて無緣墓地の中へ忍び込み、晝間見覺えておいた鐵假面の

土饅頭のそばへ行き、鍬を揃へて掘りかけたが、埋めてからまだ幾時間もたつてゐないので掘るほどもなく土の中から棺が露れてきた。

ブリガンベールは棺の蓋の土を拂ふと猶豫もなく肩に擔ぎあげ、コフスキーは元のやうに墓の土を均して聖堂の横手の口から本堂の中へ擔込む。

テレエズは今まで祈禱してゐた祈禱臺から起ちあがつて二人のはうへ走寄り、棺を凝視めたまゝさながら人の氣を失つた人のやうに立竦んでゐる。

二人は用意してきた釘拔でソロソロと釘を拔取りはじめたが、もとより粗末な囚人の棺だから造作もなく蓋が外れ、その中から白布に包まれた不氣味な死骸があらはれ出した。

コフスキーは白布に手をかけて靜かに取除けると、その下には鐵の假面を被つた異樣な亡骸が胸の上に手を組んで佗しげに横つてゐる。

これが彼の日自分たちの先頭に立つて「半獅神の淵」を渡つた勇ましい主人の果てかと思ふと、あまりの無殘さに思はず涙がこみ上げてくる。ともどもに、あまり無殘な、と呟きながら、左右の脇から手を入れて病人を起すやうに靜かに棺から出し、傍の椅子に腰を掛けさせた。

內陣の柵のそばにある常夜燈はほのぼのと淡い光を投げかけ、廣い本堂のなかには何一つ物音もなく、互の耳に通ふのは三人の息の音ばかり。本堂の隅々は黑い闇のなかに沈んで、たゞ燈火のある一

坪ばかりが明るいのに、その光の下に、さながら生けるが如く凝然と椅子に凭つてゐる鐵假面の異樣な姿。

頭には丸い黑い鐵の玉をつけ、首から下は不吉な經帷子に覆はれ、その裾は長く石疊の上に曳いてゐる。さながらグレジュスが描いた黑死病王が畫布から拔出してこゝへ現れたかと思ふばかり。

さすがのテレエズもあまりの物凄さに思はず寒氣立てながら身を竦ませながら眺めてゐるうちに、コフスキーは、一度バスチーユの濠端で鐵假面を外した經驗があるので慌てもせずに例の合鍵を假面の鍵孔に挿入れ、二度三度廻し試みると錠前のなかでカチリと微かな音がして假面はバツタリ鐵假面の膝の上に脫げ落ちた。

三人は一時に眼を走らせてその顏を差覗くと、あまりの意外に、思はずアツと恐竦の叫びをあげ、床の石疊の上に尻餅をついた。

鐵假面の中からあらはれたその顏を見ると、それはアルモアーズでもなくオビリエでもない。額と頰のあたりに僅かばかりの乾涸びた黑い皮を殘した一個の髑髏！

マルセル・ダルモアーズの亡骸は死んで僅か四十八時間も經たぬ間に早や肉が腐り落ちて髑髏となつてしまつたのであらうか。

テレエズは恐怖に竦む足を勵ましながら、そのそばに近づいてツクヅクと見定めると、これこそは、

いつかブリュッセルの聖ジャン寺の林の中で樫の樹の根元を掘つてゐたあの髏髑男。

糸蠟燭の光にマザマザと映し出されたこの顏はハツキリと網膜にしみついてゐて、忘れようとしても、忘れることが出來ない。

眼瞼は流れて丸い眼玉が眼窩の中から剝出しになり、鼻は腐落ちてそのあとに三角の黑い孔を殘し、鼻孔の下には唇がなく、いきなり七分ばかりの長い齒を剝出してゐる。頰や顎のところどころに殘つた干枯びた皮の表面には豚の毛のやうなものが一筋二筋、疎らに伸びてゐるところなども少しの見違ひもない。

それにしても、この髏髑男はいつの間に鐵假面などを被せられたのであらう。

この男こそは巴里の乞食仲間で「黑頭巾」といふ通稱で呼ばれ、提琴を奏流し小唄をうたつて錢を乞ふ乞食であつた。その後、ナアロオの邸の留置場に押込められてゐ、ラ・ヴオアザンがナアロオを毒殺した現場を窓から隙見してルーヴオア侯に密訴したのもこの男の仕業だつたと思はれる。

聖ジャンの林に手箱を掘出しに來たところなぞを見ると、まさしく佛國警察密偵部の一人だと思はれるのだが、それがどういふ理由で、この長い間、鐵假面を被せられピニュロールからポルト・デグジール、聖マルグリート島からバスチーユへと次々に送られ、この重い假面を被つたまゝ死ななければならなかつたのか。

ピニュローの監獄から方々の監獄へサンマルスが轉任するたびに引連れて歩いてゐたのは、いつもたゞ一人の鐵假面であつて、聖マルグリート島からバスチーユへ送られて來たときもやはり輿は一つ。

してみると、長い間、アルモアーズかオビリエ大尉かとばかし思つてゐたのは、その實、名も知らぬこの忌はしい髏髑男であつたと思ふほかはない。

三人は驚きが靜まると、椅子を寄せ合せてこの謎を解かうと、さまざまに意見を述べ合つたが、鐵假面が髏髑男であつたといふことは如何にしても動かすことの出來ぬ事實なので、この上は、この不吉な男に解毒藥を嚥ませて生返らせ、どんな素姓で、どんな理由で、また何時から鐵假面を被されるやうになつたのか、その邊の事情をくはしく物語らせたら何かの手掛があるかも知れないといふので、ヴオアザンが細かく指圖して來た通りに解毒劑を嚥ませてみたが、それから一時間も經、もう眞夜中にも近くなるといふのに蘇生するようすも見えず、依然として不氣味な死體を椅子に托してゐる。

ラ・ヴオアザンの手紙では、幾度も試驗したのだから決して心配はないとあつたが、何といつても生返らぬものはしやうがない。どうしやう思付もなく首を垂れて溜息ばかりついてゐるところへ、內陣の奥から靜かにこちらのほうへ近づいて來たのは、この聖ポオルのジロオ長老。

驚いて椅子から起ちあがらうとする三人を手で制へ、聖畫の中の聖人のやうな神々しい面に穩かな微笑を浮べながら、

いや、何も驚かれることはない。さつきからあなた方のしたことはみな知つてゐる。……わしがこへ來たのは咎めるためではなく、あなた方の罪深い仕業を贖罪させ、かりそめならぬ不幸を慰めるためぢや』

と言つて、テレエズのはうへ向直り、

『今から三十年前、わしがまだブリユツセルの聖ジヤン寺にをつたとき、あなたはもう一人の若いお連れと林の奥へ何か不思議なことをしに來られた。それから二十年たつてあなたと再びこの巴里で邂合ひ、わしがあなたの懺悔を聽問するやうになつたが、わしはあなたをひと目見るよりすぐ廿年前のあの夜のことを思ひ出し、あなたの身の上に何か深い事情があるのだと察しをつた。懺悔の折にもあなたはじぶんの過去には觸れられず、わしの方からもむかしのことなぞは一度も言出さなかつたが、ついこの頃、端ないことからあなたの身にかゝる、ありやうもない不幸な事情を聞き知り、哀れと思つてをりましたのぢや』

ジロオ長老は、哀むやうにテレエズの顏を見て、

『それで、あなた方は長らくの望みを達しられたかの』

テレエズは、涙を流し、

『話出せば長いことで、とても一と口には申されませんが、三十年もの間、どうかして救出したいと

骨を折つたすゑ、天の理にも人の法にも外れたこのやうな怖ろしいことまでして救出して見ますと、それは、名も知らぬこのやうな怖ろしげな男でございました。何といふひどい不運があたしを捉へてゐるのでございませう』

『人違ひといふのは、それはどういふ理由から?』

『それはいまも申上げました。あたしが尋ねてをりますのは、こんな髑髏のやうな男ではございません』

長老は、あゝ、氣の毒な、と、呟くやうに言つてから祈るやうに眼を閉ぢ、

『あなたが救出さうとしてゐたのは、今から三十年前、一六七二年三月十八日の夜、ペロンヌの要塞に近い「半獅神の淵」で捕へられた由ある若い騎士であらう』

『はい、その通りでございます。……では、あなた様はどうしてさういふ國家の祕密を……?』

『それと申すのは、わしはこの哀れな囚人の臨終の際に立會ひ、事細かに臨終の懺悔を受けたからぢや。……さればこそ、どういふ不幸があなたにあり、どういふ目的でこのやうな罪深いことを企てたかよく知つてゐるわけ。……あなたはじぶんの尋ねる人はこんな髑髏のやうな男ではないと言はれたが、この哀れな囚人とても初めからこんな髑髏のやうな顏ではあらなんだのぢや』

テレエズは、身を反らして、

『と、仰しやいますと、つまり……』

『これこそ、あなたの尋ねるその人であるのかも知れん』

お、、すると、この忌はしい髑髏男が愛するマルセルの變身だつたのか？

テレエズは大波が寄せるやうに騷立つ胸を鎭めながら、思ひを凝らしてかんがへ回らすと、なるほど、いろいろと思ひ當ることがある。

だいいち、「半獅神の淵」の事件があつてから三月ほど後に手箱を掘出しに來たこと、じぶんとマルセルのほか、この世に誰も知らぬ手箱の在所を知つてゐたとすれば、なるほど、あれはマルセルだつたとも思はれる。あの時、何かブツブツ呟くその聲が、たしかにどこかで聞いたことがあると思ひ、思はず耳を欹てたことも覺えてゐる。鼻も唇もなく、そのために空には響いたが、その聲の中に忘れられぬ響きがあつて、それが強くじぶんの耳を打つたのであらう。ナアロオの留置場に入れられたとき、懷かしさうに這つて來てはじぶんに縋りついたが、それもそのはず、死んだと思つたじぶんに思ひがけないところで邂逅ひ、懷かしさのあまり抱かうとしたのであらう。さうとも知らずに一圖に驚き怖れ、聲をあげて逃げ廻つたが……。

テレエズは、さまざまに思ひ來たると、恨めしいとも悲しいとも情けないとも何とも言ひやうのない思ひに胸を引裂かれ、兩手を顏にあてて啜泣きながら、

『では、この囚人はもとは由ある騎士だつたと、たしかに、さう申しましたか』

『たしかにさう言つた。……むかしは愛したこともあり愛されたこともあつた。この顏とて、以前はてしまひ、人が見ると魔物でもあるかのやうに逃出すので詮方なく黑い頭巾で顏を隱し、世渡の法もないから乞食の群に落ち、唄をうたつては門付をしてをつた、と』

テレエズは、涙に濡れた顏を振上げ、あるまじいほどに取亂しながら、

『もう一と言お訊ねしたいことがあります、長老樣、その男は由ある騎士で、その名を、もしや、オビリエ大尉とは申しませんでしたか』

長老は、靜かに首を振つて、

『いや、さういふ名ではない、オビリエなどといふ名ではなかつた』

一六七二年三月二十八日の夜、「半獅神の淵」で捕へられた騎士でオビリエ大尉でないといふことになれば、言ふまでもなく、それはマルセル・ダルモアーズ。

この髑髏の男がマルセルだつた！

一度は聖ジヤンの林で、一度はナアロオの留置場で一度は三間と離れぬところからその聲を聞き、一度は互の手まで觸合つたものを、それとも知らずにバスチーユにゐるものとばかし思ひ込み、心も

減りつくすやうな思ひでさまざまに追ひ焦れてゐたとは！

自分にもうすこし強い信念があり、マルセルのほかは手箱の在所を知つてゐるはずはないと思ひ、あの時こちらから聲をかけてゐたら、この三十年の苦勞はなかつたわけ。

たとへ、髑髏のやうな顏であらうと鬼のやうな顏であらうと、それがマルセルその人なら、恐ろしいことも怖いこともない。いつそ、その不幸の故に愛の糸が強く結ばれ、瞬時も離れぬやうにして暮すことも出來たらうものを。

テレエズはやるせない悲しみで胸が張裂けるやうな思ひ。溢れるやうな涙のなかで、

『あゝ、知らなかつた　知らなかつた。この世に、あたしのやうな不幸な女があらうか』

と、身悶へしながら石疊の上に泣崩れた。

この世に薄命といふ運數があり、その相はさまざまであらうけれど、テレエズのやうな數奇不幸な運命もまた少いのであらう。現在その人を見ながらその人と思はず、三十年の間、心を碎き身を粉にしたすゑ、さて、いよいよその人に邂逅つたとなると、はや命の息吹の通はぬ冷たい骸し。しかも、その命を縮める毒を嚥ましたのは、テレエズであつたとは。

八、納骨洞から出た男並に、逃げたもう一人

身も世もないテレエズの歎きは、またコフスキー、ブリガンベールの歎き。言ひやうもない悲痛悲慘な成行に、二人は互に肩を抱いて涙に咽んでゐると、長老は靜かに眼を開いて、

『その歎きは尤もだが、たとへ、どのやうに數奇な運數も、これはみな生れる先から定まつた宿命。長らく搜し求める者に毒を嚥ませるのも宿命なれば、嚥まされるのも宿命。みな前世から決つてゐる因緣事。髮の毛一筋人間の力では死なすことは出來ぬ。いはんや、人間の命を人の力なぞで左右出來るものではない。みなこれ、神の御意志、攝理の然らしめるところ。その悲しみは尤もだが、いつまで歎いても詮ないことぢや』

と言つて、コフスキーに向ひ、

『あなたは牢奉行サンマルスの執事で、今日埋葬の式にもお立會なされたが、それについて、ひとつ訊ねたいことがある。サンマルス樣から指圖で、過去帖には「マルチエル」と認せといふことでその通りに計つて置いたが、あれにはどんな仔細があるのか。わしが臨終に聞いたのはマルチエルなどといふ名ではなかつた』

コフスキーは、進み出て、

殘念ながらその仔細は存じません。たぶん、鐵假面の素性を永久に他人に知らせぬためそのやうな思ひ付の名をつけたのだらうと思ひます。……あなた樣がお聞きになつたのは、もとローレンヌの騎士で、マルセル・ダルモアーズといふ名でございましたでせう』

長老は、また首を振つて、

『いや、さういふ名でもない。……わしが聞いた名は、ロリツプ・トウリエと言つた』

コフスキーは、え、え、え、と消魂しく叫びながら、長老のはうへ詰寄り、

『ロリツプ・トウリエ。……あの、……ロリツプ・トウリエと申しましたか』

『わしに聞違ひはない、たしかに、さう言つた』

ロリツプ・トウリエ！

思ひもかけぬ。鐵假面こそは、ロリツプ・トウリエだつた。

己れ一個の立身のためにナアロオの手先になり、オビリエ大尉などといふ僞名で先鋒隊に入りこみ、人を疑ふことを知らぬ新教徒の素朴な心に附入つて眞しやかに誠實を見せ、畢生の事業を過たせて十三人の命を「半獅神の淵」の藻屑と消えさせたロリツプ・トウリエ！　佛蘭西第一の美男子と謳はれたその身が、このやうにも怖ろしい姿に成下り、鐵假面を被つたまゝ土饅頭の下に葬られたと思ふ

と、むしろ小氣味いゝほどにも思ふが、それにしても、死んでから後も三人の心を迷はせ、苟にもせよ、要らぬ悲歎の淵に沈ませたと思ふと、これも因緣事ではあらうが何とも忌々しく、コフスキーもブリガンベールもむしろ呆れ返つて椅子の上の髏髑面を睨めつけてゐると、ジロオ長老は言葉をついで、

『この囚人がこんな忌はしいやうすになつたのには信じられぬほど次第があつたのぢや。かい摘んで言ふと、その夜「半獅神の淵」を渡るとき、このロリツプとやらは、殊更に一同から遲れ、殿になつて行つたが、丁度河の中瀨の一番流れの激しいところへ來たとき、これも因果應報、擊出された彈丸に肩を擊たれて河の中に射落された。何しろ流れが速いので一時間も流されたすゑ、蘆の生繁つた泥田のやうなところへ這ひあがつたが、如何にも泥が深く、腿のあたりまで踏込む足を引拔き引拔き五六町も歩んださうなけれど、そのうちに精根がつきて蘆の根方に倒れて氣を失つてしまつた。……さて、幾日そこに倒れてゐたかまるつきり覺えがないが、フト正氣に返つて見ると、自分は眞暗なところに寢かされてゐる。いつたいどこにゐるのだらうと起きあがらうとしたが、頭が支へて身動きも出來ない。手を伸ばして搜つて見ると右も左も板で圍はれてゐる。初めは合點が行かなんだが、そのうちに、じぶんは氣絕して倒れてゐるうちに死んだものと思はれ、村人の厄介になつて棺に入れられ、地の底に埋められたのだといふことがわかつた。さう氣がつくと俄に怖ろしくなり、じぶんがまだ地

の底で死なずにゐることを人に知らせねばならんと思ひ、あらん限りの聲をふり絞つて、助けてくれ、俺は生きてゐる、と叫んだが一向何の返事もない。こんなことをしてゐては餓ゑて死んでしまふほかはないから、どうかして土の底から出なくてはならぬと足を縮めて懸命に棺の蓋を蹴りつけると思つたより造作もなく蓋が外れたので、ヤレ助かつたと、夢中になつて棺の外へ飛出した。ところが、土の底だとばかしきめてゐたのに、どうもさうらしくない。不思議に思つて手で搜つて見ると、左右の壁に累々と人の骨が積上げてある。それで、じぶんは今まで納骨洞の中にゐたのだといふことがわかつた。納骨洞ならばどこかに入口があるにちがひない、と安心して骨の隧道の中をソロソロと歩いて行くと、果して端は石段なり、そこに出入口の扉がある。嬉しやと思つたが、その悦びも束の間、嚴重な鐵の扉には鍵がかゝつてゐると見えて押せども突けども開くやうすがない。棺からは出たが納骨洞から出られなければやはり餓死するほかはない。誰かこの扉を開けに來ぬかと空しいことを頼みにしながら石段に腰をかけて待つてゐたが、いつまで經つてもやつて來る者がない。そのうちに睡氣がさし、眠つては覺め、覺めては眠り、何日かわからぬほど經つた後、扉に鍵を挿込む音がし、扉を開けて人が入つて來る音がするからヨロヨロと石段をのぼつて行くと、入つて來た二人は龕燈の光でロリップの顏を見ると、幽靈が出た、と叫んで扉を開放したまゝ轉がるやうに逃げて行つてしまつた。……ロリップは蘇生した思ひで納骨洞から這出し、あたりを見廻すと日が暮れてまだ間もない頃と見

え、すこし離れたところに燈火が見える。よろめく身體を引立てるやうにしながら。そちらの方へ辿つて行くと、そこは相當盛つてゐる宿場の外れで居酒屋のやうなものもある。何しろ腹が減つて堪らないから、ともかく食物にありつかうと居酒屋のなかへ入つて行くと、その中で飲み喰ひしてゐた大勢の客や給仕がこちらを振向くなり、惡魔でも見たやうに恐怖の叫聲をあげて一人殘らず逃出してしまつた。いくら墓場から出て來たにしろ、かうまで人に怖られるわけはない。何かじぶんの姿に變つたところでもあるのだらうかと、壁にかかつてゐた鏡の前に立つと、そこに映つた凄まじいじぶんの顏。あまりの怖ろしさに、アツと聲をあげ、どこといふ當もなく倒れるまで驅けつゞけた。それにしても、じぶんの顏が髑髏に變るわけなぞはない。多分じぶんの氣のせゐだつたのだらうと手で顏を觸つて見ると、夢でも氣の迷ひでもない。掌にぢかに觸るのは皮膚ではなくつて冷たい骨。顏ばかりでなく、手足さへところどころ崩れて半ば骸骨同然になつてゐる。……これはあとでわかつたことださうだが、數へてみると、「半獅神の淵」(デーフリ・ド・グリッフオン)で死んでから納骨洞で生返るまでに凡そ三十日ほど經つてゐたといふことぢや。こんなためしは稀にはあることださうぢやが、つまり一旦死んで血の循環がとまり、半ば腐つて骸骨のやうにはなつたが、それでもどこかに生氣が殘つてゐてまた血が循環しはじめ、腐つたところがソロソロと癒つておほかた腐れが乾いたといふ頃に何かの拍子で息を吹返したのだと思はれる。……まア、理窟はさうぢやが今まで美男子のなんのと言はれてじぶんの容色を

誇つてゐた男だけに、かういふ醜い顏になつたことが何にも增して辛い。こんな顏でこの上、生伸びるよりはいつそ身投げでもして死んでしまはうと思詰めた。そのうちにソロソロと東が白み、往來に人の影が見えだしてきた。人の姿はなつかしいが、じぶんの顏を見られるのが何よりも辛い。そこで外套の袖を拐り取つて袖口の細いところを玉に結び、逆に顏に被り、棒片を杖にして淵川を尋ねてトボトボと歩きだした。……西も東もわからぬまゝ半日ほど彷徨つたすゑ、やうやくオルネエ河のそばに出たが、かんがへて見ると、じぶんはこれでも一廉政府の役に立つた男でもあり、王族や近親が聯盟した謀叛の加盟書が入つた手箱の在所も知つてゐる。それを掘出して政府の手へ渡したら莫大もない褒美にありつくことが出來る。何も死急ぎをする必要はないと、そこで氣持を變へ、乞食をしながらその手箱の埋めてあるところまで行つて見たところが、もう誰か掘出したあとと見えて、それらしい物もない。一旦は落膽したが、じぶんは謀叛黨のなかへ入込んでゐていろいろな祕密も知つてゐる。それを言立てゝ幾らかの賞與にありつかうと巴里まで行つたところ、賞與どころか國家の祕密を知つてゐる危險な人物だといふので鐵の假面を被されてアルプス山中のピニュロールの監獄に送られてしまつたといふことぢや』

ジロオ長老の長物語に、ロリップのオビリエ大尉がどういふ次第で鐵假面を被されたかその經緯はよくわつたが肝心なマルセルの方はどうなつてしまつたのか？　テレエズがその問ひを發しようとしてゐると、唐突にコフスキーが口を開いてブリカンベールとテレエズに向ひ、

『今まで長老の話をうかゞつてつくづくとかんがへてみますと、テレエズ樣、われわれがペロンヌの要塞で隙見した鐵假面はたしかにオビリエ大尉ではありません。なぜかと申しますと、われわれが鐵假面を見たのは「半獅神の淵」のあのひどい騷ぎのすぐ翌朝でしたが、その時はオビリエはまだ蘆の生へた泥田のなかに倒れてゐて捕へられてはをりません。してみれば、われわれが見たあの鐵假面はたしかに旦那さまだつたはず。……二人の士官のうち一人は死に、一人は捕まつたつといふことでしたが、今の長老の話から推しても、死んだと思はれた方がオビリエで、捕はれて鐵假面を被された方こそ旦那さまでなければならぬわけです』

明白な事理に、二人がうなづくのを見て、コフスキーは、言葉をつづけ、

『さて、その後のことですが、ペロンヌの鐵假面が巴里へ送られるまで私は一日も眼を離さずにをりましたが、バスチーユにゐたのもやはりアルモアーズさま。また、バスチーユからピニュロールへ送られたのもやはり同じくアルモアーズさまです。なぜと申しますと、イスナアール男爵の話にもあつたやうに、鐵假面がバスチーユからピニュロールへ送られたときは、オビリエはまだ黑頭巾を被つて巴里を彷徨ひてゐましたのですから、この時はまだオビリエは鐵假面ではないはずです。……問題は、つまりピニュロール。オビリエの鐵假面がいつピニュロールへ送られて來たかそれは存じませんが、

旦那さまの方がいつの間にか消えてしまひ、オビリエと入替りになつたのはたぶんその後の出來事です』

監獄にゐた人間が消えて失くならうはずがなく、してみれば、いつの間にか死んで祕かに葬られてしまつたのだと思ふほかはない。この思ひはすぐ三人の胸に通つたが、さうと口に出す者もなく、しよんぼりと首を垂れてゐると、ジロオ長老はまた口を開き、

『その邊の事情については、ロリツプ・トウリエの告解の中にもあつたのぢや。あるとき、突然、サンマルスがロリツプのところへやつて來て、「白助」と呼んでゐたもう一人の鐵假面のはうが昨晩死んでしまつたが、それでは政府にたいして具合が悪いから「黑助」のお前のはうが死んだことにし、お前を「白助」にし、本物の鐵假面はまだ生きてゐることにするのだから、そのつもりでゐろ、と嚴重に云ひつけたさうな』

テレエズは、ブルブルと身體を顫はせ、

『すると、マルセルは、やはり死んでしまつたのです』

悲しげに呟くのに、長老は答へず、

『替玉をしたことが露見してはたいへんだと思つたものか、今まで置いてゐた二階の監房から引出して地下の監房へ移してしまつたといふことぢや』

コフスキーは唐突に口を挾み、

『一寸、お待ちください。地下の監房に移されたといふのは何時頃のことでございますか』

『地下牢へ移されてから間もなくポルト・デグジールへ行つたから一六八一年の春の末頃だと言つてゐた』

コフスキーは、不審らしく眉を顰めながらブリガンベールに向ひ、

『八一年の春の末といへば、お前がスニユロールから救出されたと同じ頃だが、その後で俺がビニユロールへ入りこんでそれとなくやうすを訊いたところでは、ブリガンベールといふ男が脫獄したために鐵假面が地下牢へ移されたと言つてゐた。ところで、いま長老さまの話をうかがうと、もう一人の鐵假面が死んだので、それでオビリエの鐵假面を地下牢へ移したとあるこの邊に何か腑に落ちぬところがあるやうには思はぬか』

長老は脇から引取つて、

『その夜、……つまり、もう一人の鐵假面が死んだといふその前夜、監獄から逃出した者があつたといふことはロリツプも話してゐた。……その夜の一時頃か二時頃か、窓の外で妙な物音がするから寢床から起出して窓際に身を寄せて聽耳を立てると、じぶんのところから二つ上の三階の部屋の窓を鑪で挽切る音がし、間もなく誰か繩を傳つて塀の上端へ降り、それから塀の外へ出て行つたやうだつた

と言つてゐた』

ブリガンベールは、聲をあげて、

『實は、それは私でございます』

『おゝ、さうだつたのか。……さうして易々と逃げて行くのを聞いてロリツプは羨ましく、どうかしてじぶんも逃げられまいかと窓のそばにへばりついてゐると、またしても上から誰かゞ繩を傳つて降りてくる者がある。おや、また一人逃げて行く奴があると、いよいよ恨みがましい氣持になつてゐると、こんどは塀の外へ出るのではなく、じぶんのすぐ上の二階の窓のあたりに停つて、また窓の鐵格子を挽切りはじめたといふ』

アリ・ベーが三階の窓を破つてブリガンベールを救出したことはみなが知つてゐるが、その後でまた二階の監房の窓を壞しはじめたといふことは初耳なので、息を詰めて長老の顏を瞶めてゐたが、コフスキーは堪りかねたやうに、

『それで、その窓は誰がゐた監房の窓なのですか』

『そこは「白助」と呼ばれてゐた鐵假面の監房で、ロリツプのゐる部屋から一つおいて隣並びになつてゐたといふことだ』

テレエズは、叫ぶやうな調子で、

『あゝ、わかりました、それこそ紛れもなくマルセルの押込められてゐた監房の窓です。ラ・ヴオアザンも塔の矢狹間からブリガンベールの監房の窓へ繩を垂らすと、その繩はまつすぐにマルセルの部屋の窓まで垂れるはずだと言つてゐました』

悅びに堪へぬやうに手を拍合せ、

『ヴオアザンは塔から繩傳ひに降りて、まづブリガンベールを救出し、その次に鐵假面の窓を破れと云ひつけてゐましたが、アリ・ベーは、すると、死ぬ前に鐵假面を救出してしまつたのです』

ジロオ長老は、うなづいて、

『ロリツプの言ふところも何でもそんなふうだつた。……どうするかと見てゐると、やがて窓を破りをへ、何かヒソヒソ話合つてゐたが、一人がまづ先にスルスルと塀の上端まで降りてきて待つてゐるうちに、また一人が塀の上まで降りて來、先に來たはうが後に來たはうの胴中を繩で結び、ソロソロと塀の外に落してやり、充分に時間がたつてから今度はじぶんが降りようとすると、サンマルスがそれを見つけ、いきなり鐵砲を射ちかけたので降りるにも降りられなくなつたとみえ、反對にズンズン上へ逃上つたが、やはりいけなかつて鐵砲に射ち墜されてしまつたといふことであつた』

すると、アリ・ベーが塀の外へぶらさがつてサンマルスに發見されたときは、もう「白助」の鐵假面は地面に着き、繩を解いて逃去つた後なのであつた。

すでに監獄から逃げてそこにはゐないものをさうとも知らずにその後廿年の間、無駄骨を折つたのは何とも情けない次第だけれど、何といつても無事に逃出したといふことを聞くと、三人は喜悅の情に醉つたやうになつて、かたみに手を取合ひながら嬉しさの涙に咽んだ。

ジロオ長老は、急に重々しい口調になつて、

『さて、これでわしの務めはすんだ。わしはこの世でたつた一人、この不幸な囚人の臨終の懺悔に立會ひ、誰も知らぬ祕密を聽取つた。差出がましくあなた方の事情に立入ることは要らぬのだが、わしが口を噤んでゐると、鐵假面の謎を永久に解明かす者がなく、あなた方の迷ひの種になる。それを知りながら黙してゐることが出來かねたによつて、せでもよいことをしたが、さて、鐵假面がその後どうなつたか、わしにお訊ねなさつても。わしは知らぬ。それを捜出す相談はあなた方の間でしていただくことにして、あなた方はまづ掘返したこの棺を元のところへ返し、以前あつた通りにして置かねばならぬ。それはあなた方の義務でもあれば、死者にたいする禮儀でもある。……このロリップ・トウリエといふ者はあなた方に仇をした憎い奴。もあらうが、死んでしまつた以上、その罪は天に歸したわけ。……生きてゐる間の所業は如何にも不屆であらうが、この者は死ぬ間際に充分に後悔し、己の惡業をことごとく懺悔して死んで行つたのぢや。……サンスの山莊で、そこにゐられるコフスキーどのを見かけたとき、アルモアーズとやらの殘黨が生殘つて仇を返すためにじぶんをつけ覘つてゐるのだと悟つたさうな。これを嚥めば助かると、何やら藥のやうなものを渡されたとき、ロリップはすぐ、じぶんの命を奪るための毒藥だと感付いたが、もうこの世に生きてゐることに厭き、じぶんがこんな因果な目に逢ふのも むかし素朴正直な人達を欺いて淵川の藻屑としてしまつたその報ひ。承知で仇を返される氣でそれを嚥んだといふことであつた。この世に懺悔によつて消えぬ罪はなく、罪が消えれば未生以前の無垢清淨。さまざまな惡業があつたとは言ひながら、これもまた哀れな一個の肉體。どうか、鄭重に棺に納めて靜かに土の下で眠らせてやつてくだされ』

三人は、つくづくと長老の情に禮をのべ、ロリップの亡骸を元通りに棺に納め、墓地へ運んで土をかけ、その懇ろに冥福を祈つた。

ソロソロ夜が明けかかり、早起きの墓守がやつて來る時刻になつたので三人は地内のテレエズの家へ引取り、これからの處置についてさまざまに相談した。

アルモアーズはビニュロールから逃れていまどこにゐるのか。

コンデ大公やチュレンヌ元帥を頼つて巴里へ來たかとも思はれるが、萬一にも兩大公に迷惑を及ぼしてはならぬと、今までゝさへ迂濶に通信すらしなかつた位だから、その危險を冒して巴里へやつて來ることはまづまづないこと。また、ブリュッセルへ入り込んだのなら、そこにはむかしの同志の幾人かがゐるはずだから、三人のところに知れないといふわけはない。